DARIF

ジョン&ちー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＡＲＩＦ

【Ｎコード】
Ｎ４４６５Ｐ

【作者名】
ジョン＆ちー

【あらすじ】
時は近未来２７００年、未確認生命体に地球を追い出され宇宙へとその居住の場を移した人類
彼らは新たなる星を求めて暗く冷たい果てしなき海を航行して行く
だがそれは無限とも思える戦いの幕開けであった
戦いの渦中に放り込まれた子供たちの運命の歯車が動き出す！！！！

プロローグ

―プロローグ―

西暦２６００年、ＮＡＳＡが打ち上げた宇宙太陽系調査衛生「ボイジャー１号、２号」が地球外生命体の反応をキャッチ、地球へとデータを送った。その５年後２６０５年に、続いて「スペース・コア」と呼ばれる宇宙エネルギーの根源を発見、これらは無限ともいえるエネルギーを保有し、石油、石炭などエネルギー問題が続出していた地球にはまさに救いの手であった。双方の発見によりＮＡＳＡは沸き立ち、世界の企業としてさらに躍進、今、地球になくてはならない存在となり、一国家ともいえる力を有した。しかし、その１５年後（地球外生命体発見から２０年後）、地球にボイジャー１号２号のシグナルを辿り地球外生命体（呼称ラテストル）が急襲、わずか１０年で人類は全人類の５分の１の１４億人にまでその数を減らした。世界各国は議会の後、２６２０年から秘密裏に開発を進めていた巨大移民船「メシア・ノア」を出航させ、地球を廃棄することを決断。そして２６３２年１２月２３日、すでに９億にまでその人口を減らした人類の内、わずか２億人が選ばれ「メシア・ノア」に乗船、地球を離れ新たなる母なる星を求めてこの巨大移民船は地球を後にした。クリスマスイブに発進したことからこれを「イブの方舟」と呼ぶ。

それから時は流れて２７００年、「イブの方舟」を知らない移民３世が誕生していた。そう、これは移民３世である子供たちの物語なのである

プロローグ（後書き）

前作「ヴァンパイフレンド」が謎の消滅……
仕方なく新しい物語を書きすすめることにいたしました

今まで通りジョンとちーによる共同作業で執筆していきたいと思いますので何とぞよろしくお願いいたします

1話～始まり～

≪ザザ～≫
打ち寄せる波の音、照りつける疑似太陽
向こうのほうに見える観光地フォナ島と、さらに向こうの観測島
浜辺で横たわった僕は終わりのある空を見上げた
「地球って、どんなところなんだろう」

僕の名前は津式光
メシア・ノアで生まれた移民３世で今は高校１年生
高校の名は第一ユニクス高等学園
メシア・ノアっていうのは移民船で、そうだな……ちっちゃい星だと思ってくれていいと思う
ちっちゃいって言っても全部で４億人が住んでる訳だからそれなりの大きさはあるケド
このメシア・ノアは船の上に「地球」ってものを乗っけた感じだって爺ちゃんがいってた
そんで、東半分は海、西半分は陸地になっている
そして「ユニクス」っていうのは土地……というか国の名前だ
この船には全部で５カ国ある
まず、さっき言った「ユニクス」
ここは結構発達した都市で人口１億人、ＮＡＳＡの本部基地もあったりする中央的な国だ
２個目はユニクスの北の隣国「アロネート」
人口１億９０００万人。東は海、西にはコストリア山脈っていうでっかい山脈が広がっていて北は大運河のシュー川、南はノイズ川という２つの川に挟まれた何とも特異な地形にある。そのため、特産物なんかが多くユニクスの食糧はほとんどここで賄われてるって話だ。

３個目はこのユニクスとアロネートに東以外の３方位を囲まれた「メロ」（東側は海）
ここは工業国でほとんど人は住んでない。それでも南のほうには１５００万人ほどが暮らしている
陸地の中央にまたがってるコストリア山脈の東側、「ユニクス」「アロネート」「メロ」とは反対側の西、つまり陸地の南西部に位置しているのが「スカビオン」
国土の半分が砂漠という過酷な環境でありながら、人口は４０００万人、その環境のせいも相まって、肌は基本的に黒く、強靭な体を持つ人が多い
そしてスカビオンの北にあり、コストリア山脈と「人」の字状につながっているイクマ山脈をはさんで北側が「アウトリクス」ここは無法地帯でアロネートともシュー川を挟んで隣接してるけどほとんど世界から隔離されている。おかげで犯罪の絶えない国だ。ちなみに人口は５０００万人くらいだ

《ザザー》
寄せては引く、気ままな波
フワフワと浮かぶ自由な雲
サンサンと照り付ける太陽
どれもが自然の光景だが、これらは全て造り物
「人工的な自然を自然と呼ぶのか」なんていつか爺ちゃんがいってたけど
いま、いや……これからずっと
これが僕の自然で、常識なんだ。それがたとえ偽物でも……
そんな物思いに耽っていると
「お～い！！津式、こんなところにいたのか！！」
と、後ろから叫ぶ声が聞こえた
誰かと振り向くとそこには加賀が立っていた

加賀裕一
彼は第一ユニクス高等学園の同級生にして僕の親友、彼は「整備士」志願だ

「どうした？」
慌てた様子の加賀に尋ねる
加賀は荒い息のままため息をつくと
「どうしたじゃないって……、久杉さんの晴れ舞台じゃないか」
と、少し呆れながら言った
晴れ舞台……
少し考え込む僕……
と、昨日先生が言っていた諸連絡の一部が頭を横切った
そして僕もまた、わざとらしげにため息をついて見せる
「……、就任式、か。」
頷く加賀

就任式――
「適合者」とよばれる選ばれた者のために行われる、言わば『名誉の授与式』
生まれながらに才能をもった者のみがこの式の主役になれる
僕はこの式が好きじゃない
理由は、そう。この式を受けるということは戦争の最前線に行くということを意味しているからだ
この世界はいまだバランスが不安定だ
たとえば、このユニクスは治安が良く、町の雰囲気もいい
しかしその反面、砂漠という地質がらスカビオンはあまり治安が良くない
砂漠というのは昼夜で気候がだいぶ異なる
故に拠点（役所など）をきまった場所に置くには暖房、冷房共に充実した設備が必要だ

しかし、風をさえぎるものがなくひとたび風が吹けば暴風となる砂漠では電柱が立てられず電気が通らない
しかもそれが国土の二分の一に渡り広がっているとなれば……どうしようもない
こうした治安の相違は必ず波紋を呼び、不満が高まり、過激派の人たちが戦争を始める
だから戦争が絶えないのだ
その最前線に行くなんて……僕は考えられない
しかし、だからと言ってばっくれていい式でもない
ましてや同じクラスの人間のとあっちゃぁ……

渋い表情を浮かべ、眉間にしわを寄せながらも
「行く……か」
そう呟くように言った
加賀は微笑んで手を差し出した
加賀はおそらく僕のこんな思いをすべて悟っているだろう
なにせお互いに認め合った親友だ
僕はその手を握り立ちあがった
すると、加賀は海岸から学校の体育館へと引っ張って行った

≪久杉優太≫
久杉の名前が体育館中に響き渡る
「はい！！」
久杉は気持ちのいい返事をして壇上へと上がった
力強い顔立ちに黒い短髪を揺らし、悠々たる態度で校長兼軍長官の前に立った
その様子を全校生徒が見守る
ある者は喜び、またある者は羨ましがり、そしてある者は蔑みの視線を向ける
何とも言えない空気のなか、校長は賞状を読み上げる

《賞状、久杉優太。右のものは動物型機動軍事兵器『ＤＡＲＩＦ』の適合者であることをここに認め、パイロットとなる事をここに表彰する
軍本部長官ジャスト・テイズ・キラー》

読み終えると校長は賞状を前に差し出す
それを久杉は右、左と順に受け取り深々とお辞儀をする
校長はそのやけに傷の多い強面には似合わない笑みをフッと浮かべると賞状を離した
久杉は微かにグッと手をにぎりしめる
そして少し間を空けクルリと振り返ると賞状を高だかと掲げた
《ワアアアアア》
同時に歓声が沸き上がる
生徒、先生、来賓、軍人までもが拍手し久杉を讃えた
僕はと言うと……
一応拍手はするけど、心の底からってわけではない
久杉が嫌いだからじゃない
むしろ久杉は尊敬できるし、僕としても好きなほうだ（もちろん、友達としてだぞ！）
ただ、やっぱり僕は『軍』ってもんが気に食わない
人を殺すのが日常……
そんなものに何故気を許せると言うんだ？
それがたとえ、友達でも。

1話～始まり～（後書き）

皆さんこんにちは、ジョン&ちーのジョンです。そしてお久しぶりです。

なぜかヴァンパイフレンドが削除されてしまったため、ちーのほうがいきなり新しい小説を書き始めました……

なんという切り替えの早さ（笑

まぁ、今回の話もどんなのになるか検討もつきませんが、最後までお付き合いくださると光栄です。

それでは、次回作にも、乞うご期待！

2話〜友達〜

就任式が終わり、僕は体育館を出た
と、その時
「津式！！」
目をやると久杉が手を振っていた

この第一ユニウス高等学校は基本的に軍人志望の人間が通う学校だ。
全校生徒の9割がそれで、僕は残り1割の数少ない生徒であり、その中でも授業をサボったりといろいろと目立ったりしている訳で……

たったいま、エリート中のエリートになった久杉に話し掛けられるのは少し周りの視線が痛かったりする訳である

「よぉ」
それとなく返事する結果になるのは仕方ない
「なんだ、どぉしたどぉした」ハハハッと笑いながら近づいてくる
まぁ、いつもの事と言えばいつものテンションだが、今日ばかりはあつかましい
「別に」
その言葉に首を傾げる
「何怒ってんだ？」
「怒ってる訳じゃない」
僕はぶっきらぼうに答える
それでもなおハテナ顔を浮かべる久杉に
「わかってるくせに」
と、呆れ顔で返す
ニヤリと笑う久杉
そう、久杉を初め僕の友達はみんな、僕が軍人嫌いな事を知っている

僕が学校で浮いている理由の一つだ
そんな考えをも見透かしたように久杉は口を開いた
「なんで、そんなに軍が嫌いなのにこの学園に居るんだよ」
おそらく、僕を知っている人間なら誰もがそう思うだろう
だが、それを自然に僕自身に聞けるのは久杉位だろう
モチロンちゃんとした（？）理由ならある
だが、そうそう口にしたい事じゃない
拒否の言葉を発そうとしたとき
「俺も興味あるな」
「僕も僕も」
と、2人の声がした
振り返らずとも分かる
「名屋に加賀か？」
「せいか～い」
ニシシシと笑みを浮かべて名屋が近づいてくる

名屋伊吹
クラスメイトの一人で久杉ほどではないもののかなり頭が良い
見るからにマジメって訳でもないが、誰が見ても好青年に写るだろう、多分……。因みに「参謀」志望だ

「話さねェよ」
又しても横暴に言いあげる
「何で隠すの？先生すら知らないんでしょ」
後から横に来た加賀が問う
僕は少し柔らかく
「多分、親も知らないんじゃん？」
と、答えた
「なんだよ、なんか俺と態度違うな」
名屋がむくれる

待ってました、と思い口を開きかけた瞬間！
「ま、津式にとって加賀は周りよりも特別だからな（笑）」
……先回りされた、しかも言い方が
僕は思った（ちっ久杉め！！）名屋は思った（なんだそりゃぁ！！）
名屋は久杉にもっと突っ込みたかったがグッと言葉を飲み込んだ
今の立場の違いでは迂闊に反論もできない
（この第一ユニクス高等学園は軍直轄ということもあり、軍志望の奴にはハッキリとした上下関係がある）
久杉は
「なにか突っ込めよ」
と、言ったが名屋は
「立場が違いますんで」
と、恐縮するばかりだった
今までと違う対応に不満を覚える久杉
だが、「参謀部」というのは全２１学部（マイナーなもの含め）の中でも取り分け上下関係にうるさい学部だったりする

なぜなら、「参謀」は自分の練った作戦をいろいろな立場の人間に見せなくてはならないからだ
各部に横に縦にと大きく関わる必要のある「参謀」は、「礼儀」が最も必要だそうだ　　ｂｙ名屋

「ケッ、参謀は融通がきかねぇからイケネェや」
嫌味た～っぷりにいいあげる
名屋は久杉を睨んだ
それを挑発するような視線で流す久杉
いつものことと言えばそうなのだが、いつもと違うシビアさに痺れを切らした加賀は
「まぁ、まぁ。今日はお祝いの日なんだからさ」
と、止めに入った

互いにフンッと鼻を鳴らす二人に、やれやれと自嘲じみた表情を浮かべる僕
おそらくみんな持っていたであろう、久杉の立場の変化による僕らの関係への不安は、とうに消えていた
そんな和やかな場を僕らは長らく楽しんだ、軍人が久杉を呼びに来るまでは

ＳＩＤＥ久杉
みんなで世間話などをしていると
「久杉くん」
と、女性の声がした
（なんだ、この面白い時に……）
そう思い振り返ったのもつかの間、そこに立っていた人物を目で捕えると僕はいつの間にか敬礼していた
軍人としての礼儀が身に染みついたと喜ぶべきなのだろうか？
茫然と立ち尽くす皆を余所に、僕はその人物の名を言いあげた
「蓮華、少将」

ユニクスの軍隊「ＰＥＡＣＥ　ＴＲＥＡＴＹ（平和条約）ＡＲＭＹ（軍隊）ＳＯＬＤＩＥＲ（兵士）ＣＯＵＮＴＲＹ（国）、通称Ｐ，Ａ，Ｓ，Ｃ，（パスク）」
そのＰＡＳＣの中でも最も優秀な兵士、将官クラスの一人、蓮華少将
金のセミロングヘアに黄色の目、整った顔立ちに将官クラスとは思えないあどけなさの残る若干１７歳（僕らより一個上）の天才だ。
年の割に体もなかなかの稜線のラインで、正直言って美しい

「久杉君、パイロットになって佐官クラスになったからって、いきなり招集命令の無視ってどうなのかしら？」
蓮華少将はそういうと携帯を取り出して、その発信履歴に残る僕の

名前を指差した
それを見ても瞬間的に判断できなかった僕は少し固まってから、慌てて自身の携帯をとりだした
「着信、４件……」
そのすべてが蓮華少将からだった
恐る恐る顔を上げると……
そこには笑顔のまま僕に迫る蓮華少将がいた
僕は後ろ歩きでで蓮華少将から少し離れ、手をせわしなく動かして
「ス……スミミマセン！！テイズ長官からは式典後の招集はないものと聞いていたので（汗」
と、もっともらしいことを言ってみる
すると蓮華少将はクプッと、笑いをこらえるような仕草をしてから
「アハハハハハハハハ」
と、笑いだしたではないか！！
思いっきりハテナ顔の僕に
「この人大丈夫か？」
と、名屋が横から聞いてくる
「さ……さぁ？」
聞きたいのは僕のほうだ
「アハッアハハ、ハァ」
笑い終えてもなお、お腹を押さえながら蓮華少将は言った
「嘘よ、う～そ。私に新しい部下が出来たって聞いたから、いったいどんな人か確かめたかっただけ」
「た……確かめたかったって……、自分と少将は幾度もお会いしてるではありませんか」
やっと、落ち着いてきたので敬語を使い始める
後ろで津式たちがクスクスッと笑う声が聞こえた
「でも、やっぱりさ、部下になるかならないかじゃ人の見方も変わってくるでしょ？もしかしたら命を預けなきゃって場面も来るかもしれないし」

サラッととんでもないことを言いだしたよ、この人
「そうかもしれませんが……その……自分は今、こうして友人との時間を楽しんでる訳でありまして」
正直、今の時間は邪魔されたくない
軍に入ったらこうした時間は早々取れなくなるだろう
ましてやイザとなったら最前線で戦う「パイロット」だ、もしかしたら明日は命がないかも……考えたくはないが。
しかし、そんな僕の思いとは裏腹にあろうことか少将は涙目になって
「そんな、隊のリーダーたる私の誘いより、友達のほうがあなたにとって重要事項というの？」
と、手で涙をぬぐうモーション付きで言う
そんな……その顔でそんな事やられたら演技って分かってても！！！

……
ん？まてよ？誘い？
僕は疑うような目つきをしてから恐る恐る聞いた
「あの～、少将殿？その誘いというのは？」
そう話に食いつくそぶりを見せるや否や、今までの顔が嘘のようにパァァっと明かるくなって
「ＤＡＲＩＦよ、ＤＡＲＩＦ。あなた、まだ自分のＤＡＲＩＦ見てないんでしょ？」
と、質問に質問を返してきた
あまりの急変さにたじろぐ僕
それでもなんとか答えた
「え……えぇ、まぁ」
そう受けこたえた僕に間髪いれずに少将は言った
「だったら見に行こうよ、自分の相棒を熟知してこそのパイロットよ！！」
ウィンクしながら言われては、もう反論などする余地もない
ちょっと間を空け

ハァ……
と、声に出さないようため息をついてから
「分かりましたよ」
と、言った
「やったぁ、アリアちゃんもつれてこうね！！」
（このアリアというのは少将が受け持つ２人のパイロットのもう一人の名前だ）
「はいはい」
テキトーにうなずくと
「これでも一応立場上は上なんだからね」
と、少将は仏頂面をする
それを見て、すこしいたずら心に火が付いた僕は
「すみません、少将殿。私（わたくし）が自らの機体を確認するのに少将自らが御足労いただく訳には参りません。どうか、本部へと戻りゆっくりしていてください」
と、バカ丁寧に言った
「そんな挑発！！」
と、言った少将の言葉を聞かず、格納庫へと向かうそぶりを見せると
慌てて少将は
「分かった分かった、私の負け！！だから一緒に行こう」
と、手を握ってきた
何とも言えない優越感

なぜこんなに少将と仲がいいかって？
それは僕の母親の友達の子供こそが、この蓮華少将だからだ
つまり……幼馴染ってわけだ

「じゃぁ、そういうことだから、また今度」
クルリと皆に向き直り手を振る
依然、ニヤ付きながら、３人で声をそろえて

「ごゆっくり～」
と、言われた時はどれほど殴ってやろうと思ったことだろう

2話～友達～（後書き）

こんばんわ、ジョン&ちーのジョンです。
今年もあと3日ですよ、3日！（2日と6時間４０分くらいか（笑）
今作では、新キャラの説明は本文の方でされているので、省略させていただきます。

さて、やっと出てきましたね、名屋（笑
あと、新キャラの連華は、久杉の幼馴染って……
一体、どういう設定なんでしょうね～。何か考えているんでしょうか……
まぁ、次回では久杉が自分のＤＡＲＩＦと対面します！この作品の名前、「ＤＡＲＩＦ」とは何なのかが次回で明らかになることでしょう。
なお、次回の更新は１２／３１、つまり大晦日を予定しております。
それでは、次回、乞うご期待ください。

3話～ＤＡＲＩＦ～

ＳＩＤＥ久杉
ユニクスの東海岸
ここは埋め立て地で歯のように四角い地形が海に飛び出ている
その一角に、ＤＡＲＩＦ収容の格納庫がある訳だ

格納庫の前へと着いた僕ら
隣には蓮華少将とアリアさんがいる

アリア少佐
赤いウェーブのかかったロングヘアで瞳は澄み切った淡いピンク、
４０代とは思えないほど若々しい

「楽しみね」
アリアさんはそう言うと僕に微笑む
「えぇ」
返事する僕の意識は完璧に格納庫に向いていた
そんな僕を見て、アリアさんはフッと笑うと彼女もまた、格納庫へと向き直った
「準備が整いました」
整備士の一人が僕らに言う
「いよいよね、久杉くん」
少将があからさまにワクワクした様子で言いあげた
「少将がワクワクなさってどうするのですか」
笑みを交えながらアリアさんが的確に突っ込む
うんうんと、頷く僕
それを聞いて
「いやぁ、だってさアリアちゃん、新しいＤＡＲＩＦだよ？私じゃ

なくてもワクワクするよ。アリアちゃんだってそうでしょ？」
と、少将は依然目をキラキラさせながら言った
「まぁ、それは……」
アリアさんもまんざらでもないようだ
少将はさらに
「私はむしろ久杉君がそんなに冷めてることの方が驚きだよ」
と、視線を僕に移した
突然話を振られて数秒間があく
その間に、アリアさんも興味の視線を向けてきた
あからさまに答えづらい空気がたちこめる
別に興味が無いわけじゃない、むしろこれから相棒となる機体に対面するのはとても胸が高鳴る
しかしそれと同時に、機体を見れば、これから僕を襲うであろう運命の波から逃げる事が出来なくなるという……そうだな、恐怖（？）だろうか。
とにかく、そういうものに刈られてしまう
適合者に選ばれた時点でもう逃げられないのだろうが、やはり実感するのは機体を目にした時だろう
しかし、それを同胞と上司の前で言うわけにはいくまい
「緊張してるだけですよ」
視線は合わせない、合わせられない
ふ～んと、不満げな声を上げる少将だったがそれ以上詮索はしなかった
格納庫に目を向け直すと、少将は門を開けるよう示唆した
それを合図にゆっくりと門は開き始めた

暗かった格納庫内に一筋の光が差し込む
それは、そこにあった巨大な物体の姿をあらわにした
銀色のフォルム、そこに走るイナズマを思わせる青いライン、それを伝うように並んだ鋭利な突起物、強靭な４本の足に細長い尾、そ

の全体の色合いからは掛け離れた赤の細長い目に漆黒の牙
「これが……」
僕は思わず呟いた
隣で二人は息を飲む
そんななかに、眼鏡を掛け白髪を逆立てた男性の声が響いた
「型式ナンバー『ＢＹ－１３Ｐ』タイガー型のＤＡＲＩＦです」
その声で我に帰った３人はフッとそれを言った人物をみた
「ピジェット大尉」
アリアさんが名を呼ぶ

ピジェット大尉
整備士のトップに立つ２０代後半の男性。メカいじりが大好きで、整備士でありながら新しいＤＡＲＩＦを手掛けるほどだ。無論、その腕は一流

「どうです？久杉少佐」
「あぁ、カッコイイな」
率直な感想を述べるとフラフラと吸い寄せられるように自機に歩み寄る
その様子を静かに見つめる３人
僕は恐る恐るゆっくりと手を伸ばしそれに触れた

Ｄｅｓｉｒｅ≪希望≫　Ａ　ｂａｔｔｌｅ≪戦闘≫　Ｒｏｂｏｔ≪ロボット≫Ｉｎ　ａｅｔｅｒｎｕｍ≪永久に≫　Ｆｏｒ　ｈｕｍａｎ≪人類の≫
略してＤ，Ａ，Ｒ，Ｉ，Ｆ「ダリフ」
ラテストルの襲撃を受け絶滅の危機に瀕した人類が計画していた、彼らに対抗するための手段
その形状は当時の地球に生息していた動物を象っている
しかし、結局製造は出来ず、オーバーテクノロジーとして片付けら

れてしまった
だが、メシア・ノアにてそれが実現
動力源に「スペース・コア」を用い、独自の技術を使用してそれは作られた
しかし、製造過程で発生する『何か』により、大多数の人間には動かすことができなかった
だが「適合者」と呼ばれる一部の人間にはそれが可能であったため
その『何か』が分からない以上当初の設計図に忠実に作るほかなかった
そのため一機作るのに膨大な時間を有し、メシア・ノア内に現存する機体は分かってる上では２１機ほどである（うち、ユニクスは１２機）

３人が静かに見守る中、僕は呟くように、けれどコイツに呼び掛けるように言った
「ショット……」
しばらくみんな押し黙っていたが、その沈黙を蓮華少将が破った
「それが……、その子の名前？」
「あぁ」
静かに唸るように答える
なんてキレイなんだろう
適性調査の機械で、頭の中の模擬映像は見ていたが、これほどとは……
感傷に浸っていると、今度はピジェットが口を開いた
「ショット、ですか。それはピッタリの名前かも知れません」
「……どういうこと？」
今度はアリアさんだ
尋ねられたピジェットはコホンと一度咳払いすると語り始めた
「このＤＡＲＩＦは……そう、遠距離仕様なんですよ。無論、格闘でも他に劣ることはありませんがね。両側面に構えるスコープガン、

これは敵をロックすることが可能でサブ兵器でありながら抜群の命中率を誇ります。それに４本の足の上部に取り付けられた誘導追尾型ミサイルに機体後部から首までを沿うように並ぶ突起物は自立兵器『サスペンド』というもので、発射すればこちらがコントロールしなくとも、勝手にロックした敵に近づいて行き、バルカン砲を発射する優れ物です。さらにさらに、極めつけは上部の『Ｕ・Ｓ』発射システム付きの主砲『セイバー』です。他にも、スペース・コアから直接エネルギーを引っ張ってきたレーダーや好感度スコープなど、現存する機体でも射撃に置いては１位２位を争うでしょう」
言い終えると同時に、ピジェット大尉は僕に機体詳細の資料を手渡した
パラパラとめくって目を通す
すると、気になる点があらわになってきた
「この機体、防御力が極端に低いな、コーティングされてない」
視線を資料から大尉に向ける
大尉は俯き気味に
「それは……」
と、一旦前フリを置いて答え始めた
「コイツの動力以外のエネルギーはほとんどレーダーとスコープに回されているので……、他のＤＡＲＩＦのように表面を「スペース・コア」のエネルギーでコーティング出来なかったのです。ですが、こいつは他のＤＡＲＩＦの攻撃範囲外からの射撃が可能ですし、イザとなればレーダーのエネルギー供給パイプを頭部の『エネルギー波発生装置』に回せば、一時的ではありますが無敵の防御力を遺憾無く発揮できますよ」
なるほどな、つまりは前線にですぎるなってことか
まあ、自分は余り格闘は得意じゃないし、射撃の方が主体だからどんなＤＡＲＩＦであってもそういう戦いかたになっただろうが……
「貴方にピッタリじゃない」

少将がクスッと笑いながら茶化すように言った
「うっせ」
僕はそんな彼女にちょっと悔しさを交えて言う
それを聞いたアリアさんは
「コラッ、久杉くん！上官に向かってその言葉遣いは！！」
と、叱る
「別にいいよん」
少将はアリアさんを制すると
「で、この機体はもう支部に持ち帰っても？？」
と話を切替、ピジェット大尉に話し掛けた
大尉はニカッと笑い
「モチロンです」
と胸を張った

ＳＩＤＥ津式
「なぁ、久杉のやつ、あの蓮華少将のこと好きなんじゃねぇの？」
学生寮へと向かってる時、名屋が僕にそう言ってきた
（加賀は自宅通いだが、名屋と僕は学生寮で生活している）
「さぁな、興味ねぇや」
軽く受け流す僕
「なんだよ、冷めてるな」
名屋は不満げに声をあげた
軍人が嫌いな僕にとって、そこに起こる恋愛感情など塵よりどうでもいい
すると、名屋が突然立ち止まった
僕は名屋を振り返り
「どした？」
と、首をかしげる
しばらく何も話さない名屋

沈黙の時間が流れる――
突然の状況に困惑する僕
そんな時、名屋が一言いった
「俺は……」
何が言いたいんだ？こいつは
名屋を見る目が怪しいものを見るような視線になっているのを自分
でも感じる
そんな視線を感じ取ってかいないのか、名屋は突然叫びだした
「俺は！！！！！！」
思わずビクッとする僕
さらに名屋は小さい声に戻しながらも続けた
「俺は、アリアっていう少佐のほうが好みなんだが、どう思う？」
《ピキッ》
アニメなんかでよくあるキレたときの音がしっかりと耳に届く
本当に聞こえるもんなんだな
そして
「んなこと、知るかぁぁぁァァァ！！！！！！！」
僕は右ストレートをかましてやった

とある一室
凛とした空気がピンと張り詰める
部屋の入口の上にはＰＡＳＣの文字
壁にはその紋章（エンブレム）である、「メシア・ノア」の形と、その周りにバリ
アのようなものを張っている球体、そしてその外側にいくつもの四
角い物体が描かれている
そんな部屋に、一つの声が響いた
「駒は、揃った」

太い男の声、津式達はモチロン、みながこの声は聞いたことがあるだろう。
そんななか、その部屋の扉が開き渋い男の声が入ってきた
「報告。久杉少佐は自機と対面、蓮華隊の倉庫にＤＡＲＩＦを運搬完了したそうじゃ」
「……そうか」
キキーと、椅子の回る音がしたかと思えば、暗いその部屋に光が指した
「いよいよ、じゃのう」
渋い男がその一筋の光に照らされた大男から寸分も目を離さず言いあげる
「あぁ、そうだな」
一言いって、また息を吸い込む男は口にタバコを運びフ～と吐き出すと、政府連絡用のボタンを押した
《ザザー……》
しばらくそんな音がしたのち、部屋のスピーカーからまたしても別の男の声がした
「はい、なんでしょうか」
括舌のいいハキハキした声が機械越しに大男の鼓膜を揺らす
大男は無言で部屋を立ち去るように示唆する
それを確認した渋い男もまた、一礼して無言で出ていった
《ガチャ》
ドアの閉まる音を確認し、もう一度タバコを咥え、大男はいった
「準備はできた、スカビオンに連絡しろ」
機械の向こうでハッと息をのむ様子がうかがい知れる
しかし、向こうの人物は何一つ反論することなく
「了解……致しました」
と、それだけ言って通信を切った
大男はその無数にある傷をポリポリと描き、フンッと不吉な笑みを浮かべる

「狼煙は上がった、しくじるなよ……ノイマン」
光は消え、部屋は暗闇に包まれる
そんななか、彼が吐き出した煙だけが、ただただ風の吹かれるままに宙を彷徨(さまよ)っていた

3話～ＤＡＲＩＦ～（後書き）

こんにちは、ジョン＆ちーのジョンです。
実はこの話、１２／２９には完成してました（笑
でも作者、いや、私の都合で更新しませんでしたｍ（＿＿）ｍ

まぁ、そんなことは置いておいて……
ついにＤＡＲＩＦとは何なのかが明らかになりましたね！！
簡単に言うと戦闘機？まぁ、そんなのどうでもいいや（笑
今回も新キャラ出てきましたね～
アリア少佐とピジェット大尉。それに最後の方に出てきた奴らも気になりますねぇ～。自分も早く知りたいです！
あと、名屋のキャラ設定も気になるところですが……

てか、もう今年（２０１０年）が終わっちゃいますよ！あと１２時間ですよ！
今年も色々ありましたね～。
今年も読者の皆様と一緒に無事に過ごせてよかったです。今年も色々とありがとうございました。
来年もぜひジョン＆ちーをよろしくお願い致します！！

なお、次回のあとがきではちーの新年のあいさつを予定しておりますので、ご期待ください！！

4話～軍人～

ＳＩＤＥ久杉
ショットの運搬が終了したことを報告し、僕は蓮華少将やアリアさんと別れて挨拶がてら数人の友達に会いに行った
まず、僕が向かったのは斉木のもとだ

斉木翼
その能力を買われ、僕ら友達グループでも早々に軍入りを果たした奴だ。
彼の部は「戦場予報士」で、一端の「戦場予報士」をしている
「久しぶりだな」
軍本部にある斉木の暮らす部屋のドアを開けた
一瞬ビクッとして体を固くさせた斉木だったが、僕の姿を捕えると目を丸くして
「久……久杉！！！」
と、ゲームのコントローラーを投げて走り寄って来た
期待通りの反応に思わず気持ちが高ぶる
「どうしたんだよ！！」
僕の手を横暴に掴んでブンブンと振る
最初こそただ振っていただけだったが徐々に力が強くなってきて体も出鱈目に揺れ始めたので
「あぁ、うざい！！！」
と、手を引っ張って斉木の手を引き剥がした
なぜかポカーンとする斉木
（何ショック受けているんだ！！！）
そんな突っ込みはグッと抑え、引き剥がした手の勢いそのままで敬礼した
「久杉優太、このたび適合者に選ばれ、パイロットに就任しました

！」
さらにさらに口まであんぐり上げてダイナミックにポカーンとする
斉木
かと思うと、
「オぉぉぉぉォォォォォ！！！！！！！！！！」
叫ぶと僕の肩をガシッと掴み
「やったなぁ！！！！！」
と、これまた出鱈目に揺さぶる
首ががくんがくんなって意識が…………遠のいて……
ガクッ、とその場で力なく倒れる
≪ドサッ≫
僕が倒れてからやっと斉木は我に変えり
「おっ……おぃ！！」
と、心配そうな視線を向ける
…………
…………
数秒後……
「よし……、ゲームでもすっか」
斉木は踵を返し部屋に戻る
「おぃ！！少しは心配せぃ！！！！」
思わず飛び起きて突っ込んでしまった
「おぉ、起きた起きた」
斉木は何事もなかったかのような口調で対応する
首と肩を回して歩き、そして説教じみた言葉を言ってみる
「おめーなぁ……、力の加減って物を……」
《ＬＡＤＹ――ＦＩＧＨＴ！！》
よくある格ゲーの音が鳴る
（こいつ、俺の話なんざ聞いちゃいねぇ）
「おい……斉木……」
「なんだ？」

口に菓子を放りこみモシャモシャと食べながら答える姿を見てると
……気が削がれる
「あぁ、もう……なんでもないよ」
ため息をつき僕も斉木の隣に胡坐をかいた
カチャカチャと格ゲーをプレイする斉木
なんつーか、アットホームすぎやしないか？一応軍だろ？ココ……
「お前……こんなことしてていいのか？」
「なにが？」
ゲーム画面を見ながら話し込む
ほらよ、と渡されたコントローラーを手に取り僕もプレイを始めた
「だからさ、おめー軍の人間だろ？こんなところでゲームなんてしてていいのかよ」
≪ＦＩＧＨＴ≫
言った瞬間にその音が流れ、第１ラウンドが始まる
僕はお決まりな主役キャラ、斉木は強いけど扱いにくいラスボスキャラを操る
僕は遠距離攻撃である魂の波動を打ち込む
それを斉木は難なくガード
その後も一撃、二撃と打ち込むがすべてガードされてしまう
仕方なく近づいて攻撃しようとしたところ
それをあたかも読んでいたかのように斉木はジャンプ攻撃で移動の出頭を打つと一気に間合いを詰めてきた
接近戦に持ち込むらしい
下段の蹴りで一撃加えてから、反撃しようとした僕の上段蹴りをガード、そのままガード蹴りを放ち難しいコマンドの溜め技を放つ
モロに食らった僕のキャラはあっという間に体力が減る
地面に倒れこんだ僕だったが斉木は欲張らず、僕が起き上がるのを待つ
僕は起き上がるなり魂波を放ち、ガードする斉木に移動しながらの回転蹴りをお見舞いした

意外な攻撃に最後の回転の蹴りが斉木のキャラに当たる
そのまま僕は強力アッパーをかまし、さらに下段蹴り、踏みつけ、
投げ技とコンボを決める
「やるなぁ」
おもしろげに言う斉木を無視しつつ僕はコンボ最後の溜めパンチを
放とうとした
しかし、その瞬間！！斉木のキャラは突如ジャンプした。しかも2
段ジャンプだ
不意のジャンプに溜め技が空振り大きなスキが生まれる
そこに斉木の必殺技が炸裂
K．O．の文字とともに僕のキャラは戦闘不能
一ラウンド選手のゲーム設定だったので、そこで勝負は終わった
「あらら……やっぱ強ぇな、斉木。なんで最後のパンチ、通常じゃ
なくて溜め技だとわかったんだ？」
そう、ふつうあのコンボの締めくくりはスキのでる溜め技ではなく
速い通常パンチで決めるのがセオリーだ
しかし、それでは斉木に大したダメージは与えられない
そこで、通常パンチと読んで斉木はガードしてくるであろうと思い、
ガード共々吹き飛ばそうと溜め技を選択したのだ
だが、逆読みされた
斉木は「ふ〜っ」と、息をひとつ吐き出すと
「俺の仕事、忘れたのか？」
と、笑顔で聞いてきた
僕は
「戦場予報士だろ？」
と、あたりまえのトーンで返す
そうそう、とニヤニヤしながら笑う斉木
一瞬戸惑ったがやっと理解できた
「なるほど、才能って訳か」
「そういうこと」

自慢げに胸を張る
「この仕事の仕事場は今みたいな戦場そのそのもそだ、こういう待機時期とか戦争がとりあえず滞ってる時期は俺らは仕事ないんだよ」
さらに言う斉木に僕は
「それじゃぁまるで、戦争が起きてほしいような言い方だな」
と、あおってみた
すると斉木は急に真剣な顔つきになり言った
「バカいえ、戦争が大きくなる前に『予報』して最小限の被害で抑えるのが俺らだぜ？そんなことこれっぽちも思ってやしねぇよ」
あまりに真剣だったので
「……スマネェな、忘れてくれ」
ビックリしながらも素で謝っておく
そんな僕の雰囲気にバツがわるくなったのか、斉木は口ごもりながらも言った
「ま……まぁでも、実際その役目よりも戦争に勝つために現地で予報することのほうが多いから、戦争がなきゃ俺らみたいな存在なんてなくてもいいのも事実だけどな」
笑顔に少し汗を浮かべる彼の姿をみて僕は思わずクスッと笑ってしまった
最近会ってなかったからどうなったかと思っていたが……あんまり変わってなさそうだ
今日斉木のもとを訪れた一番の理由はソコにある
名屋がそうであったように、立場が変われば他人の対応は変わるし、自分自身が変えなきゃならないこともある
名屋のアレは半分おフザケだったとはいえ、いつかあぁいう関係になる日は来るだろう
本心ではお互いに嫌でも、そうせざるを得ないのだ
そして今、一番その状況に陥る可能性のある人物こそが正式な軍人であるこの斉木と、これから行く「参謀」の荒口と言う訳だ
この分だと斉木は問題なさそうだ

しかし、荒口は……
そんな考えを張り巡らせていると
「どうだ？もう一ラウンドやってくか？」
と、斉木に誘われた
いつも通りと言うならば、ココで「うん」というと斉木はいつまでたっても解放してくれなくなる。それ故に
「いや、今日はもうおいとまするよ」
と、立ち上がった
残念そうな顔をする斉木だったが、玄関に向かう僕を見送ってくれた
「じゃぁな」
「あぁ」
そんな会話を交わして、僕は斉木の部屋を後にした

4話～軍人～（後書き）

あけましておめでとうございます
ジョン&ちーのちーです
新年のあいさつ……なんてたりぃことをどうやら前巻のあとがきにてジョンが「勝手」に書き込んだ様なのでさせてもらいます（いかんいかん、本音が（笑））
さてさて、また一年が過ぎて行きましたねぇ
年を重ねるごとに一年が早くなるとは本当のようで
幼稚園の頃はクリスマスがなかなか来なくてイライラしていたにもかかわらず！今となってはクリスマスなんてウサイン・ボルトが走っていく並みのペースで回ってきますよ、いやホントに
……この分じゃぁ、死ぬ頃には光の速さ超えてるんじゃないかなぁ
……ハァｏｒｚ

そんなことはさておき！
今回もまたキャラ紹介みたいな巻ですね
物語に入る前にいろいろキャラ説明をしておかないと大変なことになりそうなので、もうすこし退屈が続くかもしれません（スミマセン）
え？それならプロローグで紹介しちゃえばよかったじゃないかって？
ハッハッハ～！！見事に忘れてて気づいたら後戻りできなくなってましたぁ！！！
あぁ、メンド臭い
ところどころ笑い的要素も加えて退屈しないようにとは思っているんですが、なかなかうまくいないものですね（汗
なにかアドバイスなどがあったら感想にて書いていただけると嬉しいです……というかお願いします（、・人・、）（、＜人＞、）

さてと！！そろそろまたつづきでもかくかなぁ！！
最後に、どうぞ、ことしもジョン&ちーをよろしくお願いいたします！！！！！！ゞ（＊´∀｀＊）ノ゛

5話～参謀～

斉木と別れてから、僕は参謀の職務室へと向かった
パイロットは基本的に他の職よりも地位が高くなる（細かく言えば、佐官クラスになれる）
だから他の職の職務室に突然顔を出しても誰も文句を言えないということだ
もちろん、彼らが僕よりも上官に相談しなければの話だが……
移動の最中、とある人物が話しかけてきた
「ちょっと、そこのあなた！！」
通り過ぎた角から声がしたので少しバックして様子をうかがう
しかし、そこに人の姿はない
「ココよ、ココ」
依然と声はしているがどうにも見つからない
するとしびれを切らしたかのようなため息が聞こえ
「上だって！！上！！」
と、あたかも見つけられて当たり前かのように怒鳴られた
フッと上を見上げると換気扇のようなところから顔が見えていた
しかし
「どちらさまで？」
誰だがわからない
「もう、私が分からないなんてあなた本当にＰＡＳＣの人間？」
と言われても顔が見えない
しかし、僕の頭にフッとある人物の名前が浮かんだ
「まさか……、スペレンド大佐……ですか？」
「まったく、やっとなの？」
言うと大佐は金網をバンッと蹴り外した
≪ガシャン！！！≫
すごい音で床に叩きつけられるそれに気を取られていると、いつの

間にか大佐が目の前に降りてきていた
白髪のロングヘアが揺れる
顔を隠していたその髪を分け、傷一つないきれいな顔とくすみない白眼をのぞかせる
「？あなた、見ない顔ね……新人？」
明らかに男の声なのに女のような口調……噂は聞いていたが、やはり相当な変わり者らしい
「えぇ、このたびパイロットに選ばれました、久杉優太と申します」
聞くなりウフッと不敵な笑みを浮かべると
「へぇ、あなたがねぇ。ピジェットが最近作ってた機体はあなたのだったのね」
さらに笑みを浮かべる大佐
スゥゥと背筋が寒くなり悪寒を感じる
怖ェェェェ！！
適合者であることが確認され、いろいろな準備をしていた数ヶ月間名前こそ頻繁に飛び交っていたが会うのは初めてだ。それだけ彼（？）は神出鬼没なのだ
「で？その新米パイロットさんがなんでこんなとこをフラついているの？」
「と……友達に……会いにです。参謀の」
たじろぎながら単語単語を並べる
聞いた大佐は急に難しい顔をすると
「参謀ねぇ」
と、どこか遠くを見た
しばらくそんな感じだったがさらに眉間にしわを寄せ
「やめといたほうがいいと思うわよ」
突飛に言い出す大佐に思わず疑念の視線を向ける
「あの……どういうことですか？」
尋ねると大佐は視線を僕に戻し
「いままで参謀の友に会いに行っていい思いをした子はいないわよ。

みんな堅物になってるからねぇ」
と、ただ真実を告げた。だがそれは承知の上だ
しかし、僕は気になることがあった
「しかし、大佐も参謀ですよね」
そう、スペレンド大佐というのは参謀としての能力を政界に大きく買われ、「戦闘員指揮者」でありながら参謀上層部員というＰＡＳＣで唯一職を掛け持ちしている人物なのだ
「大佐は堅物なんて雰囲気はとても感じられませんが……」
「そう？それはありがとう」
真剣に言ったつもりだったが……軽く返されてしまう
怒った……のか？
やはりよくわからない人だ
「それでは、自分はこれで」
なんとなくいづらい空気が漂ったので一言断ってそそくさとその場を離れた
普通、断っても上官の返事無しに場を離れるのは御法度だ
しかし、スペレンド大佐は何も咎めず僕を行かせる
（いったい何を考えているんだろう？）
ほんっっっっっっっとうに、わからない人だ

とうとう来た
なんかやたら長くかんじたな、ココまで
参謀の職務室の前、妙に重苦しい雰囲気を漂わせながらその部屋は軍の一角を掌握していた

軍内部の職でありながらほとんど軍から干渉を受けない
それはこの職が戦闘において最も重要な職であり、人と深くかかわらない気質にあるためだ
参謀の理念の一つにこうある
「人とのかかわりは広く、浅く。情をかけてはならない」

参謀は中立の立場から考えて作戦を練らなければならない
もちろん、味方するほうは決まっているのだが、あまり入れ込みすぎると敵の動きが分からなくなり作戦を立てづらくなる
そうなったら参謀としては使えない
しかし、参謀もヒトだ
他人と全く関わらないことなんてできないし、間違いもある
そのため現地で参謀のような役目を果たす「戦場予報士」が必要なのだ

僕はドアノブに手をかけようとした
が、それを拒むかのようにドアノブは逃げていく
「あっ」
思わず声が出る。が、声は目の前に現れた人物にぶつかると儚く散った
その体を伝って視線を上にあげるとそこには見知った顔があった
「おぉ、荒口！！」
「……久杉……優太」
荒口の返答に一瞬間があったように感じたのは気のせいだろうか
「中尉、どうした？」
部屋の奥から周りと服の違う男が出てきた
「大尉殿……、なんでもありません」
荒口はこもった声を出す
……どうやらタイミングが悪かったらしい
「その者は？」
首を伸ばして男は僕の姿を確認する
荒口はすぐに答えられなかった
「中尉」
答えを催促する男
なんとなく……だが、荒口にとってなにか武が悪いらしいことを感じ僕はスッと前に出て

「久杉優太と申します。今度、パイロットに就任し参謀の方々に挨拶をとここに参った次第であります」
と、おきまりの自己紹介文をすらすらと言いあげる
すると男は
「あぁ、君が。話は聞いているよ、ピジェットが新たに開発した新装備武装のＤＡＲＩＦの適合者とか」
茶髪の髪をポリポリとかきながら男は荒口を押しのけて僕の前に立つ服のマークからして……戦場予報士か？
「えぇ、よくご存じで」
「そりゃぁしっているさ。私の情報網はたしかだよ」
言うなり男は黙りこくった
頭の上にハテナを浮かべる僕を見て怪しい顔つきになり
「まさか、私をしらないのか？」
と、額にしわを寄せる
「いや……その、本部に来るのはその……あまり機会がないもので」
口ごもりながら答える僕にあちゃ～と頭を抱える
荒口も目を丸くしているようだ
すると男はスッと今まで頭をかいていた手をまっすぐにして、僕に敬礼した
「私はアックス、将校は大尉、職は戦場予報士だ」
アックス大尉……ん？きいたことあるぞ
「たしか……戦場予報士をまとめる長だとか、そんな人がなぜ参謀室に？」
初見だが大尉ということは僕より下のクラスだ。敬語は必要ないだろう
っていうか、この人こそ敬語を使うべきなのだが……まぁいいか
「あぁ、少し参謀と戦場予報士で会議をしていたんだけどなぁ……」
渋い表情を浮かべ、荒口と目を合わせるなり二人してハァとため息をついた
「どうしたんだ？」

少し間を空けて
「スペレンド大佐が、逃げだしてね」
「はぁ！？」
思わず素っ頓狂な声を上げる
2人ともビクッとして僕を見つめた
「スペレンド大佐なら、今そこで会いましたよ」
……
間隔が開く
また二人は目を合わせると大尉は深々と改めてため息をつき
「まったく、どうしてあの人は……」
と、うなだれた
そんな大尉をしり目に荒口は
「探して参ります」
と、駆け出した
「ちょ……おい！」
引き止める僕に
「なにか？」
と、見たことのない……そう、他人を見るような、そんな表情を向けた
「いや……なんでも……」
思わず詰まる
荒口はそんな僕を一瞥すると駆け出して行ってしまった
ポカーンとしている僕に
「その……少佐は荒口君と知り合いなので？」
大尉が何気なく質問を投げかける
だが、僕に発せられた言葉と気づかずにかたまってしまった
「少佐？」
「えっ、あっはい」
（そういや俺少佐だった）
「なんですか？」

慌てて聞きなおす
「いやぁ、だから、荒口君と知り合いなのかって……」
「あ、うん。一応」
そういってまた荒口が駆けていった方向を見る
すると大尉が横で
「参謀ですからね、変わってしまいますよ」
と、感情交えて言いあげた
「なんで、変わってしまうんですかね」
僕はなんとなく呟いてみた
誰に聞こうと思ったわけでもない
「そりゃぁ、参謀が礼儀に厳しい……」
「あぁ、それはわかってる」
言いかけたアックス大尉を制する
分かっていても、そう思わずにはいられないのだ
参謀……軍内部にあって異質
しかしなくすわけにはいかない職、なんで荒口はそれが分かっていて参謀を目指したのだろう
それに名屋も、なぜそれを求めるのだろう

5話～参謀～（後書き）

こんにちは、ジョン＆ａｍｐ；ちーのジョンです。

さて、今回の話は荒口との再会でしたね。
しかし、参謀に入った荒口は昔の荒口ではなくなってしまった……
久杉も覚悟していたようですが、さすがに応えたのかと（笑
荒口と久杉の仲はどうなるのか、そして参謀志望の名屋はどうなるのか！！
これは後々に出てくると思いますのでお楽しみに～

では、次回、こうご期待ください。

6話～進展～

その後、アックス大尉は僕に一礼して荒口を追っていった
一人残された僕はあまりに物事が一気に進んだので頭が混乱していた」
「荒口とはそんな話せなかったなぁ」
でも、しっかりと感じた
何かが冷たく変わっていた、彼は。
なぜ参謀になると変わってしまうんだろう
なぜ変わらずにはいられないんだろうか
いや、さっきの通り訳は分かっている
分かっているが、納得はできない
いくら礼儀礼節が大切とはいえあそこまで頑(かたく)なになる必要はあるのだろか
……
だけど、考えたところでいい言葉が見つからないのもわかってる
だからみんな疑問に思いながらも何も言わないのだ
そうでも思わないとズルズル引きずってしまいそうだ
……
さ、まだ時間あるし、本部ドッグにでも向かうか！！
荒口のことはそのうちどうにかなるだろう！！！
それに本部ドッグといえば大将のＤＡＲＩＦがあるはずだ
大将はこのＰＡＳＣで一番強いパイロット、そのＤＡＲＩＦとなればパイロットなら一度は見たい代物だ
運が良ければ１番隊副官のＤＡＲＩＦも見れるはずだ
そう考えるとなんだかわくわくしてきた
さあ、行くか！！
そしてやってきたドッグ

だったが……
「アレ？ＤＡＲＩＦが一機もない……」
本部ドッグは１番隊専用だ
そしてその１番隊は３部隊あるＰＡＳＣの中でも所有機５機と一番
ＤＡＲＩＦ数の多い部隊だ
それなのに……一機もないなんて
（なにかあったのか？）
そんな時、
「ちょっと、久杉さんじゃない？」
と、聞き覚えのある女性の声がした
ピンク色のツインテールに大きくかわいらしい目
威勢のいい声に乗せて走り寄ってくるその姿は紛れもない
「花音！」
僕はその人物の名前を呼んで答える
「やっぱり、久杉さんだ」
息を切らして寄ってくると花音は胸に手を当てて息を整える
「なにかあったのか？」
聞く僕だったが花音はなにか慌てた様子で
「あなた、パイロットになったのよね？翼から聞いたわ」
と、確認するように言った
「あ、うん……まぁ」
戸惑いながらも返事する
すると花音はガシッと僕の腕を掴んでその勢いのまま引っ張った
「お、おい！！」
花音は何も聞こえていないかのように僕を引っ張り回す
「どこいくんだよ」
言うと花音は急に止まり、今度は両肩をガシッと掴んで僕を引き寄せた
息が吹きかかるほどの距離に僕の顔を持っていき花音は言葉を確かめるように言った

「いい、さっき……パイロットとオペレーターに招集がかかったわ」
「だからなんだよ、別にそんなの珍しくも何とも……」
言いかけた僕を制し
さらに引き寄せて花音は耳元で囁くように言った
「3人の将官も同時に、ね」
ゾクッ
血が逆流したような感覚に見舞われる
「おい……それって……」
血の気が引いて行くのが自分でもわかる
花音は静かにうなずいた
僕は首をゆっくりと振ってフラフラと壁にもたれかかった
「大丈夫!?」
慌てて花音が僕を支える
しかし、今の僕に花音を気遣うようなセリフを言うことはできなかった
「ウソ……だろう、まさか……そんな。まだ、パイロットに就任して1日も経ってないぞ」
誰に言ったわけじゃない
ただただ、言葉にするので精いっぱいだった
花音はそんな僕を立たせて
「とにかく!!今はパイロットの職務室に向かうわよ」
パイロットの職務室……
ますます行きたくねェ
だけど
「あぁ」
うなずいて体を奮わせて……僕は職務室に向かった
これは……一大事だ

職務室の前
部屋の前で一度立ち止まり僕は深呼吸した

そして
≪ガチャ≫
開けていいものなのかと一瞬戸惑ったがそんな迷いを振り切り、僕はドアを開けた
そんな重くもないであろうに妙に重量を感じるのは、その扉が……あまりにも歴史につながる扉だったからであろう
そして、これからその歴史が動こうとしている
部屋に入ると、真っ先に目に飛び込んでくるのはＰＡＳＣの紋章（エンブレム）だ
メシア・ノアを守るようにバリアを張った黒い球体にその周りにある四角い物体
旗の意味は明明白白、大方の想像はつく
そして視線を少し横にずらすと１６名の人物が椅子に座っていた
軍服からして……おそらくうち１０名はパイロットだ
こんなに一様にパイロットが顔を合わせる会議などひとつしかない
「やっときた、久杉くん」
アリアさんだ
アリアさんは席を立って僕に近づくと
「早く席について、皆の視線が痛いわ」
と、声を抑えていった
言われてみるとみんなこちらを見ている
「わかりました」
言って僕は席に向かう
花音もアリアさんに頭を下げてから自分の席に着く
席に着くとアリアさんの向こうに座っていた蓮華少将が
「遅いわよ」
と、一言言った
「スミマセン」
謝る僕を確認して少将は前に向き直った
それからしばらくした後、部屋にある、僕らが入ってきたのとは別

の扉が開いた
そこから顔に傷のある二人の大男が出てくる
一人は色黒、その顔には鋭く、獲物を見ただけで捕えてしまうような燃えるような赤の目、漆黒の宝石が付いた帽子をかぶり、そこから覗くオレンジの髪
幾多の修羅場をくぐりぬけてきたその様はまさに圧感
おもわず息をのむ
後から来たのは顔にやたら傷のあるこれまた大男
笑顔なんてほとんど浮かべたことがないだろう、いつも眉間にしわを寄せている
さらに腕には特徴といっても差し支えないほどの大傷がある
この傷は誰につけられたものなのか、誰も知らないのだという
先に入ってきた男は蓮華少将の向かいに座る
そう、この人物こそ
大将の楔(クサビ)だ
と、なれば後から来た人物は……
一番豪華な、紋章の前に座った
この席に座れるのは代々「ジャスト一族」と決まっている
そして今のジャスト一族の頭こそが
ジャスト・テイズ・キラーだ
少しの沈黙ののち、テイズ長官が口を開いた
「さて、みなそろっているな」
低く重い、唸るような声が部屋の緊張感を最高潮にまで高める
「分かっている者もいると思うが、今日集まってもらったのは他でもない、ある通達のためだ」
通達……
そんな生易しいものであればどれほどいいだろう
おそらくこれからこの人が言うことは……
男は息を吸うと、なんの乱れもなくいつもの調子で言いあげた
「先日、スカビオンに文面を送った。内容は……ビンクスの招集だ」

部屋が一瞬、電流が走ったかのような衝撃に包まれる
押しつぶされそうな重苦しい空気が充満する中、今度は楔大将が口を開いた
「これがいったい何を意味するか、みなわかっておるんじゃろうな」
十分な間が開く、分かっていてもこんな場で発言するなど……
並大抵の神経じゃ考えられない
が、その問いに答える人物がいた
「戦争……それが始まるのであろう？」
顔がほとんど隠れてしまうほどのうす紫色のハイロングヘアに、着物を着た日本の武士を思わせるその出で立ちはＰＡＳＣ内でも有名ＮＯ．２の実力を誇る密林の暗殺者、影（カゲ）中将だ
「そのとおりじゃ」
楔大将はうむとうなずく
「スカビオンとは前々からいがみ合う中にある、この国との戦争はさけては通れない道だ」
これはテイズ長官だ
その言葉に反論するかのように声をあげた者がいた
黒い肌に鈍い血のような赤の髪、その髪で目が片方隠れているが、ときどき覗かせるソコにはあるはずの目がない。戦闘で潰れたそうだ
「それは分かるとして、なぜ急に招集をかけたんですかぃ？ヤローがそれを拒むのは明白でさぁ。戦争が起きると分かっててそれを送ったってこたぁ、勝てる確証があるってことでいいんですよね？」
１番隊副官のディン大佐でないと言えない発言だ
しかしテイズ長官は自信満々に
「あぁ」
と、答えた
「キシシシ、理由がききたいもんさなぁ」
２番隊副官ギル中佐
黒の爆発したようにツンツンしている髪型に常に笑みを浮かべる口、好戦的な性格で礼儀をあまり気にしない。しかし、影中将には尊敬

の念を抱いている
「テイズ長官になんじゃ！！その口のきき方は！！！！」
ドスのきいた楔大将の罵声が飛ぶ
傍観しているだけのコッチまで冷や汗が出る
モロに言われたギル中佐は急におとなしくなった
「まぁ、楔。聞きたいのはギルだけではあるまいよ」
テイズは部屋にいる面面を一望すると
「それは、新しい適合者の出現によるものである」
と、言った
一瞬にして僕に視線が集まる
全神経がとがり、毛穴がブワァァと広がり内臓が浮くかのような緊張感に見舞われる
呆けてしまった僕にアリアさんが肘で自己紹介を催促した
ガタッと立ち上がり妙な姿勢で
「わ……わたしは、久杉優太と申します……。この……このたび、適合者に任ぜられ、新型ＤＡＲＩＦを配属されました。ど……どうぞ……、よろしくお願いいたします！！！！！！！」
言い終えてサッと椅子に座る
胡散臭そうな視線が向けられる中、緊張のあまり涙が出てきてしまった
あわてて気づかれないように拭き、背筋を伸ばす
「役に立つんですかぃ？」
室内の全員の意見を代表するかのようにディン大佐が言う
その質問に楔大将は
「役に立たないようじゃったら、わしが戦闘中に切り裂いてくれるわ」
と、ニヤケながら言った
（目がマジです！！目が！！！！！）
計り知れない恐怖を感じながらも平静を装う……が、バレバレだろうな

そんな時
「あまり私の部下をいじめないでもらえます？」
今度は蓮華少将が言葉を発した
ギル中佐は嫌味な笑みを浮かべると
「キシシ、恋仲にあるって噂はマジもん臭ェな」
「な！？」
突如割り込んで来たギル中佐に少将が唖然とする
「その噂、聞いたことあるでさぁ、真偽を問いたいともおもっていましてねぇ……、どうなんですかぃ？少将」
以外にもディン大佐が食いつく
言葉を発せづにいた少将をよそに
「関係ない話は慎んでください！！」
と、アリアさんは声を荒げた
「おぉ怖」
ギル中佐は肩をすくめて見せる
「おいギル、いい加減にせんか！！」
楔大将に言われ、またおとなしくなるギル中佐
そこにバンッと机をたたく痛快な音が響いた
「たるんでいるぞ！！！場をわきまえよ！！！！！！！！」
とうとうテイズ長官が怒声を発する
鎮まる部屋
テイズ長官は椅子に深く座りなおすと
「今までは、スカビオンとの戦闘となると戦場となるであろうユニクス南西部の平原に主戦力である1番隊と2番隊の9機を回すと、本部は3番隊の蓮華少将率いるたった2機のＤＡＲＩＦで守らねばならないことになり、行動に踏み込めなかった。しかし、新しい適合者が発見されたことで3機のＤＡＲＩＦで本部を固められるようになり、行動に踏み切った次第だ。久杉少佐はいることに意味があるのだ」
と、事のあらましを大雑把に説明した

しかし、今の言葉は問題になっていた「行動の理由」と「僕の存在価値」を納得させられるほどの力を持っていた
この辺りは流石というべきだろう
さらに長官はみんなが騒ぎ立てる前に
「そして！！！」
と、大きな声を張り上げた
「この会議の趣旨は……」
一同の顔が険しくなる
とうとう、告げられるのだ……歴史が！！！！
「スカビオンへの宣戦布告なり！！！！！！！！」
言い終えるや否や部屋の脇からバァァァと炎が現れた
これは戦が始まったことを意味する
戦への熱き魂の炎を片時も忘れぬように
それを意味する炎は今まで見たどの炎よりも轟々と、勇ましく燃えていた
「はじまったのう」
「血が、戦をもとめてるとでもいうのか？」
「戦争なんて……」
「少将……しかたないのです」
「また大将が暴れだしまさぁ」
「キシシ、殺し合いだ！！」
「初めての……戦争……」
各々思いはあるが、心の内に気持ちを揺るがす内なる炎を燃やしていた
そしてそれらは、終戦した時にのみ消えるのだ

6話～進展～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。
本日（1／10）は成人式ですねー。自分にとってはまだまだ先の話ですが（笑
新成人がむやみやたらと暴れないことを祈ります。

さて、内容ですが、またまた新キャラが出てきましたねぇ……
編集する側は頭がこんがらがってしょうがないですよ。
なので、もし文脈的におかしかったりしたら感想のところからお知らせください。
あと、普通に読んだ感想もお待ちしております！！
一言でもちーの励みになると思いますので、どうぞよろしくお願い致しますm（＿＿）m

では、次回、乞うご期待ください。

7話〜敵軍〜

宣戦布告の宣言
これこそ行われた会議の趣旨だ
将官3名その他パイロットと腕の立つオペレーターを一様に招集し
行われるこれは、軍内で最も重要かつ最も行われるべきではない会議だ
“戦争”、これを起こす唯一のものなのだから

会議は長官の宣言によりその幕を閉じた
細かな作戦は後日書類にて発布される
民間人に宣戦布告の意を発表するのはこの書類を軍内部のもの全員に配ってからとなる
それまで僕らは何人(なんぴと)にも他言してはならない
もっとも、噂により広まるのは時間の問題だが……
会議が終わり次々と部屋をでる者の波のなかで、ある男の声が僕を呼びとめた
「キシシシ、なぁ兄ィちゃんよぉ」
僕はビクッとしながらも
「な……なんですか？ギル中佐」
と、丁寧に返した
するとまたキシシと笑みを浮かべながら寄って来た
「あの噂、実際のところどうなんだ？」
会議中に出たあの話題のことか
「自分は……その……」
口ごもる僕をみて
「やっぱりマジなんか？」
と、間髪いれずに嫌味ったらしく聞いてくる
しかし、これにはしびれを切らした少将が

「そんなわけないでしょう！！」
と、喝をいれた
「ほんとかねぇ」
まだ納得いかない様子の中佐
そんな中佐に今度はアリアさんが
「なぜ『あなたが』そんなに少将を気にするのですか？」
と、いかにも冷静に、しかし皮肉を交えて言った
だがギル中佐はさらにその顔に笑みを浮かべると
「そりゃぁ……、少将は美人さんだからねぇ、その恋沙汰となりゃぁ誰かさんでなくとも気になるし、キシシ」
ふと横を通るディン大佐を見る
「なんかようかぃ？ギル」
そんな中佐に気づいて大佐が肩に手を乗っけた
いや、叩いたと言ったほうがいいか
「べつになんでもありゃぁしませんよ」
言う中佐だったが説得力などまるでない
本人も求めてもいないだろう
そんな終わりの見えない会話に
「ちょっと！！いいですか？」
女性の声が飛び込んできた
ピンクの髪が部屋を出た人と人の間を縫うようにしてやってくる
それがだれかを確認するとディン大佐が
「おやおや、一番人気のオペレーターさんがなんのようですかぃ」
と、不敵な笑みとともに言葉を飛ばした
やっとこさ顔を覗かせたのはそう、花音だ
「副官がそろいもそろって女性にたかるなんて、どんな神経してんの？」
花音は声を荒げると一歩、また一歩とディン大佐に歩み寄る
「たかるだなんて人聞きの悪い……私は真実を知りたいだけ出さぁ」
言う大佐だったが

「フン、好きな女性を取られるのが怖いだけでしょう！！！」
と、さらに大きく出た
これにはディン大佐もカチンときたらしく
「おやおや、いってくれますねぇ……身分をお忘れですかぃ？」
と、挑発した
すると花音は
「あらあら、熱くなっちゃって……、アリアさんのときはクールぶって見せてたのに……。まさか、あんたアリアさんにも？」
強気に花音がまた一歩踏み込んだ
「貴様ッ！！！！！」
ディンがさらに言い返そうとした時！
「いいかげんせぃ、貴様ら。拙者のゆく道を阻むとは……全員まとめってしょっ引くぞ」
そう言って部屋を出てきたのは影中将だ
流石にこれには歯向かえまい
「キシシ……退散するかねぇ」
場の空気の変化をいち早く察知した中佐は少将と中将にお辞儀してそそくさと去って行った
ディン大佐はまだ何か言いたげだったが影中将の視線を感じると彼もまた、お辞儀してその場を離れた
さらに中将も何もなかったかのように去っていく
「さすが、中将さんですね」
アリアさんが呟く
少将と僕は何も答えなかった
ふとお互いの顔を見る
そのタイミングが素晴らしくマッチして目が合ってしまったので思わず顔をそらした
そんな僕らに気づいているのかいないのか、アリアさんは
「じゃぁ私はそろそろ行きます、少しようもあるので」
と、足早に行ってしまった

二人で残されて何とも言えない気まずさに落ち着かない
すると少将は
「あの……噂……」
と、ボソボソっと言った
うまく聞き取れなかった僕は
「なんですか？」
と聞きなおす
が、少将は
「やっぱりなんでもないわ」
と、言うと口を閉ざしてしまった
「？」
訳のわからない僕
「さ、私たちも行きましょう」
一言言って歩き出しまった少将を
「ちょっと待ってくださいよ」
と、僕は少将を追いかけた
……
（私のこと、完全に忘れてるわね？）
その後ろで呆けていた花音に気づく余地など、まるでなかった

［時は少々さかのぼり、久杉就任式の５年前］
吹き荒れる風
その風にまかれるようにして砂はとび散り、あたりを隠す
そこを照らす月明かりを鈍くぼかしながら……。
そんな砂の飛び交う夜の砂漠に、明りが一つ
それは明らかに人為的な、自然ではありえない気味の悪さを醸し出す赤い光だった
≪ザザザザザザザ≫
砂を無理やりかき分けて進む巨体絡から放たれるそれは、光の線と

なる
異常なまでに長い胴、しかしなめらかで艶(つや)やか
不気味に鋭く光る口元、しかしそれは優美に湾曲し、美しい
機体型式ナンバー「ＣＳ－０３Ｓ」ヘビ型ＤＡＲＩＦ－ジーボルー
それがうごめく物の正体だった
巨体をくねらせ進んでいく機体
その先に一つの光が現れた
「そろそろだな」
コクピットでそうぼやいたそれのパイロット
光は近づくたび一つ、また一つとその数を膨らませ、とうとう数えきれないほどになった
砂漠を抜けたイクマ山脈のふもと
そこに彼ら「Ｄ．Ｏ．Ｐ．Ａ．Ｒ．、Ｓ」（ドパーズ）の本拠地はある

所有ＤＡＲＩＦ（ユニクス調べ）は３機
Ｄｅｓｅｒｔ≪砂漠≫Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ≪組織≫Ｐ．Ａ．Ｓ．Ｃ．≪パスク≫Ａｒｍａｍｅｎｔ≪武装≫Ｒｅｖｅｒｓｅ≪反対≫
略して「Ｄ．Ｏ．Ｐ．Ａ．Ｒ．Ｓ」砂漠の反パスク武装組織という意味で、ユニクスの軍である「Ｐ．Ａ．Ｓ．Ｃ．」ほどではないが、戦力、規模ともに砂漠の国「スカビオン」ではほとんど軍みたいなものとして活動している
もちろんスカビオンの全ての人民が彼らに賛同しているわけではないしかし、大部分は貧富の差などを理由に彼らを支持し、資金などを提供するものがたくさんいるのも事実だ
それに加えその資金を送る側も、非人為的に石油が掘り起こせる土地柄、金持ちが多い
それ故、規模をここまで拡大でき、今ではＰ．Ａ．Ｓ．Ｃ．と並列して呼ばれるようになったのだ

「お頭、戻りやしたぜ」
無線連絡にて本部に連絡する
「あぁ、おつかれさん」
そう返答があり、ＤＡＲＩＦ収容コンテナの扉が開く
機体をそこに入れ、頭の部分にあるコクピットから出る
「おかえりんさい、兄貴！！」
そう言葉を発したのは色黒のモヒカン野郎……彼の弟だ
彼はヘルメットをゆっくりと外した
一体どこに収まっていたというのだろう、黒い長髪が乱れながらも
その姿を現す
瞬間覗いた額には黒の蛇の刺青がうかがえる
「兄貴、石油のほうはどうでしたい？」
発見された石油の調査と収集、それが今回の任務だった
「あぁ、もってきたぜ。こりゃぁ使えそうだ」
言いながら機体にくくりつけられた四角い物体に視線を移す
弟はそれを見るや否や
「そりゃぁ、ビンクスのお頭も喜ぶなぁ」
と、ワクワクした様子で笑みを浮かべた
「あぁ、そうだな」
彼もまた、笑みを浮かべる
そして
「じゃぁＭＡＸ（マックス）、お前は整備を頼む。俺はちょっくらお頭にあってくらぁ」
と、いって足を進めた
「了解です！！兄貴！！」
言ってＭＡＸも機体に向かう
「自分の機体もいじりたいだろうに……悪いな」
一言詫びを入れるとＭＡＸはニヤリと笑い気にするなと仕草する
それを見て、彼は本部へと向かった

ＳＩＤＥスピアー
「お頭！！」
ドアを勢いよく空ける
「おぉ、スピアー、おつかれだったな」お頭はそう言って笑顔を見せる
色黒でいつもぼさぼさな髪の毛、「野性的」そんな言葉が似合うこの人物こそが「黄玉のビンクス」の異名を持つ我らが大将だ

「で、どうだった。スピアー」お頭の催促に
「えぇ、使えます。流石にスペース・コアには及びませんがね……」
と、答えた
すると
「そうか……だが、とりあえずの山は越えたな」
と、眺めていた窓から正面に視線をやる
俺は
「機体の方は、どうなんですか??」
と尋ねた
「あぁ、まぁ大方完成しているが……、命を預けられるほど信用できるパイロットがいない」お頭は頭を抱えると机に突っ伏した
「お……お頭！！！」
突然だったので思わず声がでたしかしお頭は
「大丈夫」
とてを振ると
「……、あと、少しなんだが……」
と憤りの思いを口にした
なにも答えられない俺
だがそんなこと気にせず、さらに「ユニクスが俺に召集をかけるのはもはや時間の問題だ」
焦りも募らせているようだ

そんなとき！！
《ビィィィンビィィィン》
と警報が基地を駆け抜けた
何事かと椅子を倒して立ち上がるお頭
今思えば、このタイミングで彼等が来たのもなにかの運命……いや、
因果だったのだろう

7話～敵軍～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。
最近ちょっと忙しくて、編集が雑になってきているかもしれません（汗
ミスなどがあったら感想のところからお知らせくださいm（＿＿）m

ところで、Ｄｅｓｅｒｔ≪砂漠≫Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ≪組織≫Ｐ．Ａ．Ｓ．Ｃ．≪パスク≫Ａｒｍａｍｅｎｔ≪武装≫Ｒｅｖｅｒｓｅ≪反対≫はちょっと無理があるんじゃないかなぁ……と思っている次第です（笑
しかも、普通Ｒｅｖｅｒｓｅってそういう意味の反対に使わないだろうし……
Ｒｅｓｉｓｔを使っておけばいいんじゃないのかなぁ～と思うんですが、そこはちーの判断に任せました（笑
みなさんはどうお思いでしょうか？
ほかにも、久杉と蓮華少将の関係とか、花音とは一体誰なのかとか、（後に説明があると思います）、気になることばかりですね。
いきなり過去の話になったりとか……

まぁ、とりあえず、次回、ご期待ください。

8話〜戦闘〜

ＳＩＤＥビンクス
《ビィィンビィィィン》
駆けるサイレン音
「お頭！！」
そう叫んで部屋に飛び込んできたのはＭＡＸだ
ところどころから血を出している
「どうしたい？この警報はなんだ？」
ゆっくりと尋ねる
しかしＭＡＸはそんなオレとは真反対のハアハアと言う荒い呼吸のまま
「て……敵襲……で！！」
と、言葉とぎれとぎれに言った
酷く慌てている様だ
「敵襲？」
すかさずスピアーが復唱し、オレと視線をあわす
数秒息切れの音が部屋を包んだ
かと思うとスピアーは首を傾げて言った
「で、なんでそんなに慌ててるんだ？その敵とやらはまだそんなに近くにはいないはず……」
言い終えたスピアーだったがオレとタイミングを同じくしてハッと息をのむ
普段から反対組織からの襲撃を幾度となく受けているオレらにとって、「敵襲」などそう珍しい事ではない、そのために半径１００メートル以内に入った生命体に反応するこの警報システムを作ったのだだが……

「なんだ？お前……その怪我！！」
そう、ＭＡＸの肌からは赤い液体が流れ出ていた
それは、すでに敵に本部侵入を許している事を意味する
「敵は今どこにいる！？」
たまらず叫ぶオレにＭＡＸは
「敵は……、ドッグに向かっている模様……」
と、好戦的で荒っぽい彼らしくない抑えた声で言った
「ドッグ……だと！？」
思わず絶句する
「目的は、新しい機体でしょうか……」
スピアーは言うと俺の指示を待った
今開発中の石油を動力とする新しい３機のＤＡＲＩＦ
彼らの狙いがそれだというのなら何としても阻止しなくてはならない
しかし、そいつらが適合者である可能性などないに等しい
ただでさえ希少な適合者がこんなタイミングであらわれるわけがない
のだ
つまり、見つけたところで動かせないはずだ
だが、こんな最重要の機密がどこからか漏れ、そして彼らが知って
いるというのならば……
「生かしておくわけにはいかねぇな」
それが下した結論だ
答えを聞くなり
「そうですね、ではＭＡＸは万一の場合に備えＤＡＲＩＦを、わた
しは銃で応戦します」
スピアーは間髪いれずにプランを提示する
（まったく、使える奴だ）
「あぁ、それでいい」
オレは一言言って立ち上がった
「お頭？どこへ？」
すでに駆け出し始めていた兄弟が振り返る

「オレもＤＡＲＩＦで待機しとくぜ」
ニヤッと笑うと兄弟はあきれるような笑みを向けると
「分かりました」
声をそろえ、現場に駆け出した
（なにか……イヤな予感がするぜ）
適合者であるはずは……ない、が
なんだ？この……感じは。

ＳＩＤＥ侵入者
「チッ！！」
耳障りなサイレン音
すこしばれるのが早いな……
だが！！
銃を片手に駆け抜ける
≪バンバンバン≫
発砲してくる敵よりも、早く……！！
「兄貴！！！！」
そんな血の飛び交う戦場でバズーカを背負って近づいてくるものがいた
「オリバーか！？」
≪ズゴォン≫
バズーカで敵を玉砕する
「ユノはどうした？」
聞くと、さらに物陰から現れた敵がドサドサと倒れて行った
「兄者！！」
ハンドガンを両手に持ち舞うように発砲、しなやかに体を操りバランスを崩すことなく着地する
≪ガチャ！！≫
たがいに背を合わせ各々の武器を構える
「ピーターの兄貴、怪我はないでがすか？」

「オフコース！！お前らこそだいじょぶか？」
「兄者、そろそろ……」
ユノは言うと神妙な面持ちでこちらを見る
「へいへい、ユノは真面目すぎるぜ」
「あなたが……」
言い終える前にユノは僕の金髪の頭を鷲掴みにして無理やり下げると、髪と髪の間からヌッとハンドガンを覗かせ、瓦礫の陰に隠れていた敵に発砲した
≪バン！！≫
耳元の銃声にピーという音が頭をめぐる
敵が血を噴き出し倒れるのを確認してからユノは僕を手荒に離すと
「楽天的すぎるんです」
と、冷たい視線を向けた
ゾッと悪寒が背筋を辿る
するとオリバーが
「おい、ユノ！！兄貴にその態度はなんだがすか！！」
と、怒声を放った
するとユノは
≪ズゴ≫
「んん！！！！」
オリバーののどの奥に銃口を当てる
「ふぁにふんでふぁす！！（何すんでがす）」
力任せに抗うオリバー
だが、その力をうまく逃がすユノは
「あんたみたいなバカに指図される覚えはない」
と、尚も銃を深く押しつけた
が、その時！！！！
≪バキュン！！≫
ユノのもう一方の手に握られていた銃が宙を舞った
「狙撃！？」

僕は銃の飛んだ逆側に目をやる
と、そこには
「なに遊んでんだよ、侵入者さん」
色黒の肌に黒いロングヘア、額の蛇の刺青……
「オール兄弟の二男……スピアー……だったな」
威嚇するように言う
すると彼は
「ふ～ん、一応ちゃんと調べてるんだな」
と笑みを浮かべた
「シュアー、敵の情報を知るはビクトリーへの布石だぜぃ？」
無理やり呑気に言って見せる
「ほう、それはそれは殊勝な心がけ……」
スピアーが言いかけた瞬間！！
≪ズゴォン≫
オリバーが発砲
あたりが爆煙に包まれる
「オォウ、オリバー、このタイミングで発砲するか？普通……」
「兄貴に銃を向けるなんて許せないでがす」
「そりゃぁありがたいが……」
爆煙が晴れた時、そこには二つの影が浮かんだ
いつの間にか落とした銃を拾ってユノがあの一瞬でスピアーに銃を
突きつけていたのだ
「あんた、死ね」
言うのと同時に発砲……が！！！
「グフッ」
血を吐いたのはユノのほうだった
「ユノ！！」
叫ぶと同時にさらなる銃撃が飛んできた
だが僕らもそれを散会してかわす
「このぉ！！ユノを！！！！！！」

バズーカを肩にかけるオリバー
だが、今撃っては……
「ウェイト！！！！ユノに当たる！！！！！！！！」
必死に発したその言葉だったが
オリバーが発射したバズーカ音の前に無残に散る
《ドゴォン》
「ユノ！！」
叫んで近づくと
更に濃くなった煙の中で倒れる女体があった
「ユノ……」
抱えるとユノはその手をバッと払い退けた
「兄者……、オリバーのお陰で命拾いした」
言うと瓦礫に凭れながらも立ち上がった
どうやら、間一髪バズーカの弾道はユノをそれ、更に銃弾を叩き込もうとしていたスピアーの方がたまらず逃げたらしい
しかし……
「オリバー、なんて無茶を！！」
自ら妹を危険に曝すなどアホだ
「ス……スミマセンでがす、兄貴」
恐縮するオリバーだったが今回ばかりは……
「なかなか無茶やるね、そこのデカブツ君」
いきなり背後から割り込んできた言葉に身構える
そんな僕らにスピアーはさらに
「俺は戦闘員の訓練なんて受けてないから、こう言うのは苦手なんだが……」
そうぼやくと、銃を捨ててどこからともなくマシンガンを取り出す
「ヘイヘイ……そんなもん取り出すなんざやぼじゃねぇのか？」
冷や汗が体中から湧き出るのを感じる
「重要なのは……勝敗だろ？」
言ってスピアーはマシンガンの引き金に指をかける

その瞬間、僕の体が後方に吹き飛ばされ、その反動である人物がすさまじい勢いで前に出た
腰の刀を抜き一気にスピアーを切りつける
が、瞬時に状況を把握したスピアーは後方にジャンプしてそれをかわした
「ユノ！！！！」
叫ぶオリバーを軽く無視して
「兄者！！」
と、ユノは大声で叫んだ
そのまま彼女はしばらくうつむき、なにか考え込む様子を見せてから
「兄者……」
と、今度は声を抑えて言った
そして
「私が……、私に任せてください」
そう大きくない声だったが、不思議としっかり聞こえた
無論、拒否の言葉を投げかける
が、あっさりと無視されてしまった
それどころか今まで見たことない……覚悟の目……というのだろうか？
そんな視線を向けられたら……
「分か……った」
そう言うしかないじゃないか
そんなやり取りを見ていたスピアーが
「クッ……ハハハハハハ！！！！！！！！！！！！」
突然大声で笑い出した
ギロリと睨みつけると
「そんな怖い顔すんなって……、妹置いていくなんて兄貴のすることとかとおもってさ」
挑発するように言った言葉に
「兄貴……」

と、オリバーが心配そうな顔を向けてくる
しかし、俺だって……
「言っとくが、ユノは強ェぜ」
覚悟の上だ
「ふ～ん……」
スピアーはユノに視線を移す
「いいぜ、面白そうだ」
言ってスピアーは銃口をユノに向け直す
その瞬間を見計らって
「ゴー、オリバー！！」
叫んで一目散に駆け出した
オリバーはもう一度バズーカを打ち込み攪乱させてから、弾切れとなった砲台を投げ捨て僕を追う
（頼んだぞ、すぐ戻る）
僕らは一度も振り返らずその場を後にした
しばらく静かになる戦場だったが、急に激しさを増した風が吹き、煙が切れるように晴れていく
「さて」
スピアーは一言言って……
≪ババババババババ！！！！！！！！！！≫
マシンガンを発砲
ユノも自分の服を裂いて先ほどの傷口にまき、走り出す
日本刀とマシンガン、本来ならばこの力の差は明白……だけど！！！！
「ハァァァ！！！」
ユノはすべての弾丸をかわすと一気に詰めよりその白刃を振りおろす
≪ガキィィィン≫
マシンガンを盾にその攻撃に耐えるスピアー
「けっ、本当に結構強ェじゃねぇか、ＭＡＸが喜びそうな相手だ」
笑い交じりに言う言葉には余裕さえうかがえる

「グチャグチャしゃべってると、舌噛むよ」
冷徹に言い放つユノ
そんな彼女に
「ハハハハハハ！！！！」
と声を上げると、スピアーはさらに出鱈目に発砲
たまらず距離を取るユノにバカみたいに弾丸を叩きこむ
「ＭＡＸってヒトの方が好戦的と聞いてたけどっ！！」
周りに散らばっていた瓦礫の山を切り裂き、それを宙に放り投げた
即席の盾で応戦する
瓦礫と瓦礫を反射して進む弾丸をしっかりと見切り、自分に勢いが
届く物のみその刀でもって両断する
「アイツも相当だな」
完璧な防御を見せつけて鋭い視線のまま呟いた

8話～戦闘～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。
もう、今回の話はわけがわかりません……
きっと前回の続きで過去の話なんでしょうけど、それが今後、どういう風に繋がっていくのか……
侵入者とは一体誰なのか……
そして侵入者たちの目的は!?

次回、ご期待ください。

9話～偽造（レプリカ）～

ＳＩＤＥピーター
「着いたぜ」
本部ドッグ
スカビオン側の整備士は全員……殺した
自分達の身のために、ユニクスに反対するＤ．Ｏ．Ｐ．Ａ．Ｒ．Ｓの思想は排除せねばならない
「兄貴、こいつらの動力源石油でがすよ」
オリバーはドッグ内にあった３機の蠍型（さそり）ＤＡＲＩＦをあちこちいじくってその答えに行き着く（カタログを見れば一発なんだが……）
「オーライ、そうらしいな」
言うと
「こいつら本当に動くんでがすか？」
尋ねながらオリバーは機体の燃料タンクを覗き込む
と、鼻を刺すような激臭に思わずひっくり返った
「ヘイ、オリバー、大丈夫か」
「だ……大丈夫でがす」
ムクッと鼻をつまみながら体を起こすと
「兄貴、これ凄い臭いでがす」
と、たまらず口も手で押さえた
僕もオリバーから臭ってきて一瞬目をまわす
「た……たぶん、ピュアな石油じゃ無いんだな、いろいろ……混ざってる」
押し寄せる吐き気に耐えながら言葉にするも、やはり
「オエオエ～」
「あ……兄貴！！」
言ってこちらに近づきながらオリバーも吐く
「来るなボケェ！！なにやってんだ！！」

汚物にてを触れないよう細心の注意を払いながら脳天にチョップをかます
「もらっちゃったでがす」
「もらっちゃったじゃねぇよ、ミーにかかったらどうすんだ！！」
「ス……スミマセンでがす」
頭を押さえて言うオリバー
僕は一度ため息をつき、言った
「とにかく、こいつらに乗らないことにはここに来た意味がナッシングだ、性能上は動いても、そもそも適合者じゃないとダメなんだからな」
「そ、そうでがすね」
オリバーを立たせて３機のＤＡＲＩＦのうち２機に乗り込む

ＤＡＲＩＦは手もとの２つのレバーと足にある車で言うところのアクセル、ギアによって操縦する
レバーはおもに武装の使用と機体の可動部分を動かすもの
アクセルはスラスターの出力
横に長いギアは動かすスラスターを決めるもの
ここまで言えば分かると思うがＤＡＲＩＦを動かすにあたって一番難しいのはスラスターの扱いだ
なにせそれらはすべて足で行わなければならない
出力を一歩間違えれば壁などの障害物に激突してしまう、しかもそれは微妙なアクセルの踏み具合で決まる
エンジンを吹かすスラスターを別のものと間違えばあらぬ方向に進んでしまう
基本的にＤＡＲＩＦは横スクロール運動はできないから横転してしまう場合もある
仮に適合者だったとしてもこの操作ができなければはっきり言って使い物にならない
そこでパイロットの強弱は決まるのだ

「さてさて、動いてくれよＤＡＲＩＦちゃん」
呟きながら起動手順を踏んで行く
コクピット天井のボタンを押し、レバーを手元にまで持っていく
そして
「ギアでスラスター選択、そして」
（アクセルを踏んでスラスターが動けば……晴れてこのＤＡＲＩＦの適合者だ）
「兄貴、準備ＯＫでがす」
オリバーから連絡が入る
僕はカールのかかった金髪を束ね、前髪を分ける
そして
「……ＯＫ、行こうぜ、オリバー」
「はいでがす」
二人で一度深呼吸して
「「ＤＡＲＩＦ！！起動！！！！！」」
言ってアクセルを踏み込む……すると！！！！！！
≪ブオォォォォォォォン≫
轟音とともに機体が動き出した
機体下部のスラスターを選択していたために機体がわずかだが浮く
「やりました、兄貴！！！動いたでがす！！！！！！」
フと横を見るとオリバー機も起動していた
「あぁ、俺もだ！！！！！」
２人ともだなんて……まさに奇跡
やはり神は俺達の見方ということか
「さて、ユノのところに急ぐぞ！！！！！」
叫んでスラスターを後部のものに切り替えて発進した

「ちっ、マジでなかなかやりやがる」
ユノの刀裁きに圧倒されジリジリと追い詰められる
スピアーはマシンガンを盾に使うのが精一杯で、発砲する余裕もない
「守っていては、勝てませんよ」
連撃のなかで放った言葉は続く金属音によって掻き消される
が、スピアーの耳にはしっかり届いたらしい
「そんな余裕、いつまで続くかな」
ユノはフンと鼻を鳴らすと
「負け惜しみを！！」
言ってさらに刀で切り付ける
その大振りをした一瞬、スピアーは盾にしていたマシンガンをユノの刀ごと投げ飛ばした
双方は武器を失い距離が開く
しかしユノは履いていた袴をまくりあげ、その中から刃渡り３０センチ程の短刀を取り出した
一瞬覗いたしなやかな脚は戦闘中であってもやはり見入ってしまう
スピアーは一度口笛を吹くと
「あんた、オレのもんにならないか？ここで殺すには惜しい」
と、真顔で提案するように言った
しかし無論ユノにその気はない
「あなたと連れ添う位なら死んだほうがましよ」
「そうかい……」
一瞬肩をすぼめるような仕草を見せたかと思うと彼はポイッとマシンガンを投げ捨てた
「なんの真似？」
怪しげに顔をしかめるユノ
するとスピアーは橙に染まった空を仰ぐように見つめ
「本当に……あんたのほうが強いのかもな」
と、どこかはかなげにぼやいた
突然の挙動にたじろぐしかないユノを尻目に

「そろそろ来ると思うぜ」
今度はハッキリとユノに投げかける
「……？話の意図がよめな……」
言いかけたその時だった
≪カタカタカタカタ≫
辺りにひしめいている石やら砂やらが突然動き出した
（なにかが近付いてきてる？）
思ったユノだったが見渡す限りではそれらしき物体は見当たらない
しかしやがて音はおおきくなり激しい揺れを伴ってくる
≪ゴゴゴゴゴゴ≫
轟音とまで言っても差し支えのないほどの大きさになっても、やはり何も見当たらない
「一体何が起きて……」
その時だった、轟音にまぎれて
≪ガガガガガガ≫
何かを削るような……そんな音がかすかに混ざってきた
ここにきてようやくユノは
「下か！！！！！！！」
叫んだのもつかの間
≪ボゴン！！！≫
鈍い音を纏いながら球体から棘が生えたような赤紫の物体がすさまじいスピードで回転しながら地面を突き破ってきた
寸でのところでかわしたユノだったが流石に吹き飛ばされて地面に体を打ちつける
球体は別の球体と繋がっていてさらにそれも他の球体とくっついている
そんなふうにして5コの球体が出てきたところで動きが止まった
「これは……」
もちろん答えなんか聞かなくてもそれが何なのかなど容易に察しがつく

機体ナンバー『ＣＳ－０１Ｓ』蠍型ＤＡＲＩＦ名称テラー、パイロットは……黄玉のビンクス
あたかも血のような赤紫の鎧を全身に纏い、闇の砂漠の地中から不気味に光を放ちはい出るその姿は恐怖を駆り立てるのには充分すぎる

今見えているのはその尻尾と言うことだ
やがて地面はモクモクと隆起して尾に続いて機械はその全容を現す
「ビンクス、ですか……」
つぶやくユノ
夕日を背にして黒い影に包まれたその機体はこの空の元では余りに異質
あっという間に影はユノを飲み込んだ
「何やってるんだ」
なんの感情も無い声が機械から放たれる
最初、誰に向かってかもわからないその言葉だったが
「何やっている、スピアー！！」
激昂している様子はどうやらスピアーに向けてのようだった
「スミマセン、頭！」
間髪入れずに謝罪する
しかし
「スミマセンじゃねぇだろ！！！」
と、あっさり跳ね退けられてしまう
恐縮するスピアーに
「ったく、生身の女に苦戦を強いられるなど何事だ！！」
さらに言葉を浴びせる
ただただ縮こまるスピアーだったが咄嗟の殺気に体を翻した
《ヒュン》
体の僅か上部を長い刃が通過する
スピアーはそのままバック転して距離をとる

「なにをモメているんですか？戦いの最中だと言うのに」
ユノは刀を構え直して挑発する
すると
「ハッハッハ、お前バカか！！」
機械越しの声が彼女を罵る
「何を！！」
反発するユノだったが向けられた銃口に思わず体の動きが止まった
機体上部に取り付けられた２つの中口径ライフル
小型とは言え、相手を……ましてや生身の人間を蜂の巣にするのには事欠くことはない
打つ手なし
まさにその言葉こそがしっくりくる
が、不思議とユノは絶望はしなかった
そう、彼女にはまだとっておきの助っ人がいることを忘れてはならない
《バコォォォン》
爆音と共に２００メートルほど向こうのコンテナから黒煙が揚がると、同時に煙りを切り裂くように掻き分けながら近づく２機の淡い青の物体が現れた
それは間違いなく、製造中の偽物（レプリカ）ＤＡＲＩＦだった
「まさかっ……」
思わず絶句するスピアー
テラーからも冗談とは思えないほどの深刻なオーラが漂って来る
《ゴゴゴゴゴ》
まだ爆発音の余韻が残る中
しかし爆発よりも２人はうごめく巨体に目が行く
４本の脚に大きな尾と２対のハサミを携えてこちらに近付いてくる２機をただただ見つめ、そしてぼやいた
「「２人とも……適合者だった、だと？」」

9話～偽造（レプリカ）～（後書き）

皆さんお久しぶりです、ジョン＆amp;ちーのジョンです。

なんか1月の初めあたりは調子乗ってバンバン更新していたのですが、中ごろになるとちーがまったく書かなくなりまして……

だから更新ペースを考えろ、といったのに（笑

さて、今回でも侵入の目的が分かりませんでしたね……

一体この話はどういうことなのか！？

次回、ご期待ください。

１０話～戦人（いくさびと）～

「「二人とも、適合者だっただと？」」
自然と２人の声がハモる
目の前にはテラーを模して作った３機のうちの２機
侵入者の３人のうち２人が、しかも『この機体の』適合者である確率なんてほとんど無いに等しかった
が、しかし
「これは現実か？？」
コクピットでぼやく大男の目はカッと見開らかれ
驚きと言う感情を如実に映し出していた

「ヘイ！！無事か？ユノ！！」
「兄者！！」
叫び返して自身の無事を知らせる
「コイツ！！ユノから離れろでがす！！！！」
テラーの姿を確認して偽物（レプリカ）に側面装備されたバズーカを放つ
《シュー》
と風を切り白煙を上げて進んでいくそれは真っ直ぐテラーに向かって進む
呆けてしまっていたビンクスは反応が遅れ
《ピピピピ》
と言う高熱源体の接近を知らせる警戒音でようやく我に帰る
が、もう避けられる距離でも無い
「チィ！」
ビンクスは咄嗟にその巨大な尾を前面に展開して即席の盾にする
《バゴォォォン！！！》
先程のオリバーのバズーカなどの比ではない轟音と共に爆発する
辺りは突風に包まれ転がった岩までもが宙に投げ出された

無論、ユノも例外ではない

「なんて威力でがす……」
自分でもビビッタという様子のオリバーに
「感心してる場合じゃねぇ！！ユノ！！」
罵声を浴びせつつ妹の名を叫ぶ
小石……いやもう岩か
とにかくそんな瓦礫が宙を飛び交う中で
「オリバー、私を殺す気か」
通る声が一面に響く
「無事だったか……」
安堵の声を漏らすピーター
それに続き
「スマンでがす……」
と、すかさず恐縮するオリバー
そんな彼をユノよりも早く、ピーターが叱り付けた
「ヘイ、オリバー！！さっき注意したばっかりだってのに……、帰ったらただではすまさんぞ！！」
「うっ、分かってるでがす……」
コクピットの中にいる訳だから姿なんて見えないが、冷や汗ダラダラのオリバーの姿が目に浮かぶ
（言いたいことを全部言われた感じね）
苦笑していると今だ晴れない砂煙りのなかで赤い長方形の光が一つ、じっとユノを見つめていた
血の気が一気に引いていくユノ
体はすでに赤紫の鋏（ハサミ）に囲まれていた
「なっ！」
絶句したのもつかの間
彼女の体を両断するべく二つの刃が向かってきた
思わずギュッときつく目をつむるユノだったが、しばらくしても体

に痛みは走らない
「死……んだ？」
呟いたが
「しっかり気を持て！！」
聞き慣れた声が我に戻してくれた
目を開けると鋏と体との間、側面にリニアガンを装備した方の機体、
偽物（レプリカ）ピーター機の足が割り込んでいた
「兄者！！」
ユノの視線を確認すると
「おうおう……、ビンクスさんよぉ。不意打ちなんてクールじゃねェよなぁ」
ピーターはモニター越しにテラーを睨みつけた
しかしビンクスは
「スピアー、生きてるか」
「モチロンですよ」
ピーターの事など無視して、とりあえず兄弟の無事を確認する
「ヘイ、ビンクス！！」
叫んでリニアガンを構えるピーター
するとテラーは中口径ライフルをピーターに向けた
互いに銃を向け静止する
重苦しい空気、火と土の臭い
戦場独特の火薬やら鉄やらの臭いも、今になって鼻を刺す
「ユノ、お前もドックにいって機体を試して来い」
どこかからっぽな言葉だったが響く音にユノは頷いた

「スピアー、テメェも何ボサッとしてやがる」
ビンクスの言葉に
「スミマセン、すぐに行ってきます」
スピアーはユノを鋭く睨みつけ、足早に自機を取りに行った
ユノも格納庫へと向かう

もしも……もしも彼女も適合者だったらそれは相当に厄介なことになる
戦いになったらＤＡＲＩＦ６機による戦闘になり、それはもう『戦争』だ。
そして不思議とビンクスは彼女がそうであると、半ば確信に近いものを感じていた
ここでユノを撃ち殺す事もできた
が、結局トリガーを引くことはなかった
自分でも明確な理由はわからない
だが理由があるのだとすればそれは

『何か運命的な何かを感じた』

そんな言葉が１番相応しい

〔ＳＩＤＥビンクス〕
ユノが格納庫へと入ったのを確認し、俺はシザーを構える
裂け目の所に小口径ミサイルが付いているこのシザーは中距離攻撃も可能だ
それに気づいて侵入者の１番上らしい奴もワンテンポ遅れてライフルをこちらに向ける
（なぜ俺があの女に発砲しなかったのか不思議なんだろうな）
そんなことを思いつつも敵の攻撃に備える
相手は２機
この機体の偽物だからスペック的にはこちらが上
少しくらいなら無茶しても……
いや、落ち着け
こちらが先手を打つと隙が生まれ、攻撃しなかった方の返り討ちを受けることになる

ここは辛抱強く、あちらがシビレを切らして攻撃して来るのを待つしかない
……
……
……
誰も動かない
双方武器を構えるだけで誰も発砲しない
が、そんな我慢比べに敵の3番目のやつ……オリバー、とか言ったか。
そいつがとうとう根負けした
「ウォォォォ！！」
叫んで両側面に2門構えられたバズーカを発射する
（しめた！！！）
俺はわざと交わさず先程と同じ様に尾に当てる
バズーカはガンやミサイルと違い威力が高く、受けるとそこそこダメージが蓄積する
本来ならば、バズーカを直接受けるのは望ましくない、というかそんなことしないのが当たり前だ
だがこちらには狙いがある
「直撃でがす！！」
オリバーが歓喜の声をあげた
敵1番手のピーターも一息つく
が、すぐ異変に気づいたようだ
爆発により充満する白煙のなか、目立つはずの黒い影がそこにはない
依然騒いでいたオリバーだったが煙が晴れるにつれ彼もまた、異変に気づく
「兄……貴？」
オリバーがモニターを繋げて神妙な声色で尋ねてきた
が、ピーターは白煙だけを見つめ、答えない
しかと見ていると、機体があった辺りに大きな穴があった

「！！！」
ピーターの直感がそれが何を意味しているか瞬時に告げた
「オリバー！！下部スラスターをフルバーストだ！！」
何が起きているか状況が飲み込めないでいた彼だったが、そこは慣れ
己が兄貴の指示に咄嗟に従う
それをみてピーターも思いっきりアクセルを踏み込んだ

蠍型（さそり）ＤＡＲＩＦは基本的にはその８本の脚を使って移動するが、早
く移動したいときや咄嗟のときの為に機体下部に大型のスラスター
が付いており、少し浮いた状態で移動する事もできる
そのスラスターを全開に蒸せば６～１０メートル位なら飛び上がれ
ると言う訳だ
もっとも、瞬間的にだが……

ピーターの予測は的中した
機体を浮かせた瞬間、大事にヒビがはいり初め、地層ごと押し上げ
たテラーが姿を現した
やはり気づくのが少し遅かったのか、シザーがピーター機の下部を
かすめる
かすめると言ってもあの巨大なシザーだ、加えて地面すれすれにあ
る蠍型の下部は殆ど武装されてないに等しい
ダメージは大きかった
《ドカン！！》
激しく地面に打ち付けられる
「兄……っ！！！」
言いかけたオリバーも空中に浮いたまんま強靭な尾にたたき付けら
れる
《ガシャン！！！！》
けたたましい金属音の後、オリバー機も地に激突する

「チッ」
舌打ちして
「下にいけたか……」
幸いひっくり返りはしなかったようだ。ピーターは機体を構えさせたが……
「お前らとオレの力の差は歴然だな」
フッと風が吹くとピーターは背に凄まじい悪寒を感じた
《ピピピピ》
突然の警報に理解が追いつかないピーター
「死ね」
冷徹にいいあげる言葉
俺はシザーで偽物を捕らえ、ゼロ距離射撃を放った
「終わったな」
《バン》
攻撃を受けた機体は吹っ飛んだ
が、明らかに吹っ飛ぶ方向がおかしい
青いはずの敵の機体の流れる残像のなかに僅かに差し込む黄色
これは……
「まさか！？」
思考と現実が一致する
黄色の物体もまた、回りの3機と同じ形状をしていた
「兄者！！！」
その中から聞こえる女の声は紛れも無い
（やはり、あいつも適合者だったか、ユノとやら目）
ユノは自機をピーター機に突撃させ、間一髪
ゼロ距離射撃から救ったのだ
「このっ！！死ぬのはあなただ」
仕返しとばかりにユノ機の側面に装備された長刀「黄槍」を奮ったしかし
《バシュンッ》

今度は目を開けられないほどのまばゆい光りを纏った光線に阻まれた
加えて幾弾もの銃撃に曝される
「今度はなに！？」
思わず叫ぶユノ
光線が来た方を見ると2体の陰がいつの間にか覗いていた淡い星の
輝きを背に現れた

「頭、油断しすぎ……」
機体のあちこちに構えられたライフルから煙が上る
ハァ、と溜息をつくと
「ククク……」
僚機のモニターから笑い声が聞こえた
何かと思うと
「ハハハハハハハッ！！！」
何やらＭＡＸが高らかに声を上げ始めた
（はじまったな）
通信の通っていた俺はそんなことを思いつつ顔をしかめた

「戦だ……戦、テメェら！！全員かかってきやがれぇぇエェェ！！
！！！！」

１０話～戦人（いくさびと）～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。
今日は疲れてるんで長ったらしい話はなしにします。（「はなしはなし（話は無し）」を変換しようとすると、「話し話」とかになっちゃいますよね（笑 ）
最近忙しいので、こんなことあると思いますが、許してください。
と、言うことでどうやら僕の知らないところでジョンがサボり始めましたね
あっ、自己紹介が遅れました、ちーです

この過去編、実は3，４巻で終わらすつもりだったんですけど大分長引いてしまいましたね（汗
ＤＡＲＩＦとかの説明は後々にしようかとも思っていたんですが、考えてみたら説明抜きで戦闘とかはむりですよね（笑
なのでどうせならとビンクス、ＭＡＸ、スピアー、ユノ、ピーター、オリバー（ちなみにＭＡＸとスピアーは兄弟ですがビンクスとはただの上司、部下の関係なのであしからず）の性格や才能などを織り交ぜました
なのでもう少し過去編続きます
でもここをしっかり読んでくだされば後の話に面白味が出てくると思うのでご期待ください

そんなこんなでもう少し過去編続きますが、何とぞよろしくお願いします

それでは、次回、ご期待ください。

11話〜激戦〜

「テメェらぁ！！かかってこいや！！！！」
オール兄弟3男、ＭＡＸ・オール
彼の性格には「好戦的」と言う言葉こそ相応しい
普段はそんなこともないのだが、一度コックピットレバーを握ると
急に歯止めが効かなくなるらしい
彼の操る機体は「ＣＳ－０２Ｓ」エリマキトカゲ型―ノワール―
先程の超熱源体、光のビームともとれる攻撃はこの機体によるものだ

先程まで薄くはあったが出てきた月が、急に雲に隠される
雲の陰は偽物（レプリカ）を操る3兄弟を包み込んだ
「……兄貴」
やっと起き上がったオリバーが不安そうに声を上げた
「兄者」
ユノもまた、同様に声を掛ける
ピーターは一度口ごもるような仕草を見せると
「心配するな」
額に星の光が反射する

「ククク……んじゃぁ行くぜ！！」
それを服の袖でかき消すよりも早く、声が轟いた
≪コォォォォォォォ≫
軽快なスラスター音が聞こえたかと思うと、ユノの目の前に突如黒い影が現れた
「ヒャッホォ！！！」
ＭＡＸは極上の笑みを浮かべて機体の前足に取り付けられた「キラークロー」を振った
ユノは咄嗟に「黄槍」を構える

が、流石に出遅れた
衝撃で機体がわずかに後方に吹っ飛ばされる
「ユノ！！！！」
叫んでピーターはライフルを構え、発砲する
しかし
「お前の相手は！！！！！」
異常に長い機体がそこに割って入って銃弾を尾で受け流された
「チィィィッ、スピアーか！！！」
ピーターは負けじと発砲し続けるも「ブレードテイル」と名付けられたその武器で微妙に角度を変えられ直撃しない
それどころか回り込んで来た頭部がピーター機の背後で唸りをあげていた
「マズイ！！！」
スピアーがその鋭い牙で引き裂こうとした瞬間
≪ババン≫
横殴りの衝撃にたまらず頭を引っ込めた
「……オリバー！！」
少し理解に時間がかかったが仲間の名前を叫ぶ
「兄貴は……やらせないでがす！！！！ウォォォォォォォォォォ」
さらに叫んで照準を合わせるも、彼もまた、敵の存在を忘れていた
≪ボォォォォォォン≫
突如砂漠の大地が噴火したかのように隆起して砂が吹き荒れる
そしてオリバー機の足を完全に捕えたビンクスは
「お前じゃ相手にならん！！！！！」
と、そのまま振り飛ばした
大きな機体が宙を舞い、そして轟音とともに砂を吹き上げる
「まずは一機」
小さく呟いたビンクスだったが続いて走った後方からの衝撃に振り返った
「まだ……まだでがすよ」

「フン、くらいつく……！！」
言って「シザーミサイル」と「中口径ライフル」を構えたビンクスは一気にオリバーに向けて発砲した
対するオリバーも「バズーカ」とシザーで対応する
弾と弾、或いは地面と激突して爆発を起こす
その黒煙の中から数弾が目標物に到達する
それをビンクスは地中に潜ることで、オリバーは「ドリルテイル」に当てることで回避した
このよけ方、どちらが次につながるかと言えば……
間違いなく前者だ
ビンクスは地中から発砲
砂でできた大地だからこそできる技だ
モチロン、誰にでもできるような技術じゃない

どこから来るかわからない銃撃に困惑し、ただがむしゃらに動き回るしかないオリバー
「クソッ、こいつ！！」
ほとんどやけくそでオリバーもバズーカを地面に向けて発砲する
いくら砂といえど地面であることに変わりはない
下手をすれば自分の真下で爆発して自爆も危うい策だが
とにかく、彼は運が良かった
バズーカ砲はみるみる地面に潜っていき、地中何メートルか潜ったところで爆発し
これでもかというばかりに砂を吹きあらした
そして、それと一緒にテラーも宙に放り投げられる
「よっしゃ！！！」
オリバーはとどめとばかりに近づいてドリルテイルをかざす
「もらったぁ！！！！！」
そして思いっきりテラーに付きたてた
≪バゴン≫

砂漠には似つかわしくない鈍い音がこだました
［ＳＩＤＥユノＶＳＭＡＸ］
第一の牽制を受けたユノは咄嗟に黄槍で防御した
だが間に合わずに機体は後方にわずかに押される
「コイツッ！！！」
ユノはすさまじいスラスター裁きで吹っ飛ばされながらも体制を保ち、機体上部の中口径ミサイルを発砲
それはみごとにノワールに直撃した
「ッソォォォ」
直撃を食らいつつも彼の戦意はそがれるどころかますます向上する
「やりやがったなァァァァァ！！！！！！！！！」
叫び、さらに出鱈目な速さで突っ込んでくる
やっと地に足のついたユノ機は黄槍を構えて対応する
≪シャキン≫
ノワールのふともも部分から3本の刃、左右合わせて6本の刃「固定型キロロ」が展開した
「オォォォォォ」
さらに叫んで早さを生かしてそこかしこに切りつける
が、ユノの戦闘センスは並大抵のものではなかった
ここにきて、一気に才能が……いや、本来の力がむき出しになった
「そんな攻撃」
言ったかと思うとキロロをシザーで掴みとり、一瞬にしてノワールの動きを止めた
「刃が増えたわけでもないでしょう……」
「コイツッ」
振り払おうと我武者羅にレバーをきるＭＡＸだったが離れる気配すら見えない
あせっているＭＡＸをあざ笑うかのように、ユノは掴んだ2本のキロロを砕いた

≪バキャン≫
「チックショウが！！！！」
砕かれはしたもののまだ４本残っている
「オラァァァァァ！！！」
スラスターを全開に吹かす
しかし、いつの間にやらユノ機の姿が見えなくなっていた
「なっ……一体どこに！？」
……と、一瞬黒い影が機体上部を横切った
ハッと息をのむＭＡＸ
「上か！！！！！！」
が、気づいた時には時すでに遅し
蠍型の最大の武器であるドリルテイルが降り注いできていた
（かわすのはもう無理か）
一瞬の判断
ＭＡＸは経験からそう判断し、大きな動きはせず、少し前方にずれた
≪バギャァン≫
ドリルテイルはもともとのパワーに加え、重力の力も重なりすさまじい破壊力で持ってノワールのしなやかな尾を軽々と切断
反動で地面にめり込むも砂漠故に突き刺さりはしない
砂を大量に巻き上げて豪快に地面へとたどり着く
尾を切断されたノワールもまた、その反動で宙に浮き、吹っ飛ばされていた
「かわされた！？」
半ば半信半疑ながらユノはノワールへと視線を動かした
その尾からはバチバチと切断された電気回路が火を噴いている
が、それよりも、ユノの視線は大きく開かれたエリマキへと集中していた
ノワール最大の武器ともいえる「ミラー反射型射出兵器『ミルリア』」

太陽、月、星
自然に発光している光をエリマキ状の鏡で反射し、そのエネルギーを口の中から突起した避雷針のようなものに集中させ、一気に放つという実弾を使わない次世代兵器である
これこそ、先ほどの光のビームの正体だ

≪コォォォォォォォ≫
まばゆい光がノワールの頭部を包む……そして！！！
≪ヒュゥゥゥゥン≫
高エネルギー体が射出された
先ほどの反動でまだ満足に機体が動かないユノをそれはあっという間に包み込んだ

［ＳＩＤＥピーターＶＳスピアー］
ジーボルのコクピットは頭部にある
したがって、先ほどの攻撃はかなり効いていた
あまりの衝撃に半分意識が飛びかけていたスピアーはスラスター操作を誤り機体を強く地面に打ち付けていた
しかもあまり移動していないためここはまだ基地の敷地内だ
地面は堅い岩で覆われている
激しい金属音とともに動かなくなった機体をピーターはただただ眺めていた
（終わった……のか？）
しばらくしても動く気配を見せないスピアー
ピーターは
「ＯＫ……」
と、とどめを刺すべくドリルテイルを高々と掲げた
と、
≪ヒュゥゥゥゥゥン≫
機体上部をまばゆい光が通り抜けた

それは遥か彼方の砂丘に当たり、大地ごとごっそり抉りとり、爆発した

凄まじい風が吹き荒れる

（ＷＨＡＴ？いったいなんだ？）

振り返ると、そこには今だバチバチと先ほどの余波の残るパラボアンテナのような物を頭部に携えた機体が月を背に聳えていた

と、ピーターは不意にその前に転がった黒い塊をとらえる

あの形……蠍？それに側面のあの槍は……！！！！

「ユノ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

全力で叫ぶも届かない、通信を開いても画面は映らず砂嵐状態

（おい……嘘だろう……、まさか……死んだ？）

目を大きく見開き食い入るようにユノ機を見る

だが、微動だにしない

と、今度は別方向から

「まったく……ザコのラッキーパンチが続くと思うな……」

と、渋い声が飛んで来た

そこにあるのは自分たちとは違う

赤紫の機体

本物（オリジナル）の蠍型ＤＡＲＩＦ

その機体の出現は一重に彼の弟がやられたことを意味する

「オリ……バー？」

テラーの奥にかすかに見える、あの見るも無残に潰されている機体がそれだというのか？

機体を少し宙に浮かせて近づいてくる機体

それはピーターの数十メートル手前で着地

≪カシャン≫

という軽快な音だけが耳に木霊した

しばしの沈黙

が、その沈黙が破られるのはそう遅くはなかった
「おま……お前ら！！！！！！弟妹（きょうだい）を！！！！！！」
激昂し、憤怒し、悲愴し、失望し
ありとあらゆる感情が交わる中、出てきた言葉がそれだった
「フンッ」
が、それは文字どおり鼻先で返される
「あんなチャンス……、長距離から攻撃すればいいものを、おめおめ自分から突っ込んでくるなんて、アンタんとこの弟は随分と低能だな。あれじゃぁ『どうぞ反撃してください』と言っているようなもんじゃないか」
さらにビンクスは侮辱する
これは……兄としては溜まったものではない
「チック……」
わなわなと体を震わせ、喉を唸らせレバーをきつく握りしめる
「チクショウがぁぁぁぁぁぁぁぁああぁァァァ」
叫んでグウォォォンとスラスターを吹かし一気にビンクスの懐に飛び込む
が、そんな直線的な攻撃、一軍隊の長であるビンクスに交わせぬ筈がない
ビンクスはフッと右スラスターを動かし左に滑るように移動
勢い余ったピーター機はガツンと倉庫にぶつかる
軍倉庫の堅固な壁がバゴンと凹む
いくらコクピットが機体奥の中腹にあるとはいえ、相当な衝撃が走ったであろうにピーターは構わずまた突っ込んだ
「オォォォォォォ！！！！！！」
「まったくよぉ、アンタもバカかよ！！！！」
突っ込んでくるピーターに怒声を浴びせながらライフルを打ち込む
≪カコンカコン≫
ただでさえ厚い装甲に加えてこのスピード
ものの見事に弾ははじかれ瞬間に2機の間合いが詰まる

「ユーが……、あんたがＰＡＳＣに歯向かうから…俺たちは！！！！」
シザーでビンクス機の足を全て掴みそのまま投げ飛ばす
「コイツっ、急に動きが！！！！」
≪ドカンッ≫
水しぶきのように砂が舞い、あたりを包み込む
「頭！！！！」
援護しようとＭＡＸが銃を構える
だが
「手ェだすんじゃねぇよ！！！！！！！！！！」
あろうことかビンクスは彼に発砲した
「かし……ら？」

砂舞う戦場でピーターはさらにライフルとミサイルを撃ち込む
それもジャンプしながら、だ
爆煙も相まって視界がさらに悪くなる
無論、ピーターはそんなこと気にもしない
「あんたがＰＡＳＣに従っていれば……、おとなしくユニクスに行っていれば、ミー達の両親は殺されなかったんだ！！！！！！」
「コイツ、何言ってやがる」
回線もこの状況じゃまともにつながらない……はずだった
ところが、ザーという雑音の中であってもピーターの憤怒は、それでもこだました
「忘れたなんて言わせネェ、お前がＰＡＳＣ行き蹴ったあの日！！！！民衆がどうなったかナァ！！！！！」
我武者羅に奮ったピーターのドリルテイルがテラーのライフルに直撃
「チッ」
咄嗟に武装解除して地中に潜り込む
≪バゴォォォォン≫
さらに煙と砂を吹き上げて、とうとうコクピットにまで砂が入りこ

んで来た
「あんな至近距離で武器を爆破させるなんて……アイツ死ぬ気か？
まぁ……そんなこともう考えてネェか。さぁて……こんどはオレの番だぜ」
グウォォォォォォォン
「スラスター全開ッ、スペースコアの出力を側面に集中！！！」

突如砂の中から黒紫の光があふれだす
「まさかお頭……あれを」
「まじかぃ、やべぇな……こりゃぁ」
状況を把握したオール兄弟は足早に撤退する
（なんだ？）
疑問に思ったのもつかの間
砂丘の中からテラーが現れた
それも側面に黒紫の光を蓄えて
（いったいなにを……、！！！！）
ふと、ピーターはその光を帯びた両側面の物体に目が行った
（あのドリルのような形状、古のマーク、そしてあの光……まさかっ！！！）
「U・S！？」
その言葉にフッと息をもらすと
「そのとおりだよ」
ビンクスはあざ笑うかのような声で言い放った
そして
「くらいやがれぇ！！！！！」
今まで膨らんでいた光が急に凝縮、かと思うと一瞬閃光を放ちドス黒いビームを発射した
≪キュルキュルキュル≫
U・S独特の音があたりに響き渡る
ピーターは必至でよけようとするもこんな巨大なビーム避けられる

わけがない
「チッ……クソッ！！！こんなところで……、両親の敵も取れずに……」
どんどんコクピットないが黒い光に包まれる
ガチャガチャとレバーを動かすもどれも状況打破にはつながらない
「この……コノッ！！」
ピーターはバンと壁を殴りつけた
「チク……ショウガァァァァァァァァァァァ」
黒い光が迫る
と、まさにその時だった
後方よりなにかとてつもない風が吹き荒れる
その風はU．Sの威力と互角……いや、それ以上？
なんとU，Sを受け切り
それどころか打ち勝ちビンクスを襲った
ピーター機も軽々と浮き上がり吹っ飛ばされる
周囲にあるもの、倉庫に建物、転がったユノ機にオリバー機
逃げていたはずのMAX　スピーアも成す術なく吹き飛ばされた

１１話～激戦～（後書き）

こんにちは。ジョン&ちーです。
今、東日本（北日本？）は地震のせいで大変なことになっていますね……
被災された方々は色々と大変だと思いますが、頑張ってください。
では、次回もごきたいください。

12話～乱入～

［ＳＩＤＥピーター］
「うおぉぉぉぉ」
突如あたりを襲った暴風
それは何もかもをのみこんだ
容易に機体は宙に投げ飛ばされ、高く……高く上がり、無造作に放りなげられる
大地の感触を感じた後、だがしかしそこには、「砂漠」という大地はすでに存在しなかった
見渡す限りの砂丘だったここが、あっという間に地層ともとれる堅い岩盤をむき出しにする
砂ではない、もはや岩でもない
そんな地球の「大地」そのものに打ちつけられては、もはやＤＡＲＩＦは起動しなかった
「いったい……なにが……」
あたりは先ほどの戦いに加えてさらに舞い上がった砂が充満し、もはや空気と呼べるものはそこに存在しない
ＤＡＲＩＦを降りるようなことがあればそれは死を意味する
ということは……
ＤＯＰＡＲＳ（ドパーズ）の人間もおそらくアノ３人以外は絶命しているだろう
もっとも、アノ３人がこの攻撃を食って生きていたらの話だが

あたりは暗闇、一寸先も見えない
ＤＡＲＩＦはすでに起動不可、照明がチカチカしだし、とうとう消え、カメラもダウン
「へへ……ミーらは生き埋めって訳ですかい」
一人ごとだ、ただ何かしてないとこの閉鎖感……きが触れてしまいそうだ

［ＳＩＤＥビンクス］
黄玉のビンクス
そう謳われたオレでさえ、攻撃の直撃を受けた
この「メシア・ノア」での三大勢力の一角の頭
実力もそれ相応だと自負している
現にピーターを圧倒し、さらにはＭＡＸ、スピアーと言った腕利きを従えているのだ
しかし、その「オレが」だ
攻撃の「直撃」を受けた
かすったとか、間一髪防御したとかではなく、直撃したのだ
これほど腹立たしく、そして戦意を駆り立てられるものはない
幸い、最初から空中に浮いていたためにそう高くは機体は上がらず、比較的浅い地点にテラーは埋もれた
しかもまだ４本の足と１本のシザーが言うことを聞く
そしてオレにはアノ攻撃の主がだれなのか容易に想像がついた
いや……、知っていた
ならばとオレは機体を動かし垣間見た攻撃の主の機体の真下へと潜り込んだ

［ＳＩＤＥ？？？］
≪ヒゥォォォォォ≫
攻撃の余波か、はたまたただの風か
静けさを取り戻した夜の砂漠に風が吹きわたった
「フン……散ったか……」
パイロットはぼやき、足跡と同じ方向に進もうとした時、
≪ピピピピピ≫
危険を知らせるサイレンが鳴った
「なんでぃ？」
思ったのもつかの間、突然目の前を赤い物体が縦に横切った

物体は宙を舞い、お世辞にも華麗とは言いにくい状態で着地する
「ケッ、流石はあんただ、一瞬でバックしやがった……。ラクダ型なんていう動きにくい機体でよくやるぜ、だが！！」声がしたかと思うと同時にカメラが一つ割れ、映像が一つ切れた
……数秒、目を丸くしたが
「俺に……当てるとはねぇ……、流石は黄玉、伊達にＰＡＳＣに反発しているわけでもないようでさぁ」
話しかけたつもりはないが、どうやら回線が開きっぱなしだったらしい
「あんたがいっても嫌味にしか聞こえないな」
返答された
黙っていると、ヤツはさらに続けた
「だが、最近は大人しくなったと聞いていたが……さすがだなその「ガスト」の威力は」

展開式巨大送風機「ガスト」
ラクダの代名詞とも言うべきコブに相当するふくらみを模した、体を縦に一周する円形の武器
使用時には、まず、後ろの円の円周の脇からさらに大きな円が展開し、内側と外側の円の間に扇風機で言う扇が張り、それが円と円の間で回転することで風が起こる
そして、その風は前の同様の構造の物で増幅、威力を増して敵を襲うということだ。
送風機と言うとあまり危険なイメージは出てこないが、あくまでそれは家庭用のものであって、武器ではないからだ
武器にしようと思えば、実弾攻撃を事実上無効にでき、さらに無弾攻撃に匹敵する力を出せる
これほどの良武器はないだろう

「暴れていないだけで、機体をただ遊ばせているわけではないです

よ」
「フンッ、だが……多少劣化はみられるようだな、以前より風の威力が落ちてる……、前のブローを回すタイミングがずれてる証拠だ」
「そうだとしても、あんたを倒すには十分でさぁ……、いや、もうすでにグロッキーですかぃ」
見る限り、両方のシザーは使い物にならないらしい、ダランと地に引きずっている
あるはずの上部ライフルも損失
先客との戦闘で失ったか？
使用できそうな武器と言えば僅かに動くドリルテイルとU・Sだろう
U・Sは確かに強力だがテラーのそれは小規模のものでガストで押し返せる
どう戦っても俺の勝利は自明だ
「やれるだけやるさ、オレァ、黄玉だぞ！！！」
意気込み、U・Sを起動させる
「あんたも、バカじゃないですかぃ」

発射されたU・Sに対しガストを発動

渦巻くように相殺すると、パッと消えた
「ウゥラァァァ」
ビンクスは破損したスラスターを吹かし、偶然機体が前転するように動いたのを使いドリルテイルでたたき付ける
想定外の攻撃だったが直撃する事はない
だがテイルは前方のガストの外円を削り取って行った
（本当に、なかなかやるなぁ）
これでガストの攻撃力は半減と言う訳だ
（これは……）
さらに振り下ろされたテイルをオレァは翻り、尾で受け止め一度動きを封じると呼び掛けた

「おい！！黄玉」
だがオレの攻撃を振り払い、黄玉は自由を獲得する
攻撃にでるかと思ったが、……その気はないらしい
どうやらオレの話を聞く気はあるようだ
「なんだ？「砂漠の風来坊」ディンともあろうものが……、戦闘中に話し掛けるとは」
どんなに不利でも下手には出ない、この辺、一国のトップとしては流石だな
「聞け、黄玉。あんたはその状態、オレもあんたと戦いたい訳じゃない。どうですかぃ？ここは双方引き上げと言う事で」
呼び掛けに対し、ビンクスは
「ケッ、お前から仕掛けて来といて今更何をいってやがる」
と、はねつける
が、今の提案はあいつにしてみれば願ってもない事だ
だったらなぜ受け入れないのか……、簡単な事だ、ヤツの立場がそれを許さない
ならば……
オレはガストを展開
狙いは……さっきの攻撃に耐えた僅かに残る倉庫と、ＤＯＰＡＲｓ直轄域の小さな村だ
（これでメンツは立つはずだ）
微か、黄玉が息を漏らす声が聞こえた
そしてそれから間もなく
「仕方ねぇ、その案ノッたぜ」
と彼はＤＡＲＩＦを止めた

（うまく行ったか……）
そう判断し、オレは踵を返して黄玉に背を向けると、後方からの声に引き止められた
「一つ、聞かせろ。なぜココに来た」

オレは両目でしかと黄玉を見つめ
「あんたには……、期待してるからさ」
と、謎めいた言葉を残し、その場を立ち去った

「フン、食えないヤツだ。アレが風来坊たる由縁か……！！」

「メシア・ノアが誇る3大勢力の一角、＝スカビオン＝「黄玉」のビンクスと、のちの＝ユニクス＝1番隊副隊長「風来坊」ディン、今から5年前のこの両名の接触を知るものは少ない」

【5年後、スカビオン】
「頭」
ウェーブのかかった金髪を揺らし、部屋の入口前で止まったのはかつてココを襲った、ピーターだ
「なんだ？」
机に足を乗せ、腕を組む様は誰が見てもカタギとは思わないだが、その人物こそが我等の頭なのだ
「これが、ユニクスから」
ブラインドで光を遮っている暗い部屋に、白い封筒が舞い、机にポンと乗っかった
ククッ
頭は微かに笑うと
「来たな、ティズ」
と、ドスの聞いた声を放った
……
「それはそうと、どっからかき集めたかは知りませんけど、外の鉄クズは何ですか？」

チラリと窓の外に目をやると、多くの軍人が、錆びたり欠けたりした鉄を運んでいた
「あぁ、あれか」
ビンクスもそちらに目を向け
「あんなもんでもサビを抜いて溶かせば使い物になる、少しでも戦闘員の武器を稼いでおきたくてな」
おどけるように言うビンクスに
「武器ならもう足りているのでは？」
少々勘ぐりをいれる
「ストックがあるにこしたことはない、戦場では何が起こるか分からないからな」
つらつらと伝聞調に語る彼にどこか不信感を覚えながらも
「して、どうするんですか？頭の事だ、素直にＯＫするとは思ってませんけど」
と、先ほどの話題に戻した
「勿論、蹴る」
「Ｂｒｅａｋ　Ｏｕｔ、戦争になりますぜ」
「望んだものだ、そちらは心配いらん」
「そちら『は』？」
深く突っ込むピーター
ビンクスはいやぁな表情をすると
「一番危惧すべきはテメェらだ、まぁ反乱を起こしたところで５年前の二の舞だがな。どうだ？本当に今回、俺らに手ェかすのか？」
弄ぶような口調だ
だがピーターは
「Ｓｈｉｔ。恩は返す、約束も果たす。だがこの戦争の後は、ついて行くことはない」
鉄製の右手を温かい左手で強く握りしめ、彼は部屋を後にした
ククッ

（恩、か。利用されてるともしらずに！！！）
ビンクスはブラインドをバッと開けた
「さぁ、戦争を始めようではないか、ＰＡＳＣ諸君！！！！！

１２話～乱入～（後書き）

こんにちは。ジョン＆ａｍｐ；ちーのジョンです。

やっと長ったらしい過去の話が終わりましたねー。

ようやく元の話に戻るみたいです。

なんか話の流れがよく分かりませんね……（笑

まぁ、次回もご期待ください。

13話～作戦～

［ＳＩＤＥ久杉］
僕は、宣戦布告を受けた後、ノロノロと3番隊支部の宿舎に戻った
僕の部屋のドアを開けるとそこには蓮華少将がいた
「少将？どうしたんです？っていうかどうやって部屋に……」
ま、いつものコトなのだが……
「この宿舎のマスターキー位持ってるわよ」
答えると、床をバンバンと叩いた
どうやら隣に座れということらしい
僕はドカッと座り込む
「ねぇ、喉渇いてない？」
「はい？あぁ……まぁ」
唐突の質問に思わず返答が鈍る
「はいっ♪」
渡されたのはペットボトル詰めのお茶だった
それを僕は少し飲む
「普通のお茶だ」
「当たり前でしょ！？」
「いや、少将のことだからなにか毒でも盛ってるのかと……」
「あたしそんなことしないわよ！！！」
突っ込むと少将は「はぁ」とため息をついた
そんな少将を見据え、ハテナを浮かべる僕
……
……
しばらく続く沈黙
僕はバツが悪くなり
「で……でも、急にどうしたんですか？お茶の差し入れなんて」
と話かけた

少将は急に真面目な顔をすると
「戦争」
その単語をポンッと宙に投げた
だが、それだけで十分、僕の体は一瞬ビクッと震え、硬直した
そんな僕に視線を向けると
「やっぱり、怖いのね」
と、言った
なにか、いたたまれない表情と共に
「あ……、当たり前です」
僕はやっとのことで返事する
「そうよね……、私も初めての戦いの時は……」
「だけど！！！」
少将が他に何か言う前に僕は大声で遮った
「久杉くん??」
問い掛ける少将に視線も向けず僕は淡々と続けた
「だけど……覚悟ができていない訳ではありません。僕は……軍人ですッ！！！」
言い切ると、少将は僕の肩に手をバンッと乗せ
「その覚悟は……、なんの覚悟?」
と、囁くように問い掛けた
「それは……」
口ごもった時、キィィンと部屋のドアが開いた
「久杉くん、あなたに客人よ、何でも戦場予……ッ！！！」
僕と少将の姿を捕らえ、アリアさんが硬直する
それはそうだろう
少将が僕の肩に手をやり、顔をこうまで近づけていたら……
端から見たらこれから何をしようとしていたか、誤解されてもおかしくない
「その……、お邪魔でした?」
汗をダラダラ垂らしながら僕は少将から離れた

「お邪……、お邪魔なんて、そんなことはッ！！」
「そうよ、ア……アリアちゃんどうかしたのッ！？」
なぜか二人とも正座している
フフッ
と笑みを浮かべたアリアさんの横から見知った顔が覗いた
「おいおい久杉、真昼間っからなにやってんだよ」
ヌフフと良いものを見たとでも言いたそうな表情
あぁぁぁァァァ
凄まじく殴りたい
「なんで、オメェがココにいんだよ！斉木！！！」
「へへへ、ちっとばかし話そうと思ったが、……スマンナ！！久杉！」
「うるせぇ！！！違うって言ってんだろ！！！！！」
渾身の右ストレート
だが斉木はヒラリとかわす
「ヘッヘッヘ、違うってお前初めて言ったじゃんか！！」
「こんのぉぉォォォ」
今度は左アッパーだ
だがこれも見事にかわされる
「当たんネェからやめときな♪」
「あらあら……」
アリアさんが呆れたように息をもらす、いや、感心してるのか？
かと思うと
「コラッ、やめなさい！！」
と、どこぞのかぁちゃんの様に場を沈めた
斉木は
「おっと、こりゃぁ、スマネェ」
と、詫びを入れるとフとアリアさんのパイロットのブローチに気付いて
「おっとっと、これは失礼致しました」

と、言い直した
「別にプライベートではいいのよ、敬語なんて使わなくて」
アリアさんはウィンクした
斉木は《ヒュー》と口笛を吹くと
「案外歳の差もアリかもな」
と、茶化すような口調で言った
アリアさんもまんざらでもない様子で
「大人をからかうもんじゃないよ」
と、笑みを浮かべた
（なにかが始まる予感がするなぁ（笑）花音が知ったらどうなるコトか）
そんな2人を見兼ねて
「で？何しに来たの？……斉木君……、だっけ？？」
と、少将が本題に戻った
「あっ、そうそう」
思い出したように手を叩くと、斉木はズカズカ部屋に押し入り、僕と少将の間に割り込んだ
「なんだよ？」
若干汗を滲ませながら問う
すると斉木は急に神妙な顔付きになり
「さっき、スペレンド大佐に御達示があったそうだ、戦闘員を指揮しろとね、長官殿から直々に。そんで、大佐がアックス大尉を通じて本部守備隊の予報を俺にしてもらいたいと伝えてきたんだ。コレがどういうことか分かるな？」
僕は少し考えた後、言った
「つまり、お前が今回僕等の作戦行動を指揮すると……、そういうことだな？」
「正解」
満足げな、しかし何処かうかない斉木の顔
コイツの性格からして、僕に命令するとか言う立場になったら跳び

はねて喜びそうなのに……
「どうした？」
聞くと、暗い空気が嫌いな斉木自らそういう空気をまとい口を開いた
「それが……なんの因果か……」
言いかけたその時
「失礼いたします、少佐どの」
と、柔らかい、しかし厳戒さを忘れないあいさつが部屋にこだました
パッと振り向くと
そこには、紛れも無い、荒口が立っていた
（あら……！！）
驚きの声すら喉元に詰まる
「なんの因果か、本部守備隊の作戦を立てた参謀は荒口なんだよ」
ボソッと耳元で斉木が呟く
「なっ！！！」
絶句して斉木を見つめ、再び荒口を見据える
荒口は動じず、当たり前のように部屋に入り、和式部屋に入った
そこで、なにやら紙を広げる
そして視線を
少将、アリアさん、斉木、僕と動かした
「お方共、揃っていますね。こちらに来て頂けませんか？」
すでに和式部屋にいた少将はグッと身を乗り出し、アリアさんは玄関口から歩いて、僕と斉木は洋式間から移動する
全員が和式部屋に入り、紙を囲むように座ると、白い紙にフワッと文字が現れた
どうやら地図のようだ
荒口は一度咳ばらいすると
「本部守備隊の作戦が決定したのでお伝え申し上げます。不明な点がございましたらすべての説明が終わり次第、お聞かせ願います」
一同、生唾を飲み込み、コクリと頷く
「では」

前置きして荒口は作戦概要を語りはじめた
「今回、我々は海岸近い、この本部を守る事になります。本作戦の要は南西部での戦闘ですので、本部が襲われる可能性はほぼ無いに等しいですが、市民の安心の為に、本部に戦闘員の『1番隊』『2番隊』『3番隊』、さらに、将官隊の「3番隊」3機のDARIFを残す事には大変重要な意義があります。つまり、我々は《本部に居ること》これこそが重要な訳です」
荒口は円形のPASC軍の土地のそれぞれ西側3点を指で指し示し（東側にはユニクスの都市が広がっている）各DARIFの配置場所を告げ、更に続けた
「ですが、戦闘本体が突破され、我々が戦闘を行わなければならなくなる可能性も視野に入れなければなりません。「黄玉」は侮れない男と聞きます。そうなった場合、我々が一番気にするべきは市民です。本部は市街地の端にあるとは言え、この近くで戦闘を行うとなれば市街戦になりかねませんし、そうなったら市民の犠牲は避けられないでしょう。無論、市民には避難勧告を出しますが、それでも避難を怠る市民が出て来るものです、残念ながら……」
「だったら本部から少し離れたこの丘陰に布陣すれば良いのでは？」
少将が本部より更に西側の起伏に富んだ地形の場所を指指す
「普通ならば、ね」
一言言って荒口は否定する
「どういうことだ？」
斉木が首を傾げる
「……、ホントは質問や提案は後にしてもらいたいんですけど」
釘を刺すように言ってから、荒口は続ける
「黄玉の愛機「テラー」は、地中潜航が可能との情報を耳にしました。故に、私は黄玉が少数の手練をつれて地中より攻め、市街地に直接乗り込んで来ると考えます。そうなると、本部に離れた所に布陣しても意味がありません」
言いながらさっき示した待機場所から東側に指を動かし、チェスの

ビショップ駒を3つそこに置いた
「この、本部より市街地に深く切り込んだ場所に布陣致します！！」
「なるほど」
斉木が感嘆の声を上げる
だが
「確かに考え抜かれた布陣だけど、それは相手に本当に地中潜航能力がある場合のみ有効な手段だわ」
アリアさんが指摘した
続いて僕も
「第一、そんな能力があるのなら間違いなく地中から攻めてくる。本部には……、いや、テイズ長官にはそれを伝えたのか？」
不確かな部分を突いた
が、
「無論です」
当たり前の様にその返事が返ってきた
「で？長官はなんて？」これは少将だ
「そんな情報はない、と、取り合って頂けませんでした」
淡々と答える荒口
「だったら、この作戦はあまりにも……」
アリアさんが口走る
「あまりにも、なんですか？」
瞬時に荒口は反応した
アリアさんは一度息を吐くと
「無謀、なんじゃない」
柔らかく言ってはいるが、表情は厳しい
「そうよね……」
少将が相槌を打つ
だが荒口はそれでも意見を変える気は無いようだ
「えぇ、そう思われるのは当然でしょう。しかし、アックス大尉からは本部守備隊の指揮は私に一任されていますし、言葉は悪いです

が、テイズ長官殿は参謀でもなければ戦況予報士でもありません。
こちらサイドの情報網の広さと正確さを分かってはいません」
言い切ると、荒口は資料をまとめはじめた
「とは言ってもね……」
少将とアリアさんが顔を見合わせる
と、そこに斉木が言った
「俺は、それで良いと思う」
皆の視線が斉木に向けられる
すると斉木は驚いた様な仕草をしてから、頭に手を回し
「お……俺も戦況予報士の一員だから、その……そこに回って来る情報量と正確さは知ってるから……よ」
と、言った
僕も
「斉木が良いなら僕もいいや、昔から斉木はカンがいい。斉木がやるって言ったことで失敗したことなんて一度もない」
と、賛成の言葉を口にした
アリアさん、少将はクスッと笑うと
「幼なじみの絆ってことかしら？」
と、笑顔を向けた
「え？まぁ、それもあるかな？」
僕は二人の顔をみた
斉木は僕同様笑みを浮かべているが荒口は他人事のような表情をしていた
フと、僕の表情が暗くなる
それを見てか、アリアさんが
「ま、そういうことで了解よ、荒口さん。行っていいわよ」
と、退室を促した
荒口はすでにまとめ終えた資料を手に部屋からスッと立ち去った

１３話～作戦～（後書き）

こんにちは、ジョン＆ａｍｐ；ちーのジョンです。
（日本が色々と大変なことになっているため、世間話は割愛させていただきます）

さて、今回から現代の話に戻ったみたいですね、はい。久杉とか斉木とかが懐かしいです（笑
７話の途中～１２話の途中の歴史話が今後どのように絡んでいくのかは見ものですね！！

では、次回もご期待ください。

１４話～告知～

「でも、流石ね」
唐突に行ったのは少将だ
「何が」
僕が尋ねると、少将は
「彼の才能が、よ」
と、答えた
才能……
まぁあいつはだから軍に選ばれた訳だし、今更それを疑う予知などないが……
「今のドコに才能を感じられたのです？」
そう、あんなのちょと頭が良くて、少し情報が入っていれば誰でもできる『憶測』だ
「仕事の早さに」
少将は短く答え、続けた
「今オペレーターの花音（かのん）にメール打ってみたんだけど、主力隊に作戦概要なんてまだ通達されてないみたいよ」
主力隊のオペレーターを任された彼女からの情報だ間違いはないだろう
「それに……」
一旦間を置く少将
部屋の皆が次の言葉に耳を傾ける
「それに、通達されるのなんて、宣戦布告の１日後が基本だわ」
この言葉には流石に一瞬驚いたが別に言うほどのことではない
「そりゃぁ、俺ら本部守備隊はあんまやることないですしね」
そう、斉木の言う通り
今回、この隊の仕事は少ない
それ故別に主力隊より早く作戦が決まってもおかしくない

というより普通だ
だが……
斉木も考えが行き着いたらしく
「ん？」
と、首を傾げた
「待てよ、パイロット会議が終わったのが４０分前、始まったのが更に３０分前で、参謀会議はその１０分ほど前に終わったはずだから……」
斉木と言う男は数字には滅法弱い
「大体１時間半って所ね」アリアさんが代わりに言った
「そんな時間であの作戦を！？」
素っ頓狂な声を上げる僕
「そうなるわよね」
言ってから少将は
「しかも、あの情報。黄玉のＤＡＲＩＦが地中での行動が可能なんて……一体いつどこから仕入れたのかしら」
と、何気なく問い掛けた
「スカビオンの……しかも親玉のＤＡＲＩＦの情報なんてこんな状況でもない限り知り得ないから前から知ってたって言うのも考えずらいし」
「あの自信も……参謀があれだけ言うんだ、間違いないだろうね」
アリアさんに続き、斉木が言った
じっと考えこむ４人
荒口が言ったことを信じる可きか否か
その答えは、夕日が部屋を照らそうとも、変わって月が顔を覗かせようとも、出ることはなかった

［次の日］
結局決心がつかぬままに４人とも僕の部屋で眠りこけていた
「朝……か」

ムクッと起き上がって腹を掻き定まらない視点でボーっと部屋を見渡した
（少将とアリアさんもいる訳だから現実は視点などすぐに定まったが、その辺は自重しておこう。ま、斉木が僕よりも早く起きていたら大変な事になっていたのは間違いない）
数分後
「あれ……、わたし寝ちゃった？」
少将が姿勢を起こした
「少将、おはようございます」
ビックリしたようにこちらに視線を向ける少将
「あれ、なんで久杉君が……」
ふと目を下にやるとそこには開けた服があった
「ッ！！！！！！」
ガバッと服を抱き寄せあらわなった肌を隠す
「く……久杉くん！？」
その声で斉木とアリアさんも目を覚ました
「……どうしました？少将……」
「何事だ？？」
と、不意に視界に入った光景に瞬時に赤面した2人は
「ご……ごめんなさい！！！」
と、部屋の外に飛び出して行った
状況を飲み込めない僕だったが目の前のいやに恥ずかしそうな少将を見て思考と状況が合致した
「ち……違いますよ！！少将ッ！！！！」
慌てて否定する
が、彼女は何も言わず、動かず、反応せず
（なんだ……、コノ空気は……）
いろんな意味で緊張し、唾を飲み込む
「久杉君……」
「は……はい……」

恐る恐る答える
「本当に……何も……」
「する訳ないじゃないですか！！」
手を振って否定する
すると少将はニコッとわらい
「そうよねぇ」
と、笑みを浮かべた
引き攣って見えたのは気のせいだろう
「そうですよ」
僕も笑ってみせる
と、斉木とアリアさんがドア付近でコケていた
「あれ？2人とも居たの！？」
又しても顔を赤らめる少将
「いやぁ」
「ねぇ（笑）」
どこか言い訳地味た表情を浮かべて2人は顔を見合わせる
この2人、こんな仲良かったか？
「覗きか」
ボソッと言うと2人はすまなそうに頭を下げた
「ったく」
言ってから少将を見つめる
一瞬目が合ってしまい、咄嗟に反らした
……
……
（や……やばい、なんだこの気まずい感じは……）
脳内でパニックになる
そんな僕に助け舟を出してくれたのは意外にも斉木だった
「なぁ久杉、今日名屋達に会いに行ってみねぇか？」
僕はあわてて
「あ、うん」

と答える
だが、よくよく考えてみると……
「俺らって、市民に戦争連絡がされるまで外出不可なんじゃなかったか……？」
「あぁ、第一学園は特別なんだよ。そりゃぁ、バラして良いって事じゃないけど、万一ボロがでてもあそこなら殆ど問題は無いからな」
「ふぅん……」
うなずくそぶりを見せ、少将を見る
それに気づくと少将はにっこり笑って頷いた
「……わかった、行こう」
「よし来た、名屋達にはもう話しつけてあんだ」
「俺が行かないって言ったらどうするつもりだったんだよ」
「俺は戦況予報士だぞ？」
「はいはい、お凄いですね」
そんな他愛もない会話をしながら僕らはユニクス第一高等学園に向かった

［ＳＩＤＥ津式］
≪キーンコーンカーンコーン≫
授業の終わりを告げるチャイムが鳴る
「やっとおわったぁ」
退屈な授業を終えると
「津式いるか」
と、先生が俺を呼んだ
（なんだ？先生から俺を呼びつけるなんて珍しいこともあったもんだ）
自然、クラスの連中の視線も俺に集まる
「なんだ」
横暴に言いあげると
「ちゃんと敬語を使わんか、全く……」

お決まりの説教が始まるのかと思いきや
「まぁ、いい。職員室に来い」
「職員室に？」
話が聞こえていたらしい、クラスが一瞬どよめく
職員室といってもここは軍直轄の学校だ
あそこは正式な軍人しかいない
ちなみに今目の前にいる先生も軍人なわけだが……
「なんで俺が……」
そんなことお構いなしに指示を拒否する
「そんなこと私が知るか、とにかく来い。名屋や加賀はもう行ったぞ？」
（二人は実務教育のカリキュラムを受けていたはずだが……、それを中断してまでか。どうやら説教ではなさそうだ）
「……わかったよ、行きゃいんだろ、行きゃぁよ」
「お前はいつになったら言葉づかいを覚えるんだ！！」
とうとう怒声を発した先生だったが俺はスタスタと職員室に向かった

―職員室―
≪ガラガラ≫
扉をあけると
「よぉ、津式」
そこには軍入りを果たしたはずの斉木と久杉がいた
「お前ら……」
なんで、と言いかけたが名屋や加賀も来ているところを見ると
「ただ会いに来ただけ……ってか？」
ハハハと斉木が笑う
「こいつの少佐っていう立場があればこれ位はな」
久杉が誇らしげに胸を張る
すると
「これ位って……実務を中断させるなんて「これ位」のうちか？」

と、名屋が呆れたように笑った
うんうんと頷く加賀
しばらくそんな雑談していたが
「ところで、よくお前らがココに来れたもんだな」
と、名屋が何気なく振った言葉から展開が変わってきた
「確かに、少佐と中尉がだなんて……自由時間もらえたわけ？」
加賀も質問をぶつける
それには多少の興味があったようだ、職員も何気なく耳を傾ける
「あぁ、まぁ、なんだ。たまたま暇が重なったんだよ」
斉木が言う
（相変わらず嘘が下手なヤツだ）
内心そんな事を思いながら
「あの噂、マジだったか？」
と、俺は話を持って行った
「噂？」
2人が俺を見る
「パイロット召集かけられたってさ」
サラッと言ったが
何度も出てきているように、これは開戦を意味する召集であり、会議だ
「あぁ、……明言はできないな」
久杉らしい答え方だ
「そっか」
加賀が肩をすくめる
「戦争……か」
仮にも軍人志望の学校にいるんだ、戦争というのはそう遠い言葉ではない
だが
「2人は戦うのか？」
名屋が心配そうな表情で言う

そう、それが気がかりだ
「まぁ……。さっきも言ったが明言はできない、できないが……僕たちは軍人だ」
「だよな」
これにはさすがに俺も明るい顔はしてられない
と、その時だった
職員室のＴＶスクリーンに突然ある人物の姿が映し出された
（なんだ？）
斉木と久杉の表情が強張る

≪わたしはユニクス首相リオウス・ノイマン
ユニクス、アロネート、メロのすべての国民に報告する
先日、われらはスカビオンの長である「黄玉」のビンクスにある一通の書状を送った
内容は、彼と、およびその他ＤＡＲＩＦのパイロットへのＰＡＳＣ入軍を話し合うための召集
みなも知っての通り、ＤＡＲＩＦを動かせるものはＰＡＳＣ入隊の義務がある
だが、それを奴らは無視し、数多くの中立案すらことごとく無視してきた
これは、ＰＡＳＣに対する反乱以外の何物でもない
ついで、最後の提案であった今回の召集も無視
よって、ここに宣言する
我らＰＡＳＣは、スカビオンＤＯＰＡＲＳに対し戦いを仕掛けると！！！！！≫

「ウォォォォォォォ」
沸き立つ学校
先生、生徒、正式な軍人
ほとんどの人が歓声を上げた

町のほうからも声がする
「戦争が起こるのに、こんなの……」つぶやいたのは加賀だ
「しかたないさ、スカビオンは今までユニクスにとって目の上のこぶだった、そして戦争となれば、誰もが勢力で勝るＰＡＳＣ軍の勝利を疑わない」
名屋もどこかさびしげだ
ＴＶには次いで避難場所への地図が出た
「首相はあぁ言ってるけど、裏にはテイズ長官がいるんだろうな」
誰に言うわけでもなく、名屋が呟いた
「自ら戦争を起こす引き金を作るとは……テイズ長官もなかなかだ」
続いて久杉がぼやく
「フン、何が＜正義の殺し屋＞だ。自分にとって都合の悪い奴は排除しようって腹だろぉに」
俺も毒づく
（＜正義の殺し屋＞これはテイズ長官を指す市民間で広まっている通り名、まぁニックネームみたいなものだ。「ジャスト・テイズ・キラー」これをつなげて言うと「ジャストティズキラー」……「ジャスティスキラー」となることがこの由縁だ）
この発言、軍人たる２人は見逃してはならぬところだが目をつむった
今だ新人の２人にとって、もっともな事だからだ
「なにか……いやな予感がするのは俺だけだろうか……」
名屋はだれにも聞こえないようなほんの小さな声で言う
参謀に関して彼もまた、才能のあるものなのだろう

１４話～告知～（後書き）

こんにちは、ジョン＆ａｍｐ；ちーのジョンです。

もう明日から新学期ですね。各地では入社式などが行われ……るのでしょうか？震災の関係で行われないところも多いと聞きましたが……

まぁ、我々学生にとっては入社式は関係ないですけどね（笑

さて、久々に名屋と加賀と津式が出てきましたよ！！

かなり久しぶりですよね（笑

ですが、もう戦争が始まってしまうみたいです。

一体新人軍人久杉と斉木や久杉、たちの運命やいかに！？

次回、どうぞご期待ください。

てか、現実の世界がこんなことになってるのに、戦争だなんて不謹慎ですよね……

15話～開戦直前～

とうとう行われた宣戦布告
だがユニクス、メロ、アロネートが混乱に陥る事はなかった
なにせ、みなユニクスの勝利を疑わないし戦場となるであろう場所も彼等にとっては遠い地である
自国が戦争するという自覚が無いのだ
それからしばらく話した後、斉木と久杉は去って行った
戦争が起こるのはもう間もなく
軍人がこんな所で油を売っている訳にもいかない
「2人共、戦うんだね」
「多分な」
心配そうな視線を向ける
俺はというと……
さして心配をしている訳でもなかった
「あのニュアンスからして、主戦力の中には入ってないみたいだし」
思った通りに口にする
「そうだと良いけど……」加賀は以前不安らしい
「心配すんな、あの二人は本物だ」
宥めるように言って
「さ、避難しようぜ」
と、続けた
「ま、それが一番か」
名屋が同意して、駆け出した
「ほら、行くぞ。加賀」
今だほうけていた加賀に声をかけ、俺も走り出す
「なぁ、津式」
「なんだよ」
加賀はどこか遠くを見ている

が、そこにはビルやらマンションやらが立ち並んでいるだけでとくに変わりない
「急いでるんだぞ！！」
大声で煽るも加賀は動揺する様子さえ見せない
「ねぇ津式、あの空の……」
「空？」
ビルの先端からさらに視線を上げるとそこにはまだ遠く、小さくて黒い、長細いシルエットが浮かんでいた
「なんだあれ？」
目を細めてうんと遠くを見るも、何かは分からない
そこに名屋も戻ってきて、空を見上げた
「あれってさ、ＤＡＲＩＦじゃない？」
この加賀と言う男は驚くほど目がいい
整備部の特色とはいえ、加賀のそれは群を抜いている
「ＤＡＲＩＦ！？」
名屋と合わせて思わず声を上げる
「なな……なんでＤＡＲＩＦがこんな市街地に！？」
名屋がさらに素っ頓狂な声を上げた
「さぁ……」
俺は思い当たる節もなく、テキトーに上ずった言葉を放った
加賀も……考えがまとまらないらしい
「まさか……まさかとは思うけど……」
少し落ち着いてきたらしい、名屋がいつもの冷静さを含めた声色で言う
加賀と俺は黙って名屋の答えを待った
そんな緊張感の中、続けた
「まさか、市街戦をする気じゃぁ……」
「そんな！？」
間髪いれずに叫ぶ加賀
「だがそれ以外に」

うってかわって名屋は押し殺した音を口にする
確かに、ＤＡＲＩＦなんぞそう簡単にお目にかかれる代物じゃない
機会があるとすれば、それは戦場で、だ
だが、同時に気になることもある
「もし、もしもそれが本当だとして……、アレのパイロットが久杉ってことは？主戦力部隊に入ってないらしいってことは……」
最後までは言わず、名屋に視線をぶつける
名屋はなにも言わず、ただただ暗く俯いた
だが、加賀の反応は違った
「だったらいいね」
「！？」
名屋と俺は不可思議なものを見るように、加賀を見据えた
「「いいね？」」
２人で復唱する
すると加賀は
「だって、僕らの街は久杉が守ってくれてるんだろ？だったら安心して避難出来るじゃないか。それに、こっちでの仕事なら死ぬ可能性も少ないだろうしさ」
冷静な判断だ
流石は加賀と言ったところだろう
「確かにな」
俺よりも早く、名屋が口にした
続いて俺も
「久杉はやるやつだ、心配ない……よ……な？」
最後に疑問がついたのは、ある事にきづいたからだ
「……」
急に押し黙った俺に
「どした？」
問う名屋
が、反応しない、できない

「津式？」
加賀も怪訝な表情を向ける
「かあ……さん、親父……っ！」
言って俺はＤＡＲＩＦの方へ駆け出した
「お、おい！！」
間髪いれずに名屋が叫ぶ
が、俺はそんな声には反応せず、構わず走り続ける
「ったく、なんだって……」
舌打ちして名屋は俺を追うべく足を踏み出した
だが
「待って！！」
加賀の叫びに上げかけた足を戻した
「なんだよ！」
焦りで少々横暴に言いあげる
「……」
数秒何かを考えるような仕草を見せる加賀
と、何か意を決したように頷くと
「避難、しよう……」
太い声だった
「……っ！なにを！！」
思わず食い下がる名屋
しかし、加賀は表情一つ変えず
「話は後だ」
と、俺とは逆方向に走り出した
一人なにも状況の読めない名屋は
「……ックソ！！」
と毒づいて加賀を追った

「ハァ、ハァ」
もうどれくらい走ったろう？
学校から元実家へだから、いま４キロ走った辺りだろうか
「流石に……」
ここのところ体を動かしてなかったからか体力がもたない
だが、歩くわけにも行かない
「かあさん、親父……」
もう一度強く念じる
あの飛行ＤＡＲＩＦが飛んでいる辺りには俺の元実家がある
「元」と言うのは、今そこは私有地ではなく軍の管理する土地になっているからだ
何故そこだけ軍管理なのかって？
そんなのは俺が知りたい位だ
両親が軍人だったってのが関係あるのは分かるけど、わざわざ軍の下に管理するってのは何かあるはずだ
絶対に

そこから更に３キロ
俺は「ＫＥＥＰ　ＯＵＴ」の紐をくぐり、家のなかに入った
緊急事態だけあって街は蛻（もぬけ）の殻、堂々と入っても咎めるものはいない
１０年前まで住んでた家
ココに来るのはそう久しぶりではないが、やはり幼い記憶が脳裏を駆け巡る
「あの時は幸せだった」
などと言う気はないが、時々思い出すと涙が出そうになる
《ギシッ……》
古くなったフローリングが苦しげに声をあげた
そこかしこが埃で覆われ、廊下の天井には蜘蛛の巣、床では灰色の小さな物体もたまにうごめく

「管理」とはよく言ったものだ
そんな化け屋敷みたいな家に1つだけ、電気のつく小綺麗な部屋がある
以前の両親の寝室
仕事部屋としても使っていたようで机やパソコン、テレビなど、一式の設備がある
俺はその部屋に入り、その隅にある鏡台の前に立った
そして自分の顔を見、続いて鏡台においてある写真たてに手をかけた
短髪でごつい筋肉の男と、それとは対極に華奢な腕で、だがしっかりと赤ん坊をだくピンクのウェーブの女性
そう、これが俺の両親だ

そしてこの写真が唯一俺が両親を感じるもの、彼等の遺品だ
両親が死んだのはまだ俺が5つの時だった
軍の仕事で観測島に行ったのが最後、それからは孤児となりあの学校の寮で暮らすようになった
両親の計らいらしいが、面倒は誰が見てくれる訳でもなく、毎日誰かが運んで来る飯を食べて育っていった
そんな日々のなかで芽生えた軍に対する憎しみと疑念が俺をあの高校に通わせている
両親の死の詳細は誰にも語られていない、無論俺にも
『それを探るため』
俺があの高校に通う理由はそんなトコだ

軍が用があるのはこの部屋だけなのは明確だが理由は不明だ
なにせ両親の資料や仕事内容は全て持ってかれた
それでもまだこの部屋を管理してるということは、まだなにかあるのか、あるいは人としての情か……。
どちらにしても調べようがない

部屋を探ろうとも思ったが俺は事態が事態だけになにもせず建物を去った

［ＳＩＤＥ久杉］
「遅くなりました、久杉少佐、只今もどりました」
軍本部の扉をあけてすぐに金髪が目に入ったのですぐに一礼した
それが一瞬揺れたかと思うと
「遅い！！！」
と、怒鳴られた
視線を下げると見慣れたのとは違う、険しい表情が視界に入った
「すみません少将」
もう一度頭を下げる
「もう少し気張りなさい」
ピリピリした空気が一層引き締まるのを感じながら
「はいっ」
と、威勢のいい返事を返した
そんなやり取りが終わると、そこにいた職員の一人が
「久杉少将到着」
と、無線を介して連絡した
すると
「つなげてくれ」
と、どこからともなく声が部屋に響いた
≪ブウォン≫
起動音とともに正面モニターに男が映し出される
それは紛れもない、ノイマン首相だった

リオウス・ノイマン
しわの深い５０代後半の男性。

白髪交じりの短髪にカリスマ性を感じるスラッとした細身の体系で、
メシア・ノアの首相だ
首相と言うのは国民から直接選ばれている訳ではない
加えてこの男は融通が聞かない堅物として有名だ
従って、彼に反対する者も多い
だがそれを気にとめないのも、また彼である

「諸君、準備は宜しいか？これより作戦を決行する」
「はいっ」
本作戦で急遽３番隊のホームになった本部ドックに集まった整備士、オペレーター、戦闘員、戦場予報士、参謀、そしてパイロットが揃って敬礼した
「整備班は直ちにＤＡＲＩＦの最終調整、のち、各機所定の位置につけ。戦闘員は武装したのち、発布された指示に従い布陣せよ。その他各役職の諸君も、急ぎ定位置につけ！！」
「はっ！！！」
威勢の良い声が弾ける
「それから、参謀荒口」
「は……、はいっ！！」
一瞬戸惑いながらも返事を返した荒口だったが、明かに不安が見てとれる
「主の布陣、今だ信用した訳ではない。万が一の責任は、お主にとってもらうぞ」
責任転換
指揮者としてはあるまじき事だが、今回は妥当だろう
荒口は半分、上司命令無視をしているのだから
「わかっています……」
荒口は眉一つ動かさずに言った
「ならいい」
首相も、また同様に答える

変に緊張感の漂うドック
視線を集めながら、首相は更に続けた
「さぁ、皆のもの。開戦だ！！！」
僕は一瞬体が強張ったのを感じた
（いよいよ、か）
一度目を閉じ、心を落ち着かせる、そしてパッと開き
「おし！！」
湿った手を握りしめ、ショットのコックピットに向かった

１５話～開戦直前～（後書き）

こんにちは。ジョン＆ａｍｐ；ちーのジョンです。
携帯からの投稿のため長ったらしいのは省略です。

さて、そろそろ戦争が始まるようです！！
本部に残った久杉や荒口たちはどうなるのか！？
そして、津式の両親の過去とは！？

次回、どうぞご期待ください。

１６話～戦場へ～

「久しぶりだな、戦闘するの」
言ったのは主戦組のとある戦闘員だ

戦闘員はその身一つで戦いの場へと向かう
戦争となれば一番死亡率が高い
が、それだけに給料がすべからく高い。しかもそれは3週間ごとの言わば「週給制」で、その間に戦争が起こらなくても給料が出る
軍への入隊は「ユニクス」「メロ」「アロネート」の戸籍と、「ユニクス第一高等学園」の様な軍人養成の学校の高校レベル卒業の資格さえ取れればほぼ無料で自由だから、金目当ての人間が集まる
従って、その過酷さにも関わらず毎年超満員の志願者がやってくる訳なのだ

「あぁ、俺は軍に入って本物の戦争は初めてだ」
隣で歩くやつが答えた
すると後からヌッと、大男が顔を覗かせた
歳、傷跡から見て相当な修羅場をくぐって来たと見える
やたら火傷があり、鼻の穴の火傷にいたってはどうやったらそこを火傷するのかと思う
「オレァ、１０年ぶりだ」
男はその覆いかぶさるような低い声で言った
「へ……、へぇ、そうなんですか」
若い連中にとって、興味のない先輩の武勇伝を聞かされることほど退屈なものはない
「あれは観測島での事だったな」

前にも書いたが、忘れているだろう
観測島とは最東端に浮かぶ孤島でＮＡＳＡの中央拠点となっている島だ

「あぁ、あの噴火事故ですか……」１０年前、歴史に刻まれた最大の自然災害
観測島の活火山の噴火
これによりＮＡＳＡは壊滅的な被害を受け、完全復興を遂げたのはほんの２年前だ

「あれに軍が何故？」
もう一人が言った
「あの時テイズ長官も定期視察で観測島に行っていたんだ、全く……不運な方だ」
大男は感慨深げにうんうんと頷いた
（不運ねぇ）
心の中で誰もが思った
本当にたまたまなのだろうか……
そんな時
「着いたわよ！！」
今回『珍しく』現地で指揮をとる事になった総指令
スペレンド大佐が叫んだ
「ここが……」
広い、広い草原
アロネートの南西、コストリア山脈の麓（ふもと）には草原が広がっている
ここが戦場と言う訳だ
「あんたら、死ぬ覚悟はあるわね？」
突飛に放たれる「死」と言う言葉
スペレンド大佐にはこういう恐怖を煽る才能があると思う

まぁ、現実を見ていると言うことだが……

皆がザワザワしていると
「早く答えなさい！！」
発狂したように大佐が叫んだ
……
「何故そんな唐突に……」
誰かが口走った
すると大佐の目つきが突然鋭くなり
「急に？あんたら今から戦うのよ？はっきり言うわ、終戦した時、生き残っているのはおそらくこの3分の2位、後は死ぬの。死ぬって意味わかってる？もう2度と何も見れないし感じれない、その覚悟があるのかって聞いているのよ」
大佐は今までいくつもの戦いを経験している
最も、これ程大きな戦いなぞそうそう経験できるものでもないが……
だが大佐の言葉で戦闘員の気持ちが揺らいだ
中には帰りたいと望む者もあっただろう
が、ココに来てからそれを言ったのも大佐の器量と言うものだ
『逃げ』
はもう許されない
嫌でも覚悟を決めなければならない
と、その時
《ガシャン、ガシャン》
何か機械音が揺れとともにやって来た
「1番隊だぁ！！！」
後方で何者かが叫ぶ
振り返るとそこには朱い巨大な物体が聳えていた
「きたわね」
スペレンド大佐の言葉はもはや届かない

機体ナンバー「ＢＡ－０１Ｓ」
＝ライオン型＝
名を「バイシャ」
ＰＡＳＣで……いやメシア・ノアで最も有名、かつ最強を唄われる機体だ
その装備はＵＳを除いて、全てが近接格闘用
４本の足にはそれぞれキロロ（これは普段は機体に平行に収納されていているが、戦闘時には垂直に展開し、相手を切り裂くものだ。前の＝ノワール＝の《固定型キロロ》は、名の通り、最初から垂直に固定されているキロロのことだ）
ついで、ネイルクロー、テイルソード、黒牙と各部位にもその類のものが、さらにその背中には《大刀》「バベルソード」という、機体の全長と変わらないほど大きな刀が装備されている
この刀は機体との接合部（これをその装備の《軸》と呼ぶ）に球体を採用しており、文字通り縦横無尽に稼動可能で間合いに入った敵をどんな方向からでも切り付ける事の出来る優れものだ
だが、機体ナンバーに「０１」とある通り、＝バイシャ＝は初期に作られた機体な為＝ショット＝のような最新鋭機と比べると、その濃度の割にスペース・コアのエネルギー換算率に若干の見劣りがあるコーティングこそされているものの、それを攻撃力にあてる余分はなく、威力は武器そのものの分しか発揮出来ていない
だが起動力に関しては残り僅かなＵＳのエネルギーを横に大きく突出した背中の大型ブースタにまわしているのでそれなりのものがある

「あれが、バイシャ……、あれが、ＤＡＲＩＦ……」
戦闘員と言えど、ＤＡＲＩＦ実物を見るのは初めてのことである
すると、胸部のハッチが開き、中から人が降りてきた
（多くのＤＡＲＩＦのコックピットは大体機体の中心にある）
赤いヘルメットに、同系色の戦闘スーツ

ＰＡＳＣのスーツは白地に青ラインとデザインが決まっているが、
将官クラスはオリジナルスーツの着用が認められている
「あいつが楔か」
ざわめく戦闘員一行を尻目に
「大将、よろしくお願いします」
スペレンド大佐が群集を一歩抜けた
楔はヘルメットを取ると
「スペレンドか。今回は戦闘員の指揮のようじゃのぅ」
楔は大佐にけだるそうな表情を浮かべる
「そんな顔なさらないでください、以前は現地指揮もやっていたんですから」
「知っとるわい、貴様の優秀さはのぅ。だがどうも、肝心の部下から覇気が感じられんのだが？」
戦争の重みから、或は楔の存在感からか、控える戦闘員は皆が皆弱気になっていた
「コラ、あんたたち！！覚悟を付けろと言ったでしょう！」
スペレンド大佐が怒声を放つもさらに恐縮するばかりだった
すると、楔が一歩前に出た
「！！！！」
スペレンド大佐が体を強張らせる
なにかと思ったその時
《バンッ》
渇いた音が、たやすく響いた
一瞬時間が止まったかのような感覚に見舞われながらも、数秒後
《ドサッ》
人が血を吹出しながら倒れるのをを見て一気に現実に引き戻された
「ちょっ、楔さん」
大佐が止めようとするもいつもの恐さというか……圧力がない
制止は社交儀礼みたいなものなのだろうか
そんな大佐には目もくれず、楔はさらに銃をかまえた

そして……
《バンッ、バンッ》
さらに二度、火薬が舞った
一人は心臓に、一人は肩を砕かれた
内心では絶叫しながらも、口を抑え、声を止めた
今叫んでは、打たれかねない
「が、っあぁぁ！！！」
2人は即死、肩を打たれたヤツがあまりの痛さにもがく
一瞬にして全員が恐怖に縛られた
「弱者め」
ボソッと呟く楔
だがそれは、驚くほど耳に響いた
「この軍に、弱者はいらん！！」「まさか、……本当に撃った？」
死体に寄り添うように、傷口に手をあてる
それはアッと言う間に赤い血に染められた
と、今度はその人物に銃口が向けられた
「何をしておる、死人などに構っていては十分に戦えんぞ。軍校で習わなっかたのか、早く列に戻れ」
非情
楔という男は情と言うのを一切かけない
過去には長年連れ添った仲間を見殺しにしたという
楔大将の後ろで大佐が自嘲じみた表情でやれやれと首を振っていた
「戦闘中、貴様らが逃亡、もしくは戦闘を拒否するようなそぶりを見せたらすぐにバイシャで踏み潰す、戦えば、まだ生き残る可能性がある。が、躊躇(ためら)えば確実に死が訪れると肝に命じよ……、分かったなぁ！！」
「「「はいっ！！」」」
全員が声を揃えた
返事を聞くと、大将は踵を返してコックピットへと歩きだした
「ちゃんと躾(しつけ)とけ」

帰りざまに大佐に耳打ちして……

「大将、やり過ぎでさぁ」
コックピットに戻ると後から来たディンから通信が来た
「なんだ？貴様、奴らの肩をもつ気か？」
「まさか、だけど死人を出すのはいけねぇんじゃないですかぃ」
「フン、一体誰が私を咎めようというのだ」
「ティズ長官は優しいお方ですよ？」
「ククク……」
大将は何やら笑みを浮かべると
「だから貴様は副官止まりなのだ」
モニター越しに視線を飛ばした
挑発するような言動に内心怒りを覚えながらもディンは
「いずれ」と一言言って通信を切った

１６話～戦場へ～（後書き）

こんにちは、ジョン＆ａｍｐ；ちーのジョンです。今日は大会のため携帯電話から更新しております。
編集ミスが多いかもしれませんがご了承ください。

さて、ついに戦争が始まってしまうのですね……
いきなり仲間を殺したりし始めたりして大変ですが……

一体津式たちがいる町を久杉たちは守ることが出来るのか！？
てか、市街戦へ持ち込まれてしまうのか？

次回以降、こうご期待ください。

１７話～野望～

〔主戦部隊現地基地〕
《ウィーン、ウィーン》
けたたましいサイレン音が響き渡る
内部の人物は慌ただしくモニターに向かった
「主力部隊本丸から４キロ地点に敵、数は……およそ４０００！！」
「４０００！？全戦力をこちらに傾けたとでも？」
大佐が驚きの声を発した
そんな大佐に
「別に不思議はなかろう」
と、大将楔がコックピットより反応した
「そうですけど、普通なら戦力を分けてユニクスの本部を狙いますよ。奴らの狙いはあくまで本部、ここで足止めは喰らいたくないはずなんです」
「そう言ってものぅ、奴らとてＤＡＲＩＦを所有しとる。本部へはＤＡＲＩＦを使って、こちらは戦闘員でという策かもしれん」
「あなたと影中将を相手に……ですか？」
「ま、それは愚かじゃのぅ」
言うと、影からも通信が入った
「今回、パイロットの出番はないのか？」

（ＤＡＲＩＦは燃料費や整備費など、維持費でも莫大な金がかかる。従って、いくら戦争と言えどもＤＡＲＩＦを使うのはあくまでまれだ。また、ＤＡＲＩＦでの戦闘はメシア・ノアへのダメージも大きい。敵と言えどもメシア・ノアを沈ませるわけにはいかない。基本は戦闘員による戦争で、そこで決着がつけばＤＡＲＩＦは使わないのが普通だ。別に誰が決めたわけでもないが、「まず戦闘員によって」というのが暗黙の了解としてそれぞれの軍の掟のようになって

いる）

「いえ、今回のコレは戦闘員で決着がついてもＤＡＲＩＦ戦になるでしょう」
大佐は言った
今までは戦争といっても小競り合いや内乱であった
それが今度のは国同士の戦いだ
当然、国軍が賭ける思いも相当高くなる
たとえＤＡＲＩＦが使い物にならなくなろうとも勝ちたいのだ
「ならば、戦闘員の犠牲は無意味と申すか？」
この問いには言葉が出ない
そりゃ、しきたりとルールと言うものはある
だが、それは命にとって代わるものなのかは疑問だ
しかし戦争にはメンツというのもついてまわる
例え戦いに勝ってもメンツが潰れてはまるで意味がない
「無意味……と言われると上手く返す言葉は見つけられませんが、少なくともＤＯＰＡＲＳの人間を減らすことに意味はあります。仮にＤＡＲＩＦ戦で負けたとしても、あちらサイドの人間を減らせれば軍としては機能しなくなります。つまり、ユニクスを占領するまでに時間がかかるわけです。そうなれば付け入る隙も……あるいは」
言ってはみたものの……どちらかというと人の命を重んじる武士気質の影中将にはあまり効果はないだろう
「……」
予想通り、すぐに返事は返ってこなかった
だが
「拙者は好かん」
少したった後に影中将はそう返して通信をきった
「……。ま、あれは渋々了解といったところじゃのぅ」
しばらくモニタールームから声が聞こえた
だが、なんとなく、緊張感がほぐれた様な空気だった

「フッ」
大佐は薄く笑みを浮かべると
「さぁ！！！！いくわよぅ！！！！！」
と威勢の声を張り上げた

≪アロネート南東平原の戦い≫
戦闘員４０００のスカビオンに対するは、３０００のユニクス
この戦争にスカビオンは全国力を上げたのに対し、ユニクスは全戦闘員の３分の１で対応する策を決行
残り３分の２は本部守護にあてさせた
この作戦が凶と出るか吉とでるか、それはまだ、誰にも分からない

「頭」
「なんだ？スピアー」
ＤＯＰＡＲＳはコストリア山脈の中腹に簡単な基地を構えていた
だが彼等が今いるのはまだ山さえ越えない、ほのかに乾燥した砂の臭いさえ漂う荒れ地だ
なれた気候だからか、こちらにいるパイロット（スピアー、オリバー、そしてビンクス）は緊張感などそう感じていなかった
「現地基地をピータなんかにまかせてよかったんですか？」
気だるそうに吐き捨てると
「ピータなんかとはなんでがす！！」
オリバーがグッと身を乗り出した
スピアーはこれを横目で受け流し、ビンクスに視線を向ける
するとビンクスは山脈の頂きを見据えたまま
「いい」
と、一言答えた
「ですが……」
濁らせるスピアー

隣ではどこか満足気なオリバーが努めて冷静さを押し出している
ビンクスは依然上を見上げたまま
「高みとはいいものだ」
と、感慨深い声で付け加える用に言った
足元の砂がざわめく
「それは、どういう……」
問いかけるスピアーだったが
「さぁ、我等も支度をしよう」
と、ビンクスは纏った黒いローブを翻しＤＡＲＩＦへと歩を進めた
「……」
黙るスピアーの前を、続いてオリバーが過ぎ去る
互いに互いを睨みつけ、威嚇するように彼は口元を吊り上げた
そしてオリバーが完全に前を通り過ぎた所でその後に続いた
低いところで砂が横に飛ばされる
目的地に向かう彼等には、その足跡さえ残らない

《アロネート南東平原》
「「「オラァァァァ！！」」」
叫び、猛突進するユニクス軍
３０００の兵を、１２００、９００、９００に分けて中央、左右から攻撃を仕掛ける作戦だ
「やはり、分断して一網打尽を狙いますか……」
ユノがつぶやく
「ふぅん、ミーらは山脈を背面にしてるから後方へは逃げられんし、良い作戦だが……」
「どうでもいいから早く戦わせろ！！」
Ｍａｘが騒ぎ立てる
「静かにしろ、兄者には考えがあるのだ」

制する大人げの増したユノに
「んだと？コラァ！！」
相変わらず本能丸出しで喰ってかかる荒くれ者もの
誰がどう見ても相性最悪の２人組だ
（全く、何故黄玉はコイツらを組ませたのか……）
隣で呆れるピーターだったが
「シャラップツインズ……、策は進行中だ、奴らはとうにトラップにかかってる。ＤＡＲＩＦの出番はスグだ……。Ｍａｘ、お前はミルリアの準備を」
「ミハハッ！！流石はピーター兄者、分かっていらっしゃる！」
言って、踊るようにＭａｘはノワールの方へ走って行った

「……」
「シット、あいつに『兄者』なんて呼ばれたくはないんだが」
「兄者が調子付けるからですよ」
どこか呆れた表情を浮かべる
ピーターはふぅと軽くため息をついて言った
「しかたないだろ、あいつにはせめて働いて貰わなきゃならない」
「働き……ですか」
フッとＭａｘの背を見る
楽しげに肩を踊らせ、背中から鼻歌が聞こえてくる気さえする
「やっぱり、ビンクスは私たちを囮（おとり）にするみたいね」
ユノは呆れの様な感情を込めた声で言った
「それでも従うしかない。バット、ただのエサになる気はないさ」
笑みを浮かべ、前髪の上から指を置き目を隠す
ユノはふふっと笑って
「なにか企んでますね？」
無邪気さが戻ってきたようだ
悪童のような笑みをこぼした
「イエス、言ったろう、彼には一役買ってもらう……！！」

《ワァァァァァ！！》
《オォォウウウウ！！！》
３手に分かれ、猛突進するユニクス軍
距離が詰まるにつれ士気は増し、戦闘員の顔つきが武人の……いや、もはや獣のように豹変していく
対するスカビオン軍はまだなんのアクションも起こさない
「何故何もしてこないの……」
『嵐の前の静けさ』
そんな言葉がスペレンド大佐の脳裏を霞めた

突進を続けながらユニクス軍前衛の槍隊が槍を前に突き出し身を屈めて臨戦体制に入る
槍隊が身を低くした事により、中堅とも言うべき位置に隊列を組んだ狙撃部隊が顔を覗かせた
幾百もの銃口がスカビオンの兵士を捕らえる
だが、これにも動揺することなくスカビオン軍は微動だにしない
「遥か昔、倭の国では恐れるべきものに『不動明王』というものがあったという」
ピーターがいつになく真剣な眼差しで呟いた
「不動……、なんです？」
ユノがレプリカのコクピットから聞き返した
「最怖のサムライの神だ」
「サムライ……」
「かつての武者、『弁慶』なるものもその死に様からこう呼ばれるようになったとか……」
――周囲の木々がざわめき始める
「『弁慶』と言う名は聞いたことがあります、かの国でその信念からか、戦いの最中で立ったまま死んだとか……」

「よく知っているじゃないか。そう、彼の死に様は『弁慶の仁王立ち』と言われ、その後の世に『恐怖』の名のもとに語られた……」
「それと今回となんの繋がりが？」
尋ねるユノに一度視線を向け
また正面を見る
静かな樹海のなかに聳える、眼下で土煙をたてて走るユニクス軍を一望できる切り立った崖
その上にはかさ（エリマキ）を大きく開いたノワールの姿があった
「一説によると……、『弁慶』は後方からの味方の弾に当たり死んだという」
「ん？……ッ！！！」
ハッと息を呑むユノ
「兄者ッ！！まさかっ！！！」
クククッと、彼はその誠実な性格には似つかわしくない笑みを浮かべ乱れることのない声色で言った
「彼等には、不動明王弁慶と運命を同じくして貰おう」

ミルリアは太陽の光を集めだす
後ろに控える深い闇には敵わずとも……

17話～野望～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。

進級して初めてのテストも終わり、遠足も無事に終わり（その日は朝から山手線と京浜東北線だけで計3件の人身事故でもろ影響を受けましたが（笑）やっと落ち着いてきたところです。

といっても、まだ日本は皆さんのご存知の通り、危機的状況下にあります。

まぁ、皆さん個人で出来ることをやって、日本の復興に協力しましょう！！

西日本の方も自分で無理なく出来ることを考えて協力をお願いします m（＿＿）m

さて、久々に前置きが長くなりましたが、内容はというと……

ついに戦争がはじまりました！！

まさか弁慶が出てくるとは思いませんでしたが……

スカビオン側は一体何を考えているのか！？

次回、ご期待ください。

１８話～２番隊～

《コォォォォォ》
ノワールの頭部が凄まじい光に包まれる
ミルリアは星、月、太陽などの光エネルギーを熱エネルギー、あるいは圧縮力に変換して攻撃力とする次世代武器である
しかし、その威力は光エネルギーの強さに左右される為、日によって攻撃力が変わってしまうというリスクもある
天候は曇り
生憎日は陰っているが腐っても太陽の光だ
星の光でさえ収集できるミルリアには十分だ
「オシッ！！エネルギー充填完了、打つぜ、ピーターァァァ！！」
「……ＳＨＯＴ」
ピーターが短く言うとＭＡＸはノワール足部のストッパーを下ろし、射出体制に入る
そして……
「行ッけぇぇぇエエェェ！！」叫んで左右レバー側面の赤いボタンは勢いよく押した
《ゴォォォォ！！》
雷鳴のような音をたてる凄まじき閃光は、平原をアッと言うまに飲み込んだ

「大佐、あの山麓の光……なんでしょうか……」
「光？」
モニターに映し出されたのは森に光が吸い込まれているような、なんとも不思議なものだった
モニター員は半ば綺麗とさえ思って眺めていた
が、大佐は慌ただしく無線機を手にとり、全回線の対盗聴用ジャミ

ングを打ち切った
「大佐、なにを……！」
一人が大佐の腕を掴む
が、スペレンドはそんな事など構いもせず
「全軍引きなさい！！死にたくなかったら北か南へ！！！」
ただ力の限り叫んだ
何事か
そう思った時には、すでに手遅れだった
《コォォォォッ！！！》
光のラインが平原を割る
味方１０００余りを巻き込んでそれはユニクス軍を襲う
ほとばしる閃光
草が、人が、大地が……
一片の痕跡もなく消し飛んだ

……
……
……
恐る恐る目を開けた時、そこに先程の景色はなかった
大地は大きくえぐれ、風が吹き込む。あたかも平原の呻きのような音をたてながら……

「いったいなにが……」
不幸中の幸い、戦闘員と臨時基地が直線上になかったため、基地は難を逃れた
と、無線から救命要請の連絡が各隊から一斉に送られて来た
慌ただしくそれに答える連絡員
「状況は？」
押し出すように大佐が言う

それに素早く反応したのは花音だった
「正確には掴んでいませんが、すくなくとも前衛部隊１２００は全滅、サイド部隊もそれぞれ３００づつが犠牲に……、負傷者の数も甚大……被害者はまだまだ増えるものと思われます」
（やってくれたわね……、だけど……）
考えを巡らせていると
「スペレンド、どうするつもりだ？」
通信を入れてきたのは影中将だ

ＤＡＲＩＦの通信システムはメシア・ノアについて回る人工衛星を介する通常方法とは違い、発信先に直接電波がいくようになっているため、こういう時に通信できなくなる事がない
通信識別コードと共に盗聴防止や電波割れにも一役かっているので距離が離れては通信できないというリスクはあるものの、重宝されている

「こちらも、ＤＡＲＩＦ戦に打って出ます。敵がＤＡＲＩＦでくると言うのなら致し方ないでしょう」
言うスペレンドに
「やつら……」
と、楔が会話に割り込んだ
「どうしました？楔大将」
問う大佐
「やつら、何故ＤＡＲＩＦでしかけて来たのか……、メンツは潰れるは味方は死ぬはで良いことなど無いはずなんじゃがのう」
確かにそうだ
最初から数で優るスカビオン軍が有利だった
だが現実に起きているコレは、あたかも不利な軍の苦肉の作のよう

に見える
第一、味方の被害もソコソコでただろうに…なんか訳ありなのだろうか？
大佐は思案の先で
「あちらも、一枚岩では無いと言うことでしょう」
結論を言った
「だとしたらこの戦争、某らの勝ちは明白」
「そうじゃのぅ」
初めて二人の意見が合ったようだ
スペレンド大佐は一つ息を吐き捨てると
「それでは、２波目が来る前に２番隊はあのＤＡＲＩＦを破壊して下さい、１番隊はビンクス襲来に備えて平原中央に」
「「了解」」

「２番隊、参る！！」
「「「ハッ！！」」」

２番隊のＤＡＲＩＦは全部で４機
影中将の駆る機体は
型式ナンバー「ＢＹ－０１Ｐ」ジャッカル型ＤＡＲＩＦ＝バクゥ＝
起動力に長けており、前足後脚の太股部分や下腹部、クローの底面や背部のスペースコア直結のスラスターなど上下前後左右の全方向にスラスターが向いている
驚くほどスリムなシルエットで最も細い腰部分には『ジャバラユニット』という特別なパーツを使っており、機体が品やかに前屈出来るのと同時に他のＤＡＲＩＦにはない「ひねり」の動きが可能である
武器は背中の中刀「アンノーンソード」（バベルソードの子機にあたる武器）を中心に前足太股部分のセルランス（３つのＣｅｌｌ＝

節（直訳は細胞）から成る伸縮可能な小さな槍）や短く太いブレードテイルなど、＝バイシャ＝同様に長距離武器は一切ない
この機体は＝バイシャ＝を起動力重視に改造したような機体なのだ

「キシシ、隊長、俺らは特攻隊で？」
上空から音も無く近づいてきたのはギル中佐だ
「そのようだ」
短く返すと
「キシシシ、殺し合いなんて何年ぶりか、ワクワクするぜ」
「うるさいぞ、ギル」
騒ぐ中佐を中将はたしなめるようにいった
だが中佐はそんなこと気にも止めずさらに言った
「そんなこと言って、中将だって楽しみなくせに」

２番隊副長ギル
好戦的な彼の機体は、以外にも、ユニクス内では最も小さいものだ
型式ナンバー「ＢＹ－０２Ｐ」
コウモリ型ＤＡＲＩＦ
名前は＝ビリオン＝

先程も述べたように、この機体は最小のＤＡＲＩＦだ
理由は簡単
この機体の動力源であるスペース・コアの濃度がすべからく低いのだ
だが、それでも副官クラスのＤＡＲＩＦに成り得たのは、その武器に秘密がある
何と言っても特徴的なのはスペース・コア直結の「ハウリングベル」と呼ばれる、背部の武器だ
これは段階ごとに強弱の違う特殊な音波を発する武器で、最大レベルの３では完全に敵ＤＡＲＩＦの機能を停止させることが出来る

だだし、膨大なエネルギーを使うために、レベル3ともなると1発でエネルギー切れを起こしてしまう
確かに、スペース・コアのエネルギーは無限とも言えるものを保持しているが、それはあくまで濃度に見合う量を使った場合に、だ。濃度以上のエネルギーを引き出そうとすれば当然、最悪の場合はスペース・コアが使い物にならなくなる
この「ハウリングベル」はそんな危険を孕んでいる
では、そのエネルギーを＝ビリオン＝はどうやって確保しているのか……
それは、「アヴァンソル」という牙状の武器にある
そう、この機体は吸血するのだ
敵ＤＡＲＩＦの燃料パイプにこれを突き立て、奪うことで、この機体はエネルギーを確保するのだ
それを可能としたのが機体後部に付けられた「無音スラスター」と、この機体の「特性」である
普通のスラスターは熱気、風等のエネルギーを飛散することで動くこのスラスターも要領は同じだが、その飛散の規模がまるで違う
他のＤＡＲＩＦよりも格段に飛散力が弱いのだ
それに加えて噴射口が無数の穴になっており、エネルギーが真っすぐではなく拡散して発射される
それでも浮くことが出来るのは、機体が軽いのと、拡散したエネルギーを余す事なく受け止める大きな翼膜にある
さらにこの機体は、ハウリングベルの副産物として、常に微弱な電波を発している
それが運良くも、ＤＡＲＩＦのレーダーを妨害する電波となっているのだ
このような考え抜かれた機体だからこそ、副官クラスの機体にまで上り詰める事が出来たということだ

「拙者は戦いは好まん」
「またまた、本当は……」
言いかけたギルに
「くどい！！！」
中将は罵声を浴びせた
ギルはすまなそうに俯くと通信を切った
……
……
（……、血がたぎるのは感じるが……）
そう思いつつも、眉間にシワを寄せ、ただただいたたまれない表情を浮かべた

１８話～２番隊～（後書き）

ジョン&ちーのジョンです。

みなさんお久しぶりです。
最近は忙しすぎて更新するの忘れてました（笑

まぁ、夏休み中に２、３ｕｐする予定なのでお楽しみに！

あと、携帯からなので、誤字脱字に気づかないかもしれませんが、
もし見つけたらコメントをくださいｍ（＿＿）ｍ

さてさて内容ですが……

まさか味方をも巻き込んで攻撃するとは！
スカビオンは何を考えてるんでしょうか……

そして次々と新しいＤＡＲＩＦが出てきますね！！
わくわくしてきますよ（笑

てなわけで、次回もどうぞご期待ください！

１９話～青い蠍～

「ミハハ、戦だ戦、戦いだァ！！」
上機嫌で山を駆け降りるは、「砂漠の荒くれ者」の異名をもつオール兄弟の次男「ＭＡＸ・オール」だ
「あなたは黙れないのですか？」
その後ろに続くのは「ユノ・メイスン」
メイスン兄弟の長女である
「はぁ？こんな楽しい時に黙れってか？冗談言っちゃいけねぇよ」
胸を踊らせ、声高にいう姿は欲しい物を手にした子供のようだ
ユノはため息を付いた
このパイロットを殺してやろうと何度思った事だろう
だがこれでもＭＡＸは実力者だ
昔は全く敵わなかった
今は本気でやれば勝てるだろうが……

麓の森を抜け、荒野に出た
死体がゴロゴロ転がっている
地獄に片足を突っ込んだような気分だ
前方には敵方２番隊の黒い３機のＤＡＲＩＦ
いずれも凄い殺気だ
「……」

「前方に敵を視認、戦闘行為に入る」
ＤＡＲＩＦの映像を基地にリアルタイムで送る
「あれ？」
すると、スペレンド大佐が何やら怪訝な声を上げた

「どうした」
中将が問う
「あの蠍型ＤＡＲＩＦ、ビンクス……よね？」
「おそらく」
気張った声で返す中将
「なにか問題か？」
さらに問うと
「ディン、黄玉のＤＡＲＩＦの色は？」
スペレンド大佐はスカビオン出身であるディンに通信を入れた
突然の問いに少しびっくりしたようなディン大佐だったが
「血のような、赤紫でさぁ」
と答えた
「赤紫、だと？」
今度は中将が怪訝な表情をする
「それがどうしたんですかぃ」ディンはイマイチ状況が掴めず聞いた
それにスペレンド大佐は神妙な面持ちで
「２番隊と接触した蠍型ＤＡＲＩＦのカラーが、青なのよ」
と、返す
「青い、蠍？」
「えぇ」
「カラーなんて、後からいくらでも変えられる、気にする事はなかろう」
楔大将は冷静だった
が、今回ばかりはその冷静さが命取りとなりそうな……
スペレンド大佐はそんな気がしてならなかった
「そうなんですけど……」
考え込もうと顎に手をやろうとすると
「グチャグチャと話している余裕はない、すでに柄に手をかけている状態だ。今更鞘には納められん」
影中将が急かすように通信を入れてきた

（……しかたないわね）
「影中将の戦闘開始を許可します。敵ＤＡＲＩＦの情報は戦闘中でも随時送るように」
「了解」
短く言って影は通信を切った
（さて、貴様の実力……、見せてもらおう！！）

真っ先に突っ込んだのはバクゥを摸した黒い機体だった
「いくぞ！！黄玉！！！！」
クローがユノ機めがけて駆け抜ける
ユノは引くことなく黄槍を前に突き出した
クローを捕らえたそれは、何の抵抗も無いかのようにクローを切り裂いた
「なっ！！」
危険を感じた２番隊員がユノ機上空を飛びのく
が、それを、既に後方で待ち構えていたドリルテイルが襲った
《ボンッ！！！》
鈍い音と共に黒い機体が地面に転がる
機体側部が刈られたように凹み、スペースコアが顔を覗かせていた
そこに、トドメとばかりにすかさずユノはテイルを突き立てる
《ズゴォォォォォン！！！》
それと同時に黒い機体は大爆発を起こし、残骸だけが辺りに飛び散った
「あの距離で爆発させるとは……、血迷ったか」
が、爆煙が晴れるとそこには、無傷の蠍の姿があった
「なんと！！凄まじい防衛力」
これには驚くしかない
ＤＡＲＩＦの爆発で傷を負わないということは、バズーカなどの有弾武器は効かないということになる
まぁもっとも、この機体に有弾武器など、はなから搭載されていな

いが……

「ちくしょう、よくも同志を……やりやがったなぁ！！！」
今度のも、バクゥを真似て作った2番隊機だ
そいつは激情し、スラスター全開で突っ込む
「待て！！」
仲裁に入ろうとする中将だったが流石に追いつかない
（……、まるで昔の私たちのようね……）
突っ込んで来る機体を哀れむかのような感情で見つめるユノ

黒い機体はユノの前方でジャンプし両前足のクローを袈裟様に振り下ろした
が、それは軽々とドリルテイルで受け流される
クローは地面に突き刺さり、一瞬動きが止まった
その隙をユノが見逃すわけもなく、前足はまるでボウキレのようにシザーに切断された
加えて、そこにある中口径ミサイルで駄目押しされる
ミサイルは超近距離で爆発し黒いＤＡＲＩＦの側部をさらった
刈られたそこから、コックピットがあらわになる

ユノはそれを見下ろすと、テイルを高々と掲げた
「ひっ、た……たすけ……」
恐怖のあまりに悲鳴を上げるパイロット
が、ユノは容赦なく先程同様にテイルを突き立てる
《ゴン》
鈍い金属音が辺りを支配する
パイロットは見るも無惨に潰れた

（ユニクス2番隊と言ってもこの程度……）

が、思った矢先
又してもそこに黒い機体が突っ込んできた
「またですか」
突っ込んで来る機体に黄槍を構え、逆袈裟に切り付ける
が、それは敵の背部の刀に弾かれた
「なっッ」
（あの刀、どれだけ自由に動くんだ）
思わぬ対処に一瞬手が止まる
その心のスキを突くかのように、黒の機体は空中で前転し、ブレードテイルを奮った

（なんて動きを……）
ブレードテイルはユノ機の背部を切り付け、装甲を僅かに剥ぎ取った
（この機体に傷を！？）
ＤＡＲＩＦ１位とも言える防御力を誇るこの機体にいとも簡単に傷を負わせられた

「あれが影、ですか」
ぼやくユノ
滲む汗が輪郭をなぞる
と、後方から声が入ってきた
「おいおい、俺の獲物はどれだい……、なんか、１匹、少ねぇぞ」
それはＭＡＸの物だった
どうやら敵がビンクスと勘違いしてユノ機を集中狙いしているのが気にそぐわないわしい

だが……
「ＭＡＸ……、上空に気を配りなさい……」
呆れたような物言いだ
「上空？」

と、そこには！！

「キシシシ、バレちった」
又しても黒ベースの機体だ
だが、他が４足動物を摸しているのに対し、これだけは明らかに異形だ
「オォッと、殺戮狂ギルか。おっかしぃな……レーダーがイカレちまったのか？」
「キシシ、戦い、始めようじゃん？」

〔ＳＩＤＥ、ユノｖｓ影〕
初撃はまずまず
ビンクスめ……焦っているのがまる分かりだぞ

あれが……影、ユニクス２番手の猛者……、傷を負わされるのなんて、アノ時以来だ。

さてと、さっさと片付けてしまおう
すると
『中将、敵回線との同期が完了致しました』
さすがはスペレンド、仕事が早い
「了解した」
一言返すと、すぐに敵回線に繋いだ
（回線を繋いでも、敵ネットワーク内の暗号までは知ることは出来ない、拾えるのは音声のみだ）
《ザザー》
割れた電子音がほんの数秒流れる

それは《ピー》というか音に変わり、やがて止まった
どうやらこれで繋がったらしい
「拙者は、ユニクスはＰＡＳＣ２番隊隊長、影。かのもの、スカビオンはＤＯＰＡＲＳ　の長『黄玉』のビンクスとお見受けする」

「！？」
思わぬ通信にハッと息を呑む
（音声回線を割り出された！？敵の参謀、やるわね）
そう思いつつも声は出さない、いや……出せない

「……」
呼び掛けに敵は応じる気がないらしい
（なんだ？黄玉ともあろう者が名乗りを拒否するのか？）
「……」
依然として沈黙を貫く黄玉
「何故名乗らぬか」
問い掛けるも、……やはり返事はない
……
……
しばらくの沈黙
「チッ」
影は僅かに舌打ちし、ユノ機に飛び掛かった
迫り来るアンノーンソードをシザーで払う
空中で体制を崩したバクゥにユノはテイルを振り下ろす
が、影は機体を翻しテイルの表面を滑るようにかわす
さらに、アンノーンソード、ブレードテイルとたて続けにドリルテイルを切り付けた
初撃はドリルテイルの装甲を剥ぎ、そこを寸分の狂いもなくブレー

ドテイルが襲う
影の攻撃は内部機会に達し、ドリルテイルの第2関節部が動かなくなった
「このっッ！！」
反撃とばかりに中口径シザーミサイルを放つユノ
だがそれさえも影は機体を捻り、かわす
そして背面にクローを突き立てた
ユノ機背部に深い5本の爪痕が刻まれる
（ここまでの動作、影は常に宙に浮いたままだ）
「ちょこまかと！！！」
ユノは機体下部のスラスターを吹かし、さらに巧みな側面スラスター裁きで機体をグルグルと高速回転させはじめた
すると、徐々に地面に亀裂が走り、あたかも竜巻のような気流が発生した
思わぬ反撃にバクゥはされるがままに宙に投げ出される
（これは……、流石は黄玉といったところか？）
と、急に凄まじい閃光とともに竜巻が消えた
（！？）
かと思うと、今度は青い残像が一瞬にして目のはじに入り込み、それとほぼ同時に機体に横殴りの衝撃が走った
《ボスッ》
醜い音が響き、バクゥは不様に地面に転がった……

１９話～青い蠍～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。

夏休み２本目です。

てか、暑い！！

自分の住んでるところは連日猛暑日ですよ……（泣

まぁ、内容ですが……

影さんやられちゃったの！？

影さん結構好きだったのに↑

そして文中で敵機の色が違うとかありましたが、今後どう絡んでくるんでしょうかね？

てか、最近主人公たちの登場が無い／（＾Ｏ＾）／

では、次回もどうぞご期待ください！

２０話～空飛ぶ蠍～

〔ＳＩＤＥギルｖｓＭＡＸ〕
「キシシ……、ばれちまった」
「おっかしーな、な～んでレーダーが反応しないんだ」

《キィンッ》
ビリオンのクローとノワールの固定型キロロが火花を散らせる
「ビリオンの特性だし、キシシ」
「特性だぁ？」

ＭＡＸは機体を回転させ、そのしなやかな尾でビリオンを切り付ける

「っぶね」
瞬間、少し上昇することでそれをかわすギル
さらに続けて羽ばたき、空高く舞った

（飛行能力がこうも厄介とは……）

戦いにおいて、制空権があるというのはそれだけで有利だ
攻撃するにしても交わすにしても、相手の手の届かぬ空間があれば、
バリエーションは2倍にも3倍にもなる
しかも、今回に限って言えば、ノワールには「ミルリア」以外に長
距離武器がない
普通ならその凄まじいスピードで一気に距離を詰めるところだが、
飛ばれたのでは手の打ちようがない
そう、この戦い、相性から見たらビリオンに圧倒的な利がある

「キシシ……最初から結果は見えてんじゃないか？この戦い」
挑発するように言うギル
（この距離で会話が通じるとは……回線まで割られたみたいだねぇ）
「……そうだな」
自嘲じみた溜息とともに発せられた言葉にギルは怪訝な顔をした
「随分とあきらめがいいなぁ、えぇ！？」
さらに言葉を吹っ掛けると、突然ノワールの姿が消えた
だが並はずれたレーダーで、ノワールは後方に回ったのだとすぐに認識、あっという間にギル視認する
だが、その時にはすでに敵機は大きく口をあけ、前掲の姿勢をとり、明らかに射出体制に入っていた
「打つ気か？無駄打ちだぞ？」
余裕の笑みを浮かべる
「それは……はて、どうかな」
言うと、射出時間コンマの領域で、ミルリアが発射された
（はやいっ！！！！！）
流石に驚くも
「そんな見え透いた攻撃が！！！」
ギルはクルリとそれを交わした
と、
ギルは一瞬見えた後方の大きな竜巻に目が止まった
（なんだあれは）
すぐそこで直立した巨人の足のような竜巻が巻き起こり、地面を根こそぎ持って行っていた
思わず見入ってしまうギル
すると、交わしたミルリアが竜巻に激突、凄まじい閃光をはなち、竜巻をかき消しながらその反動でこちらにターンしてきた
（なんだと！！！！！？？？？）

予想外のミルリアの軌道に、わずかに反応が遅れ、片翼に直撃した
≪ガガガガバチバリバチ≫
右翼は悲鳴のような音を上げて光線のなかに消えた
しばらくは片翼でも何とか飛行していたが、高度は落ちていくばかり、流石に耐えきれなくなったのか、空中100メートル地点から一気に煙を吹いて墜落した

「ミハハッ、弱っわぁ～い（笑」
無残に転がるビリオンに歩み寄り、その片足で踏みつける
≪ギギギギ≫
力づくで起き上がろうとするも、ビリオンの馬力ではそれは叶わない
「本当にアンタ部隊の主戦力かよ？ったく、がっかりだぜ」
尚も機体を力ませるギル
≪ギギギギギギ≫
「むだむだぁ、起きれるわけないでしょうが！！！」
声高に叫び、さらにつよく踏みつける
≪ギギギギギギギギ≫
「……、おいおい、いい加減に……」
≪ギギギギギギギギギギ≫
「芸がないんだよ、弱者がぁ！！！！！！」
絶叫したその時だった
『弱……者、だ……とっ！！！』
「！？」
≪キエェェェェェェェェェェ！！！！！！！！！！！≫
凄まじい高音の超音波が空気を振動させはじめた
「がっ、あぁぁぁあ」
耳から、肌から、内臓にまで振動が届きＭＡＸは凄まじい頭痛に襲われた
≪キェェェェェェェェェ≫

「ぐぁぁぁぁ、なんだぁアァァァァァァ」
超高速で体のすべてが振動する、腕からは血管がみるみる浮き出し、脳がはじけ飛ぶ映像が脳裏をかすめる
（や……やべぇ、離れないと、マジィ！！」
だが……
≪ガチャガチャガチャ≫
「ちっ」
≪ガチャガチャガチャ！！！！！≫
「クソッ！！！」
「キシシ……むだ、さ」
正面モニターに黒髪のツンツン頭の男が現れた
「てめぇ、ギルゥゥゥ！！！！」
「キッシシシ、レベル３のハウリング……、これ程までなんて、オレでも知らなかった」
額に汗を滲ませ、どこか恐怖を見ている目からすると、デマではなさそうだ
「てめぇ！！！今すぐ止めやがれ、貴様も死ぬぞ！！！！！」
「お前の頭が飛んだらな……」
「コノヤロォ！！！」
≪キエエエエエエエエ≫
「ガァァァァグ、ゴアァァァァァァ！！！！！」

［ＳＩＤＥ影ＶＳユノ］
（まいった、拙者が攻撃をまともに受けるとは、左前足が言うこと聞きやしねぇ。もっとも、ヤツ一人の攻撃でもなさそうだったが……、それに……）
「スペレンド、聞こえるか？」
「中将？何でしょうか」
「もしかしたらだが……」

「えぇ……」
その時、目の前にまたしても青い影が走った
≪ガンッ≫
（くそっ）
前門スラスターで瞬時に後退したものの、頭部にヒットしたようだ
「中将？」
「スマナイ、やっぱり後だ！！！」
言って影は下部スラスターで空高くジャンプし、さらに横噴射スラスター、上部後部と、縦横無尽に走り始めた

（いったい何？）

「夜鷹の舞、この斬撃を見切れるか？」

≪キィィン≫
突如、ユノ気に傷が入る
「！？」
それに続くかのようにいたるところに斬撃の傷痕が走る
「なに！？」
思わず驚きを口にするユノ

（やはり……）

（まさか、あのスピードのなかで、的確に私を切りつけている？）
≪キィィン≫≪シャッ≫≪ズバン≫

最初こそ浅い傷だけだったが、次第に深く刻まれる
「そんな、敵機が……まるで見えない！？」
スラスターを吹かし、斬撃のエリアから逃れようとするも、スピードに乗る前に出だしで止められる
そんな事をしているうちにさらに機体には傷が付いていく
ユノには焦りばかりが募った
（まずい……このままでは！！）
と、！！！！！
≪キェエエエエエエエエエエエエエ≫
凄まじい音がコクピットに流れ込んだ
「あぁぁぁぁ、あぁっ！！！」

「ぐっ……、くそっ！！！！」

（今度は……何！？）
ユノ機、バクゥ共に動きが止まり、やがて機能しなくなる
（機体が……動かない！？）
それどころか、全モニターもダウンし、コックピット内は暗闇に包まれた
ただ、頭に直接流れ込んでくるような不快音だけが思考を支配する

（くそっ、ギルめ！！拙者もいるというのにＬＥＶＥＬ３のハウリングを……、このままでは全員死ぬぞ！！！）

［ＳＩＤＥスペレンド］
「中将、少佐、！！応答願います！！！！」
いきなり中将から連絡が入ったと思ったら、急に両機の信号が途絶えた
まさかとは思うが……突破されたのか！？
「スペレンド、俺が様子見にいってこようかぃ？」
そこにディンから連絡が入る
「ここはわしだけでも十分じゃ、偵察もこ奴の得意分野、行かせるのも手よのぉ」
大将も彼の背中を押す
しかし
「いえ、お二人ともここで。万一の場合を考えると御二方をここから遠ざけるわけにはいけません」
私はそれを拒否した
ここで陣形を変えるのはあまり好ましくない
「じゃがのう、このままでは埒が明かんぞ」
「気長に待つのは趣味じゃないでさぁ」
二人とも不服そうだ
だが聞き入れる訳にはいかない、さっき感じた嫌な感覚が何故か消えないのだ
（この感覚、さっきの光のビームに対してのじゃなかったのかしら……）
それに……
「いえ、必ず何かアクションが起きますよ、いや……きっと中将が起こすはず……」
「何を根拠に言ってるんですかぃ？」
「……」
根拠と言われても……
「……、参謀の、直感がそう言っている……」
そうとしか言いようがない

すると
「フッ」
なにか吹出すような音がスピーカー越しに届いた
「そりゃぁ、敵わないねぇ」
ディンが表情を崩す
それに答えるように私も笑った
なんとなく、戦場に和やかな風が吹く
「それでは、参謀としてのスペレンドの力量、見せてもらうとするかのぅ」
「はい」
顔の筋肉に緊張を戻し、うなずく
大将は堅い表情のまま、通信を切った

「ＳＩＤＥ影ｖｓユノ」
《キエエエエエエエエエ》
「何……、この音……頭……割れそう……」

「クソッ、……ギルッ……ギル！反応せんかっ！！」
「……」
応答は、ない
このハウリングを至近距離で受けているとなると、機体だけでなく人体にまで影響しそうだ
（こうなったら……、致し方あるまい）
覚悟を決め、影は一息フッと吐いた
そして……！！
起動レバーを目一杯手前に引いた
《ガダガダガダガダガダ》

機体に有り余るエネルギーがスペース・コアから流れ込み、内部から装甲が軋(きし)む

（ＤＡＲＩＦの起動にはそれこそ膨大なエネルギーを必要とする。そのため、普通は順々にエネルギーを各機体ブロックへと送り出す。でないと濃度以上のエネルギーを発してしまい、機体がイカレてしまうのだ）

（流石にガタがくるか……、だが、こうでもせんと動かん）
エネルギー供給量を示すパラメータが一気に右に振り切れる
一瞬づつ、機体にエネルギーが行き渡っては、どこかのパイプが切れ、またメーターは左に振れる。そして別ルートから送られて右に振れ、パイプが切れては左に行く
断続的な一瞬の繰り返しの中で、影はタイミングを見計らい、エネルギーが行き渡った瞬間に側面のセルランス（３つの節＝Ｃｅｌｌからなる長槍）をビリオンに向けて一気に伸ばした
それは見事にハウリングベルの穴を塞ぎ、音を止める
《……》
《……》
《……》

（音が……、やんだ？）
ユノはゆっくりと機体を起こす
と、その時！！！
《ガキィンッ》
激しい金属音が辺りを突いた
（いったい何の……っ！！）
すぐには状況を理解できなかったものの、それを知るのにそう時間はかからなかった

なんと、バクゥのもう一方のセルランスが自機を串刺しにしていたのだ
「なっ！！」
力無くパワーダウンしていく機体
重さに耐え切れなくなったセルランスと一緒にとうとう地面に横たわった
「動いて、ねぇ、動いて！！」
呼び掛けも虚しく、すでに彼女の機体はただの鉄屑と成り果てた
すると、そこに通信が入ってきた
そう、影中将からだ
「やはり……、おなごの声……貴様、何者だ！黄玉はどうした！！！」

（しまった、バレた！）
「……」

だんまりを決め込むユノ
更に脅そうとした時、突如バクゥは凄まじい衝撃と爆煙に包まれた
機体は吹っ飛び、装甲の薄い機体はアッと言う間に動かなくなる
（なんだ？）
衝撃を受けた方角を見るも、しかしそこにはなにもない
レーダーは既に使い物にならないし、モニターも所々映像が切れ始めている
（万事休すッ）
と
《ゴォォォォン》
今度は少し離れた場所で爆音が響いた
（爆発？まさか！？）

荒れ地に炎がほとばしり、狩れた草木を伝い、それは業火となってさらに燃えつづける
「ギル！！無事か？」
爆発はビリオンのものではないか
その疑念が脳裏をかすめる
すると
《ゴンッ！！》
なにやら大きな黒い塊が空から降ってきた
ほとんど原形を留めていないが……
（ビリ……オンか？）
黒塊のなかに、唯一白いカラーリングを施されたアヴァンソル（吸血牙）が光った
「キ…シシ……なん……ぶ……ざ…まな」
かすれる声でやっとつながった通信に反応があった
「ギル、無事なようだな」
「キ……シシ」
「何があった」
間髪いれずに問いを投げかけた影に
「そら……から、……ミサイル……の……よう……なものが」
これもやっとのことで返す
「空か……。わかった、お前はここにいろ、ミサイルの直撃を受けたなら、軍人としての引き面目は保てよう」
中将が機体をやっと起こして空を仰ぎ見る
すると「それが……」と、言いづらそうにギルがきりだした
「ミサ……イルは……俺……を狙っ……ては……」
「なに？」
顔は上に向けたまま、サイドスクリーンに移りだされた黒塊に視線を向けた
「ミサイ……ル……は、敵機……に直……撃……し、俺……は、それ……に……まきこまれて……」

中将は視線を戻し
「なるほど」
と、呟いた
一呼吸おいて、さらに
「じゃぁ」
と、続けると、機体を荒れ地にまた横たえた
「中将！？なにを？」
一連の会話を聞いていたオペレーター、花音が超感度カメラにより取られた映像を見て、スクリーン越しに叫んだ
「おちつきなさい」
音声だけだが、大佐の声が入る
大佐はそれ以上何もいわなかった、どうやら任せるということらしい、と、言うことは……
「拙者の判断は正しいようだな」
「中将……」
今度はギルだ
中将はささやくように
「動かず、じっとしておれ」
と、耳打ちするかのように言うと1つのカメラを残し、バクゥの起動を完全に止めた

［ＳＩＤＥ影］
……
……
……
……
どれ位たったろうか、時間の流れが異様にまで遅く感じられる

1秒1秒が身に染みわたり、全身を包んだところでやっと次の1秒がやってくる
押し寄せる気の遠くなる感覚に半分意識を持って行かれた時だった
不意に荒れ地に黒い影が差した
影は何か様子を窺うようにふらふらと辺りを一周すると、自分たからそう遠くない、謎の女パイロットのもとに降り立った
が、その姿に唖然とした、なんと、機体の形が全く同じなのだ！！！！

ＤＡＲＩＦはスペースコアによって動く、その濃度、大きさはまちまちだから供給できる範囲もおのずと変わってくる
仮に伝わってきた設計図通りに機体が仕上がったとしても、それに見合ったスペースコアでなければ動かない。さらに機体を動かせるの適合者のみだ、加えて、適合者は機体に1人と決まっている。2番隊のように「バクゥに『模した』」機体を誰かが動かせたとしても、「同じ」機体を動かせる人間なぞ存在するはずがないのだ
なのにもかかわらず、姿かたちが全くの同系なのだ、あの二機は！！！！
微細な違いが無いとは言えない
だが、ＤＯＰＡＲ‘Ｓといえど、そんな多様な設計図を所持しているとは考えにくい
だがだとしたら……

様々な思考が頭をせわしなく動き回る
しかし、「空飛ぶ蠍」が動いたのと同時にその思考は止まり、目はそれに釘づけとなった

［ＳＩＤＥユノ］

「兄者？」
半信半疑で問いかける
「ＯｈＲＩＧＨＴ、見事な戦いだったな、ユノ」
ピーターはいつもの調子で答える
ユノがにっこりほほ笑むのを確認すると
「しっかりとお前は役目を果たしてくれた、ちゃんと所定の位置に彼らを動かしてくれた、ちょっとズレはあったけどな」
今度はいつもよりやさしい声色で話しかけた
「兄者……」
彼女も、今度はどこか愛おしく思う調子で答えた
ピーターはにっこり笑うと、自機の上にユノ機を乗せ、下部スラスターを大きく噴出させた
この５年で飛翔力を格段に上げたこの機体は短い距離ならば飛行が可能となった
ただし、ビンクスには秘密にだ
もちろんそれをユノも知らない、だがユノはあえて突っ込まなかった
ただ、今の時間がうれしくて……
「２番隊は消した、１番隊は移転拠点を守ってる、空中から牽制しつつなら抜けられる、着く頃には本部はビンクス達によって壊滅しているだろう。見たところ、３番隊が市街地を守っているようだが本部破壊のがおそらく早い、仮に邪魔されても２機ではビンクスら３機を倒すのは不可能だ。到着次第、消耗したビンクスらを殺し、逃げ延びているであろうティズを人質にとり１番隊を手中に治め、ユニクスを支配する。これで母さん達を殺したビンクスとユニクスへの復讐が完了する」
ピーターは深い、悪意の笑みを浮かべた
「目にもの見せてやるっ！！！」

２０話～空飛ぶ蠍～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。

夏休み最後の更新です。これからまた忙しくなってあまり更新できないかもしれませんがご了承くださいｍ（＿＿）ｍ

さて内容ですが……

今回の話の終わりでこの戦争の真の目的が分かりましたね！！

復習のためなら敵味方関係ない、という事なんでしょう……

あぁ、怖い（笑

さて、そろそろ主人公たちに登場してもらいたいですね！

次回、どうぞご期待ください！

21話～本部守備隊、始動！！～

［ＳＩＤＥ久杉］
『主力隊、抗戦を開始したようです』
本部より入った連絡
それは今回、守備隊のオペレーターを勤めることになったクリフからだった

艶やかな金色の前髪は左右に別れ肩までのび、後ろ髪は側面で１つに束ねられ、首辺りで内側にカールしている
いかにも現代っ子といった風貌だ
花音と、あともう一人マリアに次いで３番人気のオペレーターだ

報告を受けた少将は
「抗戦……というと、敵はそちらに戦力を向けたということ？」
空中を旋回し、辺りを警戒しながらも問い返す
『荒口の勘は外れたってことか……』
今度は本部より少し近い位置にある仮設支部からだ
『そう決めつけるのはまだ早いみたいよ、斉木クン』クリフは何かオモシロそうに答えた

因みに、こんなに斉木とクリフが仲がいいのは、花音とクリフが大親友だからだ
斉木と花音が付き合い始めてからというもの、斉木はいつもクリフにいじられている
まぁ、余談だが……

そんな二人を「任務中よ」と注意してから
「どういうこと？」

と、少将は聞き返した
一つ二つ咳ばらいをしてから、クリフは
『花音ちゃ……、花音中尉からの報告は《ビンクス［らしきもの］と抗戦中》と言うものでした』
「「「らしきもの？」」」
思わず3人の声が揃う
モニター越しに顔を見合わせ、僕は
「らしきものって……、黄玉ってひとの機体は知れてるんだろ？」
当然浮かんだ疑問を口にした
『それが、ＤＡＲＩＦのカラーが違ってるとか……』
「……なるほどなぁ」
頷いたのは斉木だ
「カラーなんていくらでも変えられるが、……おそらくそれは偽物だろう」
「斉木中尉、何を根拠に？」
少将が反論するも
「荒口が言ってたろう、ビンクスはこちらに来ると……。主力戦線の機体に『疑惑』があるのなら、それはもう偽物だ、間違いない」
斉木は突っぱねた
「でも偽物のＤＡＲＩＦだなんて……、仮に作られたとしても適合者が偶然居たなんて考えづらいわ」
尚も冷静に反論する少将
そのやり取りに、僕は恐る恐る入った
「僕も同意見だな、……斉木に」
「久杉くん！？」
驚く少将とは裏腹に、斉木はニカッと笑みをこぼした
一応冷静なタイプなほうの僕が、こんなあられもない理論を正しいと言うのは珍しいのだ、それも2度も
クリフの少し後方に腰掛ける荒口は眉一つ、口元一つ動かさないただ無表情で佇むように座っていた

だが、なんとなくだが……どこか雰囲気が柔らかく感じた

〔ＳＩＤＥ津式〕

よし、あった……

俺は鏡台に置いてある、１つの写真立てを手にとった

輝(ヒビ)こそ入っているものの、１０年も前の代物にしてはかなり状態はいい

中にはまだ小さい僕と、両親が写っている写真がある

この写真の時の事を覚えてなどいないが、それでも両親の温かさを俺は体で覚えている

この写真を見ると、その温かさが今も俺を包むのだ

写真立てをギュッと抱え俺は部屋を出た

ドアを開け、暗い廊下を小走りで抜けていく

と、その時だった

《カタカタカタカタ》

廊下のそかしこに散らばった石やら瓦礫やらが小刻みに振るえだした

（地震か？）

最初はそう思った、だがすぐにただの地震ではないと感じた

俺は歩を止めた

しばらく揺れに身をまかせる

《ゴゴゴゴゴゴゴゴ》

音は徐々に大きくなり、揺れも大きくなる

（何かが動いている？）

《ゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！》

音は凄まじいものになり、俺は思わず目を閉じた

すると……

《ゴゴゴココココココ》

だんだんと音は小さくなっていった

揺れも収まってくる
（なんだったんだ？）
廊下にあるガラスから外の様子をうかがう
ＰＡＳＣ本部の塔視界に入れようとした、その時！！！！！！！
≪ズゥン！！！！！！≫
突然本部のほうから土煙が上がった
それはモクモクの周辺の家々を包んだ
離れた位置にあるココでさえも、空気が煙っぽくなる事を感じられる
視界が悪くなる中、そこにひときわ目立つ色がポンッと現れた
濃い……みるだけで何か冷や汗の出る、不気味な赤だった
「あれは……ＤＡＲＩＦ！？」

［ＳＩＤＥ久杉］
［本部前］
「来たぞぉ！！黄玉だぁぁ！！！」
国のそこかしこにあるスピーカーが突如喚き始めた
それは守備隊戦闘員６０００人の耳に入り、心臓を掻き立てる
「おやおや、これはこれは……ずいぶんと多い出迎えだなぁ……」
「まさか、ユニクス崩しの頭の作戦、読まれてたんとちゃいますか？」
「まったく、ダメダメでがすな」
土煙のなか、市街地にぽっかり空いた大穴からでてきたのは３機のＤＡＲＩＦだった
『おいおい、まじかよ』
予想より遥かに本部から近い距離に現れた機体に思わず斉木は息をのんだ
側部にバズーカを備えた真青の蠍型、【レプリカ】オリバー機とそのパイロット〈オリバー〉、全長２０メートルを誇る最長の深緑の蛇、ジーボルとそのパイロット〈スピアー〉、見る者を恐怖へと

叩き落すドスのきいた赤紫の蠍、テラーとパイロット〈ビンクス〉
貫禄の3人組がとうとう本部前に現れた
本部組員、６０００の戦闘員が一気に緊張感に磔(はりつけ)にされる
そんななか、全て分かっていたかのような冷静さで、荒口が
「少将、久杉少佐、アリア少佐……指示通りに頼みます」
作戦決行を促した
それで我に返り、クリフが
「敵機3機出現、いずれもかなり本部に近い位置です。まず本部から離すことを第一に考えてください。目標地点は第一学園の南の海岸です、戦闘員およびパイロットは作戦行動に移行してください」
オペレーターとしての任を果たすべく、マイクに向かった
他の係員も慌ただしく動き始める
「よしッ！！！！」
僕は勢いよく両頬を叩き、身を引き締めた
「行くわよ、アリアちゃん、久杉くん！！！！」
少将の合図でアリアさんと僕は少将の後方に飛びのき住宅の陰に身を隠した

「頭！！レーダーに3機のＤＡＲＩＦの反応や！！！」
「なんだと？まさか本当に読まれていたとでも言うのか！？」
地中からの奇襲であるはずだと思い込んでいた彼らにいきなりのレーダー反応は流石にこたえた
「だけどおかしいでがす、兄者からはここを守っているのは3番隊だと……、一機機体が多いでがす　よ」
この数年でオリバーは　少しは　頭が回るようになった
「確かにそうだ……」
と、ビンクスがさらに言葉を発そうとした時、突然凄まじい7色の光があたりを包んだ
「これは……」

「なんや、この光は」
「目が、開けられないでがす」
目をつぶりながらも機体の目の前にある１つの陰に、ビンクスは気づいていた

「孔雀後光（くじゃごこう）」
ユニクス３番隊の蓮華少将の駆る機体
型式ナンバー「ＢＹ－０３Ｐ」クジャク型ＤＡＲＩＦ－リオル－の特徴的な技だ
テイルシールドと呼ばれる「赤」「燈」「黄」「緑」「青」「藍」「紫」それぞれ２枚づつの計１４枚からなる孔雀の尾を模した武器から放たれる光
それはパイロットの目を眩ますには絶大な効果がある
この光は、人間が目を開けていられる領域を遥かに凌駕しており薄眼で開くことさえ困難だ
下手をすれば失明しかねない
さらに言えば、この武器はこの機体に搭載されたとある武器との相性がいい
それはさておき、クジャク型の機体の特徴と言える翼も紹介しておこう
これは羽毛一枚一枚が固定型キロロになっている
それが重なり合い無数の刃をもつ武器となっており「キロロウィング」と言う名前が付いている
空を飛ぶためのブースタは背部に２門と腹部に３門、テイルシールドの付け根に４門と充実している
機体はだいたい白がベースで、機体にはしる黒のラインがそれをより一層際立たせている
加えて七色の尾だ
色合い的に言っても美しいの一言に限る

「ちくしょう、前が……」
身動きの取れないもどかしさがビンクスを捕らえる
と、なにやら機体がユラユラと揺れているのを感じた
それと同時に光が収まる
ひと下をみやると、そこにはユニクス市街地のビルやら家やらの屋根が見えた
「……屋根！？」
そう、ビンクスはテラーごとリオルによって持ち上げられていたのだ！！
「さぁ、海まで来てもらうわよっ！！」
「バカめが、こんな機体が接近した状態に自ら持っていくとは！！」
ビンクスは叫んで己を鷲掴みにしているリオルの足にシザーを向けた
が……
ビミョーに届かない
「このっ」
振り回すも当たる気配などまるでない
「この野郎がぁ！！！！！」
テラーとリオルはそのままユニクスの街を越えて行った
「さ、私たちもっ！！」
言ってアリアさんは物陰からヒョイと飛び出し角を構えて青い方の蠍に向かって行った
それを見て、僕は操縦桿を強く握りしめた
（いよいよだ……）
体の芯から冷や汗がドッと出る
それを振り払うように身ぶるいし、頬を手の甲で拭う
言い知れぬ緊張感の中、僕は操縦桿を押し上げ、一気に前に押し

やった
すると機体は家屋を飛び越え戦場に飛び出た！！！
さらにブスーターが吹き始め、凄いスピードで前進し始める
（シュミレーターと……違いすぎるっ！！！）
圧倒的な馬力と急に現れる現実味
押し寄せるそれらをさらに掻き立てる目の前の大蛇
僕は『今まで』を忘れるかのように一息吐き捨て覚悟を決めた
「俺は……守護搭乗者（パイロット）だっ！！！！！」

21話～本部守備隊、始動！！～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。
もう秋になったはずなのに関東地方はだいぶ暑いですね……
もうやってられませんよ。

さて、内容ですが……
やっと津式たちが出てきましたね！！
一体どれだけ待たされたことか（笑
まぁ、出てきていきなり戦闘になっちゃったわけですが……

本部に残った者たちの運命やいかに！？
次回もどうぞご期待ください。

22話～接触～

［ＳＩＤＥ久杉］
「俺は、守備搭乗者（パイロット）だ！！！」
雄叫びを上げ、僕はジーボルに急接近した
クローを振り上げ、打撃体制に入る
それを、制止する者がいた……
斉木だ
「バカッ！！久杉！！お前の機体（ショット）でその距離はマズイぞ！！！」
叫びも虚しく、それを僕が理解するのが遅かった
狙ったジーボルの頭とは別方向から緑の残像がショットの側面を捕らえたのだ
コーティングされていない機体を衝撃が包む
僕は不様に家屋に激突した
その衝撃に耐え切れる訳もなく、一瞬でそれは崩れ去った
『何をしている久杉、頭を冷やせ！！市街地戦をする気か、お前は！！』
今度はしっかりと僕に届いた
「そう、だったな……」
僕は血の昇った頭を落ち着け、天井に付いたスイッチを押し操縦席（コックピット）に無数の小型操縦桿を出現させた
『ガゼルと青蠍が中域を離脱、南の海岸へと移動開始しました』
クリフの声だ
（残るは……、コイツだけ……）
幸い敵機はその長い体故か、余り動かない
（これならばっ！！）
僕は思い切っていくつもの小型操縦桿のスイッチを押した
《フィンフィンフィンフィンフィン》
６つの軽い空気音がそこかしこから聞こえてくる

「いけっ、サスペンド！！」

（サスペンド＝ショットに搭載された武器の一つ、背部の左右に９つづつ取り付けられた突起状の自立兵器。追跡は自動だがバルカン砲射出の為の停止のタイミングとその角度、及びスピードや砲撃位置等の操縦はパイロットが行う。それ故に、パイロットの腕が大分影響を与える武器だ）

射出された６つのサスペンドはジーボル目掛けて飛び立った

（今の久杉の腕前では同時制御は６つがせいぜいだ）

「なんや？アノ武器」

スピアーはとりあえず、それぞれのサスペンドに対して一定の距離を空けた

一見すればナイフの様な形だから、接近を嫌ったのだろう

しかもアノ長い体をここまで自在に動かせるとは……流石だ

（だが……）

僕はジリジリとサスペンドを詰め寄らせ……、そして！！！

《ババババババ》

バルカン砲を打ち込んだ！！

「ッ！！」

放たれた弾頭は全てが、ジーボルと家屋との僅かな隙間をすり抜けたそしてその角度から、舗装された地面に減り込むこともない

残ったのは無造作に転がる薬莢（やっきょう）だけだった

（これはあくまで敵を誘導するための、言わば威嚇射撃……、絶対に街を傷つけてはならない！！）

久杉のその思惑通り、ジーボルは想定した方向へと回避行動を行っていた

が……、敵もバカじゃない

今のが誘導目的だと見破っただろう
だがそれも想定の範囲内だ
見破った所で……
《ゴゴゴゴ》
やはり意図が見破られたのだろう
敵は目的地とは逆方向へと進路を向けた
それを食い止めるべく、動きの出頭でジーボルの頭前方に威嚇射撃を放った
狙い通り敵機は動きを止め、バルカン弾幕を近づけて行くとジリジリと後退し始めた
（やはりだ、最初の射撃でも頭を最初に庇おうとした。おそらくコックピットが頭周辺にあるのだろう、それも結構装甲の薄い所に！！）
僕は一度６つのサスペンドを戻し、別の６つを飛ばした
（サスペンドはスペース・コアから離れるため、そんなに稼動時間が長くない）
飛び出した６つのナイフは迷うことなくジーボルに行き着き、バルカンを発射する
後退して家屋を傷つけそうになろうものなら、そこにサスペンドが回り込んで容赦無く動きを止める
この複雑な地形の中では、長いからだのジーボルとサスペンドをもつショットの優劣は明らかだった

（クソッ！！場を変えた方が有利そうやな。あちらさんがココでは倒さへんつもりみたいなんが救いや、……誘われてやるのも悪ぅないなぁ）

「？」
優劣を悟ったのだろうか？
ジーボルが方向を変え、オリバー機を角で捕えたガゼルの後を追うようにして移動しはじめた
しばらく観察し、家屋を傷付ける意志がないことを確認してから、サスペンドを戻し、僕もそれに続いた

［ＳＩＤＥ津式］
連続する爆発音、突発的な暴風断続する揺れ、荒れはじめる波……
（まさか……、久杉達が戦っているのか？）
外に出たのはミスだっただろうか
あのまま家に留まっていたほうが……
……
いや、一刻も早く地下シェルターに行くべきだろう
早く、安全な場所に……
そう思った矢先のことだった
〈ゴゴゴゴゴ〉
さっきと同じ様な音が迫ってきたのだ
が、今度は空からのものであった
それは次第に〈キィウン〉というどこかエンジンじみた音を纏いはじめ
その正体は、耳で確信するよりも先に、目で確認できた

雲で広がった日光に照らされ、灰色に反射するボディ
与えられた暗いイメージを払拭するかのような、七色に煌めく尾羽
運んでいるのは……、アノ赤いヤツか？

「ＤＡ……ＲＩＦ！？」一瞬で空を切り、影が頭上をかすめて行く
暫く見入ったまま立ち尽くすと、今度は音が背中を押して行った
あっという間に小さくなる機械
が、海辺辺りで急にバランスを崩し始めた
右に左にと揺れると赤いＤＡＲＩＦが鳥の手を逃れた
（……）
声も出ず、ただ立ち尽くす
語彙の少ない俺ではこういうとき言うべき、いや、感じるべき言葉
が出てこなかった
ＤＡＲＩＦ達は落ちてからは静かなものだった
音は一切聞こえて来ない
さっきまで異次元物質が浮いていた空には、雲が漂うばかり（言っ
ても、人工の産物だが……）
異様なまでの静寂の中、俺は足を踏み出した
一歩、また一歩と歩みを進めると、ふとまた影が差した
なんと、今度はニョロニョロと長い機体のＤＡＲＩＦがあらわれた
のだ
機体は建物こそ避けて動いているようだが、地面のコンクリートは
いとも簡単に砕け、剥がれていく
迫る巨体を前に、だが俺には恐怖の念などなかった
それよりも……
（音が、聞こえないっ！！！）
コンクリートを割る音も地響きも、音という音が脳を介さない
（アァァァァ！！！）
自分が叫んでいるのかすらわからない
声帯は……震えてる
だがなにも……
しかし直ぐにまずいことに気づいた

あの大声で……
そう、気付かれた……緑の大蛇に……

［ＳＩＤＥアリア］
型式ナンバー「ＡＥ－０４Ｓ」
シカ型ＤＡＲＩＦ－ガゼル－

配色は黄色が主で、ラインには燈色が採用されている
そんな目立つ色の中でも一際目を引くのは、やはり大きな角であろう
「超硬度アントラー」と呼ばれるこの武器はは金色に光輝いているのだ
角は大きく「くの字」に屈折し、大きいものを持ち上げるのに適しており、先端の黒い部分は着脱可能（ただし、ワイヤーで繋がっている）で遠くの敵をも捕らえる事が出来る
機体のあちこちにある黒は装甲の型抜きで、起動力を増すのに一役買っている
が、モチロン守備力は落ちる
４肢のキロロからも、言ってしまえばこの機体は－バクゥ－に似ている
ただ、大きな違いは、背部の「２門バズーカランスブースター」である
２門の大きな筒状からはバズーカ砲が打て、さらには「セルランス」も同じ兵器に兼ね備え
加えて、名前からも分かるように、ブースターとしての役割も果たせるオールマイティ兵器だ
さらには４本の足それぞれに小型のＵ・Ｓも搭載されている
まさに死角なし
全距離（レンジ）に対応できる機体だ

「さすがに、少し重いわね……」
オリバー機を頭と角だけで運ぶのは流石にキツイものがある
が、下ろすわけにもいかない
「行くしか……ないわ……」
ブーストを少し吹かそうと思った時、後ろから≪ゴゴゴゴゴゴ≫という音が迫ってきた
（ジーボル！？）
ナイフ状のものに取り囲まれながらやってきた長い機体は横を通り過ぎて行く
（意外とはやいのね……）
振り向くと、少し離された場所にショットの姿をうかがい知ることができた
が、明らかに遅い
６つのサスペンドを起動した状態で本体も動かすのはやっぱり至難の業なのか
どこか危なっかしい操縦だった
（あれは、まだまだ稽古が必要ね。終わったら絞ってあげなきゃ。ま、本物使っての初戦にしては出来はいいほうよね）
そんなことを思っていると……
≪ピコンピコンピコンピコン≫
コックピットが騒ぎ始めた
（この音……まさか！？）
スクリーンを見るとある一人の男子生徒（制服からして第一ユニクスの学生か？）がジーボルの前に佇んでいた
（なんでこんなところに……一般人が！？早く隠れなさいよ！！！！！）
しかし、正気を失っているらしい
何やら慌てた様子で耳をしきりに触っている
すると、突然
「アァァァァァァァァァ！！！！！！！」

あろうことか大声で叫び始めたではないか！！

「ばかっ！！！そんなことしたらすぐにバレて……ッ！！！」

アリアの心配は的中

ジーボルは動きを止め、その赤い眼光で男子生徒を捕えた

「まずいっ！！！！！！！！！！」

アリア少将がほとんど反射で飛び出した時、仮設支部にいた斉木は目を丸くし、絶句した

『おい……、うそだろ……』

「どうした？斉木！？」

久杉から通信が入る

「アリア少将の目の前に……、……」

その後の言葉に詰まる斉木

「前に……なんだ？」

不審な表情で問いかける久杉

本部の荒口も、体制はそのままに耳は傾けていた

斉木は唾を大きく飲み込むと

意を決したようにしわがれた声で、押し出すように言った

『津式……、津式がいるッ！！！！！！！』

「「ッ！？！？！？！？！？！？」」

22話～接触～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。
忙しいので雑談は割愛させていただきます。

内容ですが……
久杉もようやく一つの任務（市街地戦を避ける）が出来ましたね！
なのに、なのに……
どうして邪魔をするんだ津式！！（笑
まったく、なんてやつだ……さっさと逃げろ！！

というわけで、次回もご期待くださいね！

23話～アリア～

［ＳＩＤＥ久杉］

『津式……、津式がいる！！！』

「なっ」

思わぬ斉木の言葉に、驚きを隠しきれない

焦点の定まらない視線をやっとこさ本部から送信された映像に合わせると……

間違いなく、そこには津式の姿があった

「おいおい、ウソだろ……」

呆けていると……

≪バンバンバン≫

複数の爆発音が聞こえた

それはサスペンドがジーボルに破壊される音だった

（しまった……意識が集中できなくなったスキに……ッ！！！）

しばらくすると、サスペンドという「枷」から解き放たれたジーボルはその巨体を縦横無尽に動かし始めた

「このっ！！！！」

新たなサスペンド６つを発射するも……

（集中……しきれない……）

たやすく破壊されたそれは無残に町に転がった

ガゼルは津式を守るように上に覆いかぶさるのが精いっぱいのようだ

ブレードテイルでサスペンドに対応する間にも発射される幾つもの「極小マシンガン」の銃撃を、されるがままに打ち込まれていた

あれではガゼルが……もたない！！！

しかも、もっとひどいことが起きた

なんと、ガゼルが抱えていた蠍型ＤＡＲＩＦが解放されたのだ！！！

「おい、スピアー！！！おいらにもあたってるでがす！！！！」
「捕まるお前が悪い……」
「おまえっ！！！」
オリバーは力任せにアントラーから抜け出し、シザーをジーボルに向けた
スピアーも銃撃をやめ、オリバー機にブレードテイルを向ける
「やるんか？オリバー」
「あんたがその気なら、おいらだって……！！」
（仲間割れか？）
動けずにいるガゼルをしり目に
（チャンスだ！！）
そう思い僕は側部のロック機能つきリニアガンを起動
ジーボルの頭部に狙いを定めた
（ほんとは市街地内で打ちたくはなかったけど……）
≪チチチチチ、キュイン≫
緑のカーソルが赤く変わり、頭部を完全にロックする
そして……
僕はメイン操縦桿の赤いボタンを押した
≪ビュン！！≫
それと同時に放たれたそれはグイグイジーボルへと向かって行った、そして！！！！！！
≪バキャンッ！！！≫
見事に銃弾はジーボルの頭部を貫通した

「アァァァァァ、耳が！！！」
迫る大蛇を前に、冷静なんて言葉はどっかに吹っ飛んで行った
騒げるかぎりの大声で騒ぎ、頭を抱え、喚き散らす

そんな津式を大蛇は睨みつけた
「あ……あ……」
涙がドッとあふれ毛穴から汗がこれでもかというほど流れ出る
貫くような赤い眼光、その巨体も、恐怖そのものだった
ただただ、怖い
死を意識することがこんなにも怖いことだったなんて……
（やはり俺は……）
そう思った矢先
≪バキャンッ≫
何かがジーボルの頭を貫いた
一瞬時が止まったかのような錯覚に陥る
「はぁはぁ……ハァハァ……」
激しく上下する胸に手を当てた
（なに……が……）
声になっているのかどうかはわからない
だが……ただ口を動かす
重くのしかかる数秒ののち……ジーボルは家屋を下敷きにしながら倒れた
微動だにしなくなる機体……
「やった？」
久杉はキュッと操縦桿を握りしめた
「たお……したの？」
アリアはフッと手の力を緩める
「死んだ……んでがすか？」
オリバーは……ただ呆けた
戦友の……死
彼にとってそれは初体験だった
……
……
静寂……一人の戦士が、死んだ

と！！！！！
「アリアちゃん、久杉くん！！！注意して！！！！！！！」
突然少将の大声が辺りを裂いた
（注意って……なに……）
そう思ったのもつかの間
突然真下から
≪ゴゴゴ≫
大地を削る音が短く唸った
そして！！！！
≪ドゴォォォン！！！！≫
赤い機体が姿を現した
「よくも……」
機体スピーカーから流れているらしい
通信回線はわられてはいない
だが、その憤怒だけは……
「よくも部下（スピアー）を！！！！！！！」
各コックピットに突き抜けるほどに響き渡った

「地下を突き進む音が……一瞬しか聞こえなかった！？」
急な新手の出現に戸惑う久杉
が、怒り狂ったビンクスは初っ端から機体側部のＵＳにエネルギーを溜め始めた
「おいおい、うそだろ！！こんな街なかでＵＳを！？」
防ごうと奔走するも……間に合わないか！！
が、空からの光がビンクスの邪魔に入った

「孔雀後光」

一面に広がる超閃光
すべてのパイロットが目をつぶる中、ビンクスただ一人は頑として目を見開いていた
もう、視力はない
眼球から血が噴き出し、ほほを伝っていく
だが、怒りは時に人をありえないほどに覚醒させる
ビンクスはＵＳをあきらめ、機体そのものでリオルに体当たりしはじめた！！
≪バゴンッ！！！≫
鈍い音と共に光は収縮
落下したリオルにたたみかけるように、ビンクスは再度ＵＳを起動し、転がる孔雀に打ち込む
≪キュルキュルキュルキュルキュル≫
すぐにそれは機体に激突し、先ほどとは一転、黒い閃光が辺りに飛び散った
「少将！！！！」
「蓮華少将！！！！！」
叫びも虚しく、舞い上がる砂煙のなかに見て取れるリオルは横たわっていた
「……そんな」
絶句するアリア
「少将が……あんな簡単に……」
久杉も目を丸くする
が、今度ばかりは呆けている場合ではなかった
ビンクスが久杉に標的を変えたのだ！！！！

《ゴォォォォ》
圧倒的な威圧感が辺りを支配する
それを久杉は理屈ではなく、本能で感じた
否応無く死を意識させられる
が、彼は一軍人だ
死に恐怖などしてはいけない
「くっ、そぉぉぉ！！！」
久杉は腹部ミサイルを放った
3弾のミサイルはビンクスを捕え、白煙を上げて飛んで行く
が、それはすんでの所で交わされ、建物に直撃した
「しまっ……」
言葉も途中で、久杉の意識は目の前の赤い蠍に奪われた
蠍は高々と尾を振り上げ、切っ先をギラつかせる
「ッ！！！！」
そしてそれは無情に振り下ろされた
コーティングされていない機体にそれはあっさりめり込み、アッというまに戦闘不能にさせられた
（おいおい、嘘だろ？こんなの勝てるわけ……）

「ショット沈黙、もう戦えません！！久杉くん、少将！応答してください！！」
クリフの声は2人に届いてはいたが、両者とも答えられる状況になかった
『なんてことだ、黄玉の実力がここまでとは……』
斉木ももはやただ見ているしかない
荒口も、打つ手がないようだった
そんななか、ビンクスの標的は……、アリアに向けられた

［ＳＩＤＥ津式］
（なんなんだ、みんなあっさりやられやがって……軍人だろうが！！）
先程までの恐怖は、もはや訳のわからぬ怒りになっていた
２機目を倒した赤蠍は、当たり前のように、こちらに向かって来る
だが、俺を守ってくれている（らしい）鹿は微動だにしない
（何やってる！！応戦しろよ！！）
叫ぶ（？）俺
だが、ＤＡＲＩＦはなんのアクションも起こさない

（そうしたいけど、さっきの銃撃で……、前足が……動かないのよ）
心の中で呟き、アリアは目の前の赤蠍を凝視した
焦りの滴が顔から滲みでる
（ちょっと……やばいかも……）

ジリジリと詰め寄ってくる蠍
ガゼルまでほんの数十メートルの所にまで詰め寄ったところで、蠍は動きを止めた
恐怖のみが辺りを支配する
肺の動きは不自然になり、焦点もぼやけ瞳は湿気を帯びる
（ちょっと、やべぇぞ……）
そんな彼らにシザーのミサイルが静かに向けられた
さっきまで激しく打っていた心臓は一転、止まったかのように

静まりかえる
時を刻むことをやめる秒針、吹くことを忘れた風
この世のすべてが矛盾し始めた気さえした時、事は起こった
《プシュー》
突如ガゼルの腹部が開き、中から中型火器を携えた軍人が現れたのだ！！
軍人は人工飛行装置、通称「ＰＦ」を背に装着し、こちらに向かってきた
必死の形相で軍人は手を伸ばす
なにか叫んでいるが……、聞こえない
（捕まれ……か？）
差し出された手に俺も腕を伸ばしかける
が、ふと躊躇いが頭を過ぎった
なんだか……、そう。
嫌な予感がしたのだ
ただただ、そんな感覚に見舞われた
が、軍人は躊躇いがちに伸ばした俺の腕を、半ば無理矢理に掴むと
そのままの勢いで前進し、俺をすぐ近くのシェルターのある建物の扉の前へと連れていった
またしてもなにかを言う軍人　だが、モチロン聞こえない
しかし、なんだか懐かしい感覚を覚えた
口の動きに、あるいはヘルメットの中にのぞいた涙に……
呆然とする俺の肩をポンと、どこか愛おしげに叩くと、軍人はＤＡＲＩＦへと向かって行った
だが……
《バンッ！！！》
それは、軍人が建物を離れてからすぐの事だった
青蠍のバズーカが火を噴いたのだ
砲撃は軍人の後ろの建物を粉砕

砕かれた瓦礫は、軍人の上にあたかも雨のように降り注いだ
『「アリアさん！！！！」』
斉木とクリフの叫びも……、降り注ぐレンガのがれきの前に儚く散るだけだった

23話～アリア～（後書き）

こんにちは、ジョン&ちーのジョンです。

今回の話もちょっと訳がわからない話ですね……

やはり、第三者視点の小説で視点の変化が多いと混乱をまねきますね。

まぁ、そんななかで久杉たちはもう瀕死状態です！

津式さえいなければ……（笑

さぁ、この先津式は、本部は、そして町はどうなるのか！？

次回もご期待ください。

２４話～窮地～

「ＳＩＤＥ津式」
先ほどまでの美しい外観は一変、目の前は瓦礫の山と化した
「ゴホッゴホ」
土煙をもろに吸いこんで咳き込む
（はぁはぁ……生き……てる？）
目の前の建物は崩壊したのにもかかわらず、自身のいる建物は無傷同然だった
（なんで……）
外の様子を窺おうと、足を踏み出した時……
≪ビチャ……≫
何やら液体を踏みつけた
ふと、下を見やると、足の下には不思議に輝く水たまりがあった
（銀の……液体？）
恐る恐る手を伸ばし、それに触れる
それは思ったよりも硬く、トロトロと粘り気があった
（なんだ？コレ……）
手に付いたそれをもっと見ようと顔に近づけた時
［ドクン……］
（！？）
何やら心臓が疼きだした
さっきまで死んだかのような動きを見せていた心臓が、急に生気を帯び、恐ろしいまでに鼓動が……骨の髄まで響いた
と、さらに！！！！
≪グゥゥゥゥ、ゴォォ≫
自然のものではありえない、生物の唸り声のような音が耳に届いた
はっと上を見上げる
するとそこにはあの軍人が乗っていたＤＡＲＩＦがこちらを覗い

ていた
どうやらコイツがこの建物を守ってくれたらしい
だが、傍から見れば襲われているように見えるだろう
が、俺に不思議と恐怖はなかった
むしろ安堵感を覚えた
「おまえ……」
問いかけるように声をかけると
≪クゥゥゥ≫
と、そいつは今度は促すような声をあげた
「乗れ……ってことか？」
静かにたたずむＤＡＲＩＦ
かと思うと、腹部の下に黄色い光が差し始めた
それを見た途端、別に歩こうと思ったわけでもないのに……自然に足が前に出た
ゆっくりと、ゆっくりと近づく
手を前に突き出し、光の中に入れた
すると言い知れない温かさを感じ、体は何の躊躇もなく光の中へと入って行った
（眩しい……）
手の甲で目を覆い、静かに目を閉じた
すると……
気づいたら俺は操縦桿を握り、パイロットの席……コックピットのシートに座っていた
（俺は……）
手を見つめ、ぐるっと辺りを見回した
「これが……、コックピット……」
そこかしこに様々なスイッチが乱立するそこは、あたかも異次元のような風だった
だがそのスイッチ一つ一つに、眼前に広がるスクリーンに、或いは操縦桿を握る感覚に……、先ほどの軍人に感じたのと似た感情が

沸き立った
（懐かしい）
もちろん、コックピットなんかに座ったことはない、が、なぜだろうか……
懐かしいのだ、今感じる全てが
≪グゥゥゥゥ≫
こいつが……ガゼルが鳴いた
（行こう）
意を決し、操縦桿を強く握りしめて、前に押し倒した
するとガゼルの目が黄色く強く光り
≪クォォォォォォン！！！！！≫
後ろに向き直り、前足を上げて雄たけびを上げた
「よしっ！！！！！」
俺は青蠍を捕え、狙いをつけた
青蠍は狙われているのを感じたのか、臨戦態勢に入った
そして……
≪バンバン！！！！≫
重い銃声とともにバズーカが放たれた
が、臆することなく、俺は突っ込んで行く
そして前方にセルランスを展開した

「なにを考えているでがす、コレにつっこむなんて……」
言ったのもつかの間、オリバーは信じられない光景を目にした
なんと、バズーカ砲は爆発することなく、セルランスに串刺しにされたのだ！！！！
「なっ！！！」
串刺しにされたそれはあっという間に溶解した
「とけた！？」
あまりの出来事に流石にたじろぐ、そしてそのスキを俺は見逃さなかった

スッと間合いに入り、キロロを展開、青蠍の尾をまず三分割した
「なに！？」
攻撃の要を失った敵機はあせってシザーを構えた
が、それをも……
≪ガシンッ！！！≫
後ろを向いた状態で「超高度アントラー」の先端が絡みつき動きを止め、その切れ味抜群のワイヤーでもって……
≪バキャン！！！≫
一気にバラした
「そんな……」
完全に戦意を失った相手に、とどめとばかりに俺は「2問バズーカランススラスター」を下に向けた
が、そこに赤い雄姿が飛び込んできた
「その強さ、聞いてネェぞ！！」
（コイツッ！！）
黄玉は最初からUSにエネルギーを溜め始めた
黒い雷がテラーの側面でうごめく
しかし俺は夢中だった
USの脅威など頭に入ってなかった
むしろ、エネルギー充填の為に動きが鈍る事を幸運にすら感じていた
「邪魔を……するなぁァァァ！！！」
俺が雄叫びを上げるのと同時にガゼルも高々と咆哮し、4対のUSに瞬時にエネルギーが送られた
神々しいまでの黄色の機体を悪意すら感じる黒が包み込む
そしてッ！！
≪キュルキュルキュル！！≫
放たれたエネルギーはあっという間にテラーを包み、街を2つに割った
ほとばしる一直線の黒い閃光は、街のメインストリートに沿い、

放たれた
街の大動脈といえる道は一瞬で、あの世へ続く道かのように荒れ果てた
「はぁ、くっ……はぁ……」
USの発射に伴う衝撃には凄まじいものがある
まして津式は訓練もまともに受けていない素人だ
耐えられるわけもない
コックピットには悪臭が立ち込め、気管は酸でキリキリと痛みだす
それでも必死に前をみる
と、USで刈れたメインストリートのなかに、くすんだ赤黒い色がポツンと佇んでいるのを確認できた
近くには青交じりの残骸も見て取れる
（さっきの……蠍達か……）　握ったハンドルを手放すと
《ボンッ》
ガゼルが黒煙を上げた
各部位の間接部分が崩れ落ち、ガゼルはアスファルトの上に倒れ込んだ
「はぁはぁ……」
しばらくは無心で居られた
が、それもそうは長くなかった
（俺が……、コイツを？）
いろいろと疑問はある
だが、真っ先に突き付けられたのは疑念よりも現実だった
〔自分がDARIFを動かした〕
この現実が、胸を苦しめた
（なにがどうなろうにせよ、もう、逃げられない）

［ＳＩＤＥビンクス］
「かっ……、ゴホッ！！」
あの攻撃を受けてなお、テラーと黄玉は生きながらえていた
最も、戦闘などは間違っても出来ないが……
オリバーも一応は無事なようだ
機体はもはや見る陰もないが、それでも動かすだけならなんとかなるだろう
それに不幸中の幸い、敵機も動けないでいる
追い撃ちはない、それに……　「ククク……」
俺は喉で笑った
いろいろ誤算はあったが計画通り行きそうだ
問題は、ピーター達だ
奴らが何かを企んでいるのは明白だ……、それに乗せられる俺でもない
が、このザマでは何もできん
（ココはあちらさんの１番隊２番隊に期待するしかないか……それに……）
ビンクスはコックピットでニヤッと笑うと
「行くぞ、部下（おとうと）よ」
と、呟いた
数秒後、どこか電波の届きにくいところにいるのだろうか
ひどいノイズの中から、それに答える声があがる
「ザーー……あぁ、頭……ミ…ハハ……」

［ＳＩＤＥオリバー］
機体は歪み、もはや見る影も無い
だがそんな中でも生きていた
我ながらしぶとい

だが、生き物らしい行動は何も起こせなかった
心臓は弱々しく打つだけだったし、肺も微かに膨らむだけ
生きてると言うには余りに無残な姿だった
それでも意識はあった
五感は聴力と触感を残しているようだ
声はでないがさっきから《ザーッ》という音が開きっぱなしだった通信から流れてくるし、 圧迫してくる壁を押す感覚もあった
そんな朦朧とする世界に、聞き慣れた声（いや、音と言った方がいいか）が流れ出した
こんな状況なのにも関わらず安心感を植え付けてくれるこの声は……、間違いない
「兄……者」
搾り出すように言う
が、聞こえないようだ
戦闘中なのか、向こうの騒音がひどい
《ザー……、聞こえないようだから一方的に伝える》
無線はやっとこさ拾った音をオリバーに伝えはじめた
《ザー…ｓｈｉｔ……撤退だ！！》
「撤……退……」
意表をつく返答だった
しかし今のオリバーは驚きすらまともに表現できない
《1番隊を振り切れない……、2番隊の影も今だ戦える状況にあった！！》
その言葉と同時に風が通り抜けるかのような雑音が一瞬入った
《これじゃぁそっちに向かえない！！》
爆発音がしたかと思うとそれすら切り裂くような音が再び走る
それは間違いなく……密林の暗殺者と謳われた、ヤツの俊足攻撃だ
《それに……ブツッ、ザー……》
何かを伝えようとしたところで通信は切れた
朦朧とする意識のなかで、オリバーの頭は困惑の渦中にあった

それこそピーターの言葉など頭に入らないほどに
『撤退』
その言葉だけを除いては……
あれほど行動力があり
あれほどビンクスを憎みユニクスを怨んだ兄者が
こんなにも中途半端な、何も果たしてない夢半ばで身を引くなど……
誰が想像できただろうか
（一体何が……）
そう思った矢先、この場にあるはずのない影が機体を覆った

その姿、とても華奢で弱々しく……、だがオリバーはその恐ろしさを知っていた
広がるエリマキの恐ろしさを……
「ミハハッ！！見つけたぜテメェら！！全員死にかけじゃねぇかァ！！！都合が良いぜ、全て灰になりやがれ！！！」
展開されたミルリアが橙の空を捕えた
そして空の色、は地上へと反射していく
「クッ……ＭＡＸが……なぜ……」
今、まさに己を焼き払おうとするオレンジ
加えて回避不能という現実
正気など吹っ飛んでもいい状況下で、普通の疑問が浮かんで来るあたり
流石、軍人である
「頭ァ、行きますよ！！」
その声と共にビンクスは最後の動力で地中へと潜って行ったが……
「させないっ！！」
《フィンフィンフィン》
制止に入ったのは……
「あれは……、久杉か！？」

サスペンドはテラーが地中に入る寸前
その鋭利な事を生かして足と地面を突き刺した
一瞬ではあるが、テラーの動きが止まる
しかしその一瞬が運命をかえた
《コォォォォッッ！！！》
　先程黒い閃光が走ったところに、今度は橙の光が瞬いた
　つまり……、そう
その射程範囲内に入っていたのだ
新米操縦者（パイロット）が

２４話～窮地～（後書き）

ジョン＆ａｍｐ；ちーのジョンです。
皆さんお久しぶりですね！覚えていましたか？
というか、今年ももう終わりますねー
一年間どうでしたか？今年は色々ありましたね、全国的、いや、全世界的に……
自分としてもいろいろありました。

まぁ、来年も色々と頑張っていきましょう！

面倒くさいんで内容は割愛で（笑

ではみなさん良いお年を～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4465p/

DARIF

2011年12月31日19時51分発行